

第 1 号議案

2022 年度事業報告書

自 2022 年 4 月 1 日

至 2023 年 3 月 31 日

一般社団法人 電子情報通信学会

目 次

事業報告

1. 概況	1
2. 共通事業	4
3. ソサイエティ及びグループ事業	6
4. 支部事業	10
5. 選挙	12

事業報告（附属明細書）

I. 共通事業

1. 会議に関する事項	1
2. 出版に関する事項	2
3. 総合大会に関する事項	3
4. 選奨に関する事項	4
5. 会員に関する事項	9
6. 教育活動に関する事項	12
7. 国際活動に関する事項	13
8. 学会からの情報発信に関する事項	13
9. 規格調査会に関する事項	14
10. その他の事項	14

II. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要	16
2. ソサイエティ大会に関する事項	29
3. 国際会議に関する事項	30
4. 出版に関する事項	31
5. 選奨に関する事項	32
6. 研究会等に関する事項	41
7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項	43

III. 支部事業

IV. 2022年度役員及び代議員の構成

V. 2023年度役員候補者及び代議員の選挙

2022 年度事業報告

1. 概況

昨今の社会情勢を振り返ると、新型コロナウイルス感染症の大混乱から早三年、ニューノーマルとも言われる新たな生活様式を取り入れながら、徐々に経済社会活動を取り戻しつつある中、戦争の勃発、物価の高騰、世界各地で起こる異常気象等、我々を取り巻く社会情勢は厳しいものがある。このような状況において、アカデミックな本会の意義は益々問われており、学会というピュアな立ち位置で学術を磨き、そして諸々の社会課題を解決するイノベーションを興すことが期待されている。限界打破のイノベーションにより、本会がコミュニケーションの夢とそれによって実現される豊かな未来社会に向けて挑戦し、革新的技術及びイノベーションを継続的に創出する学会として大きく飛躍することを目指し、以下の基本姿勢で活動を進めた。

1. 広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらく
2. 社会課題の解決に貢献し、新たな社会のビジョンを作成する
3. 技術倫理の向上に努め、社会に向けて発信する

本会の事業は、学会全体事業（以下、共通事業という）、ソサイエティ及びグループ事業、支部事業の三つに大別されるが、以下のような取り組みを行った。

(1) 幅広い知と融合と人材の育成、及び、会員サービス・運営の質の向上

広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらき、会員サービスのさらなる拡充を目指して、次のような施策を推進した。主な成果を以下に示す。

① 広汎な知の交流

広汎な知が交流し、新たな学術領域をひらき、社会課題の解決や新たな社会のビジョンについて、議論や意見交換ができる機会作りを促進した。そのために、研究会・大会等の魅力あるイベントを開催し、HPやメール、SNSを活用し幅広く案内、周知し、会員サービスの向上、人材育成、及び、新規会員の獲得を目指した。

② ジュニア会員制度の充実

電子、情報通信分野に若い多感な時期より興味を持ってもらい将来のリーダー育成に貢献するため、ジュニア向けHPの充実、Lineによりコラムや時季に関する情報の配信（24回）、総合大会でポスターセッションの実施、ジュニア向けwebinarを2回実施した。

③ プラチナクラブの充実

主に40歳以上の会員を対象に、学会を自己実現の場に使い、人生を通した研究者・技術者としての充実感を高めるための後援会、見学会、意見交換会等の場や、経験と知識を活かした後継者支援の機会を提供する。今年度は2回の見学会（慶應義塾大学、東京都市大学）を実施した。

④ ウェビナーシリーズの充実とビデオアーカイブ拡充

下記のシリーズを定期的に配信した。さらに、それらに加え、会長就任挨拶、研究会、大会の招待講演等を収集、アーカイブ化し、ビデオコンテンツの充実に努めた。

- (ア) IEICE ICT Pioneer Webinar シリーズ：本会がカバーする ICT に関する技術分野において、10～20 年以上にわたり活躍された、専門分野・領域の第一人者に、当該技術の現在、過去、未来を語って頂く本シリーズを継続した。今年度は 12 回実施し、毎回数 100 名の参加があった。またそれらをアーカイブ化し youtube より配信している。
- (イ) テクノロジートレンド：トピカルなテーマ、話題について、当該技術のリーダーや専門家が、現状と展望を語る。今年度は 17 本配信し、会員限定のサイトにアーカイブ化した。
- (ウ) チュートリアル：重要な技術分野について、基礎から応用まで非専門分野の方にも理解できるレベルにかみ砕いて説明する。今年度は 6 本配信し、会員限定のサイトにアーカイブ化した。
- (エ) 受賞関連（功績賞／業績賞／論文賞）：各賞の受賞者に受賞内容を 10 分程度で簡単に語ってもらう。今年度は 1 本をアーカイブ化した。
- (オ) Distinguished Lecturer (DL) による英語講演：海外会員へのサービス向上、グローバル化の一環として、DL による英語講演の配信を 12 回実施し、そのうち 10 本をアーカイブ化し youtube より配信している。

⑤ 維持員サービスの充実

本会を支えて頂く維持員の皆様に対して、感謝の意を表するため「維持員様感謝の集い」を 11 月に開催した。学会紹介、特別講演、多年表彰を実施し、本会の事業状況をご理解頂くことに努めた。また、維持員向けウェビナーとして、テクノロジートレンド、チュートリアルシリーズのライブ配信を 2 回／月のペースで実施し好評を得ている。

⑥ グローバル化

海外セクションを積極的に活用した会員サービスを提供するため、オールセクションズミーティングを通じたセクション代表者間で意見交換、情報共有を進めた。また、各セクションのホームページの充実、セクションと連携した海外での研究会の実施等、国際間交流の一層の活性化を進めた。

⑦ 会長だより

学会の近況を会長自ら言葉で会員に対して発信する会長だよりを、今年度は 1 回発行した。

⑧ 会員サービスサポート・運営体制の充実

学会業務のデジタル化の推進、最新 ICT ツールの活用により、学会業務の効率化を図った。シニア人材、学生アルバイトを活用した IEICE サポートチームにより、各種オンラインイベントの支援を進めた。

(2) 新たな時代に向けた学会の在り方

① 企業イニシアティブ分科会

ICT分野で活躍する企業は、業種を超えたDX、社会の仕組みのDX等、社会課題の解決がビジネスの主戦場になっている。そのような企業の期待に応えるために、特定の専門領域の枠を超えた議論の場、機会の提供が必要と考え、ビジネスインキュベーション分科会、AIが相互運用される社会システム検討分科会、カーボンニュートラルICT分科会を立ち上げ、具体的な分科会活動をスタートさせた。平行して、ソサイエティ大会、総合大会の大会企画、東京支部シンポジウムにおいて、これらの活動状況について報告を行った。

② 英論文誌多言語翻訳サービス

海外学会が英語一択の現状に対して、各国母国語選択は、多様性の観点で本会グローバル化の差異化要素になる。たとえば、各国語で執筆、プレゼンした内容が多言語に翻訳されることで、海外学会会員の本会へのアクセス機会増加、自国にしながら自国の言語で本会に参加できる等、海外の研究者に新しい学会との関わり方を提供できる可能性がある。このような新しい学会の形を作っていくため、今年度は、英論文誌多言語翻訳サービスの検討を中心に進め、トライアルに向けた進め方を整理した。

③ 新たな会員制度

社会の共感を得る学会、発信力のある学会に脱皮するため、学会の利用者を増やすことで、様々な分野との連携活動、会員をハブとする活動の場を拓けること等、新たな学会の形を創ることをねらい、学会の利用者を増やすという観点で、アソシエートメンバー制度、IEICEアンバサダーの制度化を図り、メンバーの募集を開始した。また、学生員制度の改善に向け、2年間限定で会費を値下げするキャンペーンを実施することにした。

④ 研究専門委員会の会計業務の集約

研究専門委員会の会計幹事の事務業務負担が大きいという問題が、2021年度理事会に若手WGから提言があり、2021年度から2年間の試行期間を通して、約半数の研究専門委員会の会計業務を事務局へ集約した。

⑤ 学会トランスフォーメーション

PoCについては以下の3つの検討を進めた。

- ・トップ研究者の対外アピールを目的にした弾丸プレゼン
- ・世界中のプロ研究者と出会うためのプロ研究者プラットフォーム
- ・会員の研究開発活動を可視化し、その知識を共有することを目的にしたモノグラフ

その他、メッセージング(チャット)・情報共有・ビデオ会議等のコミュニケーションサービスを一括提供するコラボツールのWebexアプリによる活動プラットフォームを、メンバー間の円滑なコミュニケーション環境をサポートするため、各委員会、研究専門委員会、支部に提供した。また、サイバー攻撃による情報漏洩やサービス停止のリスクを低減するため、セキュアなインフラをタイムリーにサービスとして享受できるクラウドサービスの活用について検討

を進めた。2022年度は研究会システムについてはクラウド移植を実施し、2022年8月よりクラウドシステムによる運用を開始した。

(3) 論文誌の価値向上

英文論文誌のインパクトファクター向上に向け、非会員による論文投稿、学会 HP のトップページより主要論文の紹介、論文アクセス数上位の論文の周知等のこれまで実施してきた取り組みを今年度も継続した。また、(2)②で述べた多言語翻訳サービスを英文論文誌に適用することで、海外の方が母国語で英文論文誌を参照することが出来るため、大幅なアクセス数の増加が期待でき、インパクトファクター向上につながる。今年度はこれの具体化に向け、財務委員会配下にアドホックを立ち上げ、多言語翻訳プラットフォームの選定、英文論文誌 HP の抜本改善案の検討、スケジュールの策定等の検討を進めた。

オープンアクセスについても積極的に検討を進めた。これまで、当会の Transactions Online 及び J-STAGE にて、2019年1月よりオープンアクセスオプション（オープンかクローズかは著者選択）による運用を開始、引き続き、J-STAGE において次の3誌がオープンアクセス化を実施した。（ED(2020年1月より)、EA(2022年10月より)、EC(2023年8月より開始予定)）なお、当会の Transactions Online はクローズのままである。さらに EB 誌が、2023年6月受付分より、IEEE Xplorer を利用してオープンアクセス化するよう検討を進めた。

2. 共通事業

(1) 各種会議

2022年6月9日の定時社員総会において、川添会長、森川次期会長を代表理事とする2022年度役員体制を発足させた。理事会9回開催をはじめ、理事会傘下の各種委員会等を開催し、学会の円滑な運営を行った。また、支部との連携強化を目的に、支部長が理事会にオブザーバーとして参加した。

(2) 出版

本会の「実施事業」の柱である会誌発行业務については、2022年度は、13冊、合計211,700部（月平均16,285部）を発行配布した。なお、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会からの提案により「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のテクノロジーとイノベーション」を8月号別冊特集として企画・発行した。読みやすく、親しみやすい会誌を目指して、企画を行い、特集・小特集の毎号化を実施した。

知識ベースアクセス件数は累計で7,400,000件となり広く利用されている。

出版事業として大学シリーズの重版2点、レクチャシリーズとして新刊1点、重版7点を発行した。また、紙版ではなく電子版による提供について、一部の書目で試行的に開始した。

(3) 総合大会

総合大会を2023年3月7日(火)～10日(金)に芝浦工業大学 大宮キャンパスで開催した。ハイブリッド開催のため Zoom も使用した。本年度もプログラム委員会を組織して企画・準備を行い、大会の活性化、魅力向上を図った。また、前年度に引き続き、学生と企業の情報交換

の場としてキャリア相談会を実施した。全ソサイエティ合同による Welcome Party を開催した。大会 3 日目にはプレナリーセッションを開催し、セッション内で学術奨励賞授賞式・教育功労賞授賞式・フェロー称号贈呈式を行った。参加者数 5,108 名、公募講演数 1,696 件であった。

(4) 選奨

第 84 回功績賞を 5 名に、第 60 回業績賞イ号を 3 件 5 名に、第 60 回業績賞ロ号を 3 件 7 名に、第 60 回業績賞ハ号を 1 件 1 名に贈呈することを決定した。

第 79 回論文賞を和英論文誌 8 誌から選んだ 12 編に、第 5 回最優秀論文賞をその中の最も優秀と認めた 1 編に贈呈することを決定した。

第 9 回末松安晴賞を 2 名に贈呈することを決定した。

第 85 回学術奨励賞を 41 名（基礎・境界ソサイエティ 6 名、通信ソサイエティ 23 名、エレクトロニクスソサイエティ 8 名、情報・システムソサイエティ 4 名）に対し贈呈した。

第 7 回教育優秀賞を 3 名に贈呈することを決定し、第 7 回教育功労賞を 10 名に贈呈した。

(5) 会員に関する事項

定款に基づき、名誉員に 4 名を推薦することとした。

規則に基づき、フェロー称号を 22 名に、シニア会員称号を 61 名に贈呈した。

会員数（名誉員・正員・学生員、維持員、購読会員）合計については、2022 年度末で 21,802 名となり、前年度末から 498 名の減少（うち個人会員数は、名誉員+5 名、正員-461 名、学生員-248 名、ジュニア会員+198 名）となった。

(6) 教育関連活動

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持、向上を目的とし、日本工学会の ECE プログラムの認定を受けた「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を実施した。昨年度プログラムの改善を図り、35 名の受講者を集め実施した。

JABEE の学部認定審査については、2022 年度も定常的な活動を行った。JABEE 本体へ委員を派遣して JABEE の運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系 CPD 協議会については、情報交換を中心に実施した。また、日本工学会の CPD 協議会・CPD プログラム委員会には委員を派遣して継続的に議論に参画した。

小中高校生を対象とした科学教室は、2022 年度は会員及び大学等の協力の下に実施した。開催回数は 2 回、参加者合計は 79 名であった。

(7) 国際活動

ヨーロッパセクションにて Facebook オンラインコミュニティ、北京セクションにて WeChat の運用を継続して行った。

国際委員会では、Distinguished Lecturer (DL) による英語 Webinar を継続的に実施し（12 回の配信）、それらのアーカイブを行った。

会長・副会長・国際委員会委員が出席し、国際セクション代表者と意見交換を行う場として、3/29（水）All Sections Meeting をオンライン開催した。

(8) 情報発信

2023年3月の総合大会を活用し、プレナリーセッション、全ソサイエティ合同で開催した Welcome Party、開催校による特別企画等を実施し、多くの方に発信した。ライブ Webinar として、IEICE ICT Pioneers Series を2020年6月から開始して継続し、今年度も12回実施した。Webinar コンテンツを、本会ホームページから Web ブラウザで視聴可能とした。

(9) 規格調査会

規格調査会活動として、委員会議を4回、専門委員会及び小委員会を43回開催した。国際標準化に関して取り扱った IEC 文書は70件であった。

(10) 外部機関との連携等

ICT分野では従来の範囲を超えた他分野との連携が重要となってきたこと、府省や他学会との連携活動を推進した。府省関連では、ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「Society5.0によるデジタル社会の設計構築に向けた科学技術イノベーション政策」というテーマで、内閣府、デジタル庁、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。内閣府科学技術・イノベーション推進事務局（統合戦略担当）と『「総合知」の基本的考え方及び戦略的な推進方策』について意見交換を実施した。

日本機械学会：日本機械学会2022年度年次大会先端技術フォーラムにて、連携企画セッションを実施

・情報処理学会：倫理綱領を会員に浸透させるための事例集の動画コンテンツ制作を共同で実施

・電気学会：役員懇談会において、両会の問題意識、取組状況を共有し、意見交換を実施

更に、電気・情報関連学会連絡協議会活動を継続した。また、他団体等との連携については、関連学術団体等に対して200件の協賛・後援等を行った。MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

3. ソサイエティ及びグループ事業

(1) ソサイエティ及びグループ事業

2022年度も、各ソサイエティ及びグループごとに、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に、特色のある活動を推進した。

- ① 基礎・境界ソサイエティ（ESS）は、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしており、新しい研究分野を創造するとともに、重要な研究分野を一層活性化させることに基礎・境界ソサイエティの使命があると考えている。しかしながら、昨今の会員の減少やコロナ禍における活動を考えると、研究面のみならず、ソサイエティのビジネスモデルの改革等に関しても検討することが不可欠となっている。2022年度は、2019年度にソサイエティ運営委員会の下に「サブソ・研専会議」が設けられた体制の更なる定着と発展を図るとともに、コロナ禍によって図らずも実施せざるを得なくなった、研究会のリモート若しくはハイブリッド開催の有効性を検証し、今後の改革に関する議論を推し進めた。

② 通信ソサイエティ (CS) は、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、及びその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2022年度はコロナ禍も3年目に突入し、徐々にではあるが、社会全体が通常の社会活動に戻ってきた。通信ソサイエティにおいても、昨年度まではほぼリモートでの活動であったが、2022年度に入ってから、対面型やハイブリッドの活動が増えてきた状況である。研究会活動においては、with コロナ時代の新たな研究会運営を模索する1年となった。研究会や総合大会等での発表者数が回復の方向に向かっている一方で、研究会開催の大きな役割である研究者間のネットワーキングを高めるFace-to-Faceの取り組みについては様子をみながらスモールスタートした段階である。研究領域横断型の取り組みにおいても、分野横断型研究会 MIKA 2022、RISING 2022 を継続開催した他、国際会議 ICETC 2022 を3年目にして初めて、ハイブリッドで開催した。出版活動においては、世界中の研究者が投稿し読んでもらえる論文誌を目指し、グローバル化とオープンアクセス化を同時に進めるべく、IEEE Xplore を英文論文誌 (EB) および ComEX のプラットフォームとして活用するため、IEEE と通信ソサイエティ間で契約を締結した。その結果、2023年6月以降の投稿分から IEEE Xplore へ掲載されることとなった。これにより、両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。会員事業企画においては、会員間コミュニケーションの促進に積極的に取り組んだ。総合大会における Welcome Party を3年ぶりにランチボックス形式でリアル開催した他、コロナ前並みに E メールニュースによる情報発信を実施する等、会員間の情報交流拡大に務めた。今後も、オンラインツールを活用した情報配信を活発化し、国内外の会員に対して意義ある情報を広くタイムリーに送り届ける施策の充実化に努めていく。

③ エレクトロニクスソサイエティ (以下、エレソと略す) は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員 (研究者) の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の3会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成28年度から研究技術会議内に立ち上げた3つの領域委員会 (電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会) に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2022年度は、ソサイエティ大会はオンライン開催であったが総合大会は4年ぶりの対面を交えたハイブリッド開催となった。エレソのプレナリーセッションでは研究活性化のための他分野からの情報提供を意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「カーボンニュートラル社会の実現に向けた革新的な技術の芽生え」

と題してカーボンニュートラルに向けた半導体の活用、熱エネルギー変換技術、フォトニック結晶に関する3つの特別講演、総合大会のプレナリーセッションでは、「半導体から『幸せ研究』へ」と題して、ウェルビーイングとビジネスに関する特別講演を行った。いずれも、カーボンニュートラルやウェルビーイングなど現在注目されている課題に関するものであり、情報通信エレクトロニクスの今後の展開（あらたな研究テーマ）を考えるトリガーとなることを期待している。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の提供を目指して、総合大会にて全ソサイエティ共催の **Welcome Party** をエレソが幹事となり対面で実施した。

また、継続的な取り組みとして委員会資料の集約・配布のオンライン化やリーダーズミーティング（研専幹事向けオリエンテーション）等、ソサイエティ運営の強化・効率化も進めた。なお、今年度は5回の執行委員会を含め各種委員会をオンラインとハイブリッドで開催し、アフターコロナに向けた交流の場を増やしつつソサイエティの運営を円滑に進めている。

- ④ 情報・システムソサイエティ（ISS）は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2022 年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。
- ⑤ NOLTA ソサイエティ（NLS）では、国際会議等の実行組織が円滑に手続きを進めるための事務処理要綱の改定など、規程類の見直しを行った。また、COVID-19 の感染状況や世界情勢などを考慮しつつ、国際会議等の準備状況や方針の確認を各回の委員会にて定期的に行った。
- ⑥ ヒューマンコミュニケーショングループ（HCG）は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由で開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、他分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入り口的役割を果たしている。2022 年度は、運営委員会はほぼオンラインで開催したが、各研究会、HCG シンポジウムではハイブリッド開催が企画・実施された。COVID-19 の拡大防止に配慮し、学会の指針に従って安全な開催を心がけた。論文誌での特集号の企画を通じて、学際研究の発表・議論の場を提供するための活動を行った。財務状況改善のため HCG シンポジウムの収益増を検討し、三種研の在り方を議論した。

(2) ソサイエティ大会

- ・ソサイエティ大会を 2022 年 9 月 6 日(火)～9 日(金)の 4 日間、オンラインで開催した。参加者 3,480 名、公募講演数は 1,013 件であった。
- ・FIT2022 (第 21 回情報科学技術フォーラム) を情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して、2022 年 9 月 13 日(火)～15 日(木)に慶應義塾大学矢上キャンパス (ハイブリッド開催) で開催した。参加者 2,181 名 (現地来場者 685 名)、講演件数は 538 件であった。

(3) 国際会議

12 件の国際会議を開催した (現地 4 件、オンライン 1 件、ハイブリッド 7 件)。

(4) 論文誌等出版

- ・和・英論文誌 8 誌のオンラインジャーナルを以下のとおり公開した。
 - ◇ 和文誌：掲載総ページ数： 2,207 ページ (参考：前年 2,515 ページ)
 - ◇ 英文誌：掲載総ページ数： 5,817 ページ (参考：前年 6,398 ページ)
- ・ソサイエティごとの電子ジャーナルとして、NOLTA (NOLTA ソサイエティ：年 4 回)、ComEX (通信ソサイエティ：月 1 回)、ELEX (エレクトロニクスソサイエティ：月 2 回) をそれぞれ発行した。
- ・各ソサイエティ及びグループから、それぞれニューズレターやソサイエティ誌が出された。

(5) 選奨

- ・基礎・境界ソサイエティ：功労賞 1 名、貢献賞 33 名
- ・NOLTA ソサイエティ：特別功労賞 1 名、功労賞 1 名、貢献賞 3 名
- ・基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ：Fundamentals Review ベストオーサー賞 1 編
- ・通信ソサイエティ：ソサイエティ論文賞 11 編、マガジン賞 1 編
- ・エレクトロニクスソサイエティ：ソサイエティ賞 3 件、レター論文賞 1 件、ELEX Best Paper Award 3 件、招待論文賞 1 件、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 総合大会 6 名、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 ソサイエティ大会 6 名
- ・情報・システムソサイエティ：ソサイエティ論文賞 1 編、活動功労賞 6 名、査読功労賞 10 名、ジュニア&学生ポスターセッション優秀ポスター賞 3 名、ジュニア&学生ポスターセッション特別賞 3 名、ジュニア&学生ポスターセッションジュニア奨励賞 2 名、船井業績賞 1 件、船井ベストペーパー賞 3 編、FIT 論文賞 8 編、FIT ヤングリサーチャー賞 8 名
- ・ヒューマンコミュニケーショングループ：ヒューマンコミュニケーション賞 5 件、HCG シンポジウム賞 16 件

(6) 研究会

各ソサイエティ、グループで開催された第一種研究会の開催数と発表件数は下記のとおり。(ただし共催、連催等の場合は、それぞれで重複集計。)

・基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ	103 回	2,128 件
・通信ソサイエティ	139 回	2,270 件

・エレクトロニクスソサイエティ	81回	1,173件
・情報・システムソサイエティ	113回	1,828件
・ヒューマンコミュニケーショングループ	20回	342件

(7) 会員数 (2022年度末)

・基礎・境界ソサイエティ	4,021名
・通信ソサイエティ	7,710名
・エレクトロニクスソサイエティ	4,081名
・情報・システムソサイエティ	7,697名
・NOLTA ソサイエティ	295名
・ヒューマンコミュニケーショングループ	792名

4. 支部事業

国内 10 支部（北海道、東北、東京、信越、東海、北陸、関西、中国、四国、九州）は、各地域に密接した活動として、支部（連合）大会、各種講演会、シンポジウム、見学会、学生向け・小中高生向けのイベント、学生会活動、選奨等の事業を展開した。各支部の活動概要は以下のとおり。

(1) 北海道支部

- 一般事業：講演会 4 件。支部連合大会 1 回（オンライン）。専門講習会 1 回、総務省と意見交換会。
- 教育事業：応用物理学会企画の小中高生向けイベントの共同主催。
- 学生会事業：学生会主催講演会 3 件、学生見学会 1 件、学生会研究発表会（インターネットシンポジウム）1 回、学生ランチ活動として講演会開催。支部連合大会で学生交流会を企画。
- 選奨：学生奨励賞 10 名、学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞 3 名、支部学生ランチ顧問表彰（発表賞）3 名、支部学生ランチ顧問表彰（貢献賞）1 名、支部連合大会若手優秀論文発表賞 11 名

(2) 東北支部

- 一般事業：講演会 7 件（オンライン）、支部連合大会 1 件（オンライン）、協賛・講演事業 4 件。
- 教育事業：小中高生向け事業 3 件開催。
- 学生ランチ活動：東北大学学生ランチ活動。
- 選奨：学生優秀論文賞 2 名、学生優秀発表賞 5 名、優秀学生表彰 21 名、学生会活動貢献賞 2 名。

(3) 東京支部

- 一般事業：オンライン／ハイブリッドの開催形態を柔軟に採用し、シンポジウム 3 回を開

催。また、見学会 1 回を実施。

- 教育事業：学校、企業、NPO と連携した共同主催の教育イベントを公募し 3 件を採択（新型コロナウイルス感染症の影響により、現地開催 1 件、オンライン実施 1 件、中止 1 件）。
- 学生会事業：講演会 1 回（オンライン）、見学会 1 回（オンライン）を開催。学会誌 12 月号「学生会だより」の記事執筆。学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、研究発表会（オンライン）を開催（発表件数 135 件、うちジュニア会員 9 件）。学生ブランチの 5 校が子供科学実験教室、講演会、交流会を実施。
- 選奨：学生奨励賞対象者 12 名、学生功労賞 3 名。

（4）信越支部

- 一般事業：支部大会 1 回(オンライン)、講演会 3 回（新潟地区 1 回、長野地区 2 回）。
- 学生会事業：研究交流会 1 回開催（新潟大・オンライン）。
- 選奨：学生奨励賞 14 名、ベストプラクティス賞 3 研究室。

（5）東海支部

- 一般事業：講演会 2 回(ハイブリッド、オンライン)、見学会（中止）、小中高校生向け理科教育講座 1 回、専門講習会 1 回(オンライン)、女子学生向けイベント 1 回（オンライン）、支部連合大会 1 回(オンライン)。
- 学生会事業：講演会 2 回、学生研究発表会 2 回、卒業研究発表会。
- 選奨：学生研究奨励賞 15 名、卒業研究発表会表彰 8 名、学業成績優秀賞 26 名。

（6）北陸支部

- 一般事業：支部大会 1 回(オンライン)。講演会 3 回。
- 学生会事業：研究交流会 1 回開催。
- 選奨：学生奨励賞 14 名、ベストプラクティス賞 3 名。

（7）関西支部

- 一般事業：講演会 1 回（オンライン）、見学会 1 回、講習会 2 回開催。
- 教育事業：講演会 1 回。学校、企業、NPO と連携した共同主催の教育イベント(開催見送り)。
- 学生会事業：講演会 1 回、研究発表会 1 回開催。
- 選奨：学生会奨励賞 6 名、優秀論文発表賞 5 名、学生会功労賞 13 名。

（8）中国支部

- 一般事業：講演会 15 回（うち 1 回主催、14 回共同主催）、見学会 1 回、専門講習会 0 回、シンポジウム等の協賛 4 回、電気記念日行事共催、支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：学生向け講演会及び見学会 1 回（主催 1 回）。フレッシュ IT あワード 2022 イベント、支部ホームページの維持、管理、改訂。
- 選奨：連合大会奨励賞 21 名、優秀卒業生表彰（高校・高専・短大）58 校 90 名、学生功労賞 10 名

(9) 四国支部

- 一般事業：専門講習会 2 回、支部協賛・後援事業 2 回、支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：学生向け講演会 3 回開催。3 校の学生ランチが講演会や見学会等の活動を実施。
- 選奨：電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞 50 名

(10) 九州支部

- 一般事業：特別講演会 1 回（オンライン）、一般講演会 3 回開催。協賛・後援の講演会/シンポジウム 12 件。専門講習会 1 回開催（ハイブリッド）、アンテナ伝搬研究会と共催でワークショップ 1 回開催（オンライン）、支部連合大会 1 回（オンライン）、総合通信局連携企画 1 回。
- 教育事業：子供の科学教室 1 回、ものづくり教室 1 回、科学体験プロジェクト開催中止。
- 学生会事業：学生会講演会 1 回（オンライン）、学生ランチ交流会の実施。11 ブランチが講演会や交流会実施。
- 選奨：連合大会講演奨励賞 8 名、学生会講演奨励賞 13 名、成績優秀賞（学生）64 名、学術奨励賞 27 名

5. 選挙

2023 年 2 月 7 日～3 月 7 日に、Web 投票により 2023 年度役員候補者及び代議員の選挙を実施した。2023 年度代議員として 106 名が選ばれた。

以上

2022 年度事業報告（付属明細書）

I. 共通事業

1. 会議に関する事項（定款 第 4、6、9 章）

1. 1 2022 年定時社員総会

2022 年 6 月 9 日（木）午後 2 時から機械振興会館において 2022 年定時社員総会を開催した。代議員総数 109 名に対し、出席代議員数 99 名（委任状を含む）で、定款第 19 条に定める代議員総数の過半数に達した。石田会長を議長として以下議案を付議して、審議事項はいずれも原案どおり可決承認された。

- 第 1 号議案 2021 年度事業報告
- 第 2 号議案 2021 年度決算（審議事項）及び監査報告
- 第 3 号議案 公益目的支出計画実施報告及び監査報告
- 第 4 号議案 2022 年度事業計画
- 第 5 号議案 2022 年度収支予算
- 第 6 号議案 新理事・監事の選任（審議事項）

1. 2 理事会

年度内に 9 回の理事会を開催した。

1. 3 理事会傘下の委員会等の開催状況

- ・企画戦略室：7 回
- ・選奨委員会：0 回
- ・論文賞・学術奨励賞委員会：メール審議 4 回
- ・教育賞委員会：2 回
- ・シニア会員審査委員会：メール審議 1 回
- ・ロードマップ委員会：0 回
- ・男女共同参画委員会：2 回
- ・アドホック会合：13 回
- ・大会委員会：4 回
- ・編集連絡会：4 回
- ・出版委員会：0 回、メール審議 1 回
- ・ハンドブック／知識ベース委員会：8 回
- ・財務委員会：5 回
- ・研究会連絡会：4 回
- ・教科「情報」の入試に関する検討 WG：4 回
- ・若手 WG からの提言に対する検討アドホック：0 回
- ・倫理委員会：メール審議 4 回
- ・功績賞・業績賞委員会：2 回
- ・末松安晴賞委員会：1 回
- ・フェローノミネーション委員会：1 回
- ・コミュニケーション委員会：0 回
- ・ア krediyation 委員会：メール審議 1 回
- ・サービス委員会：6 回
- ・国際委員会：3 回、メール審議 1 回
- ・著作権管理委員会：2 回、メール審議 3 回
- ・会誌編集委員会：6 回
- ・教科書シリーズ特別委員会：2 回
- ・支部会議：2 回
- ・規格調査会委員会：4 回

1. 4 その他の会議等

- ・名誉員・歴代会長を囲む懇談会：2022 年 10 月 17 日 Web 会議(EventIn)で開催。

2. 出版に関する事項

2. 1 会誌の発行状況（定款 第4条 イ号）

全会員に共通の場として重要なメディアである会誌は、2022年4月から2023年3月まで13冊、合計211,700部（月平均16,285部）を発行配布した。なお、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会からの提案により「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のテクノロジーとイノベーション」を8月号別冊特集として企画・発行した。

読みやすく、親しみやすい会誌を目指して企画・編集を行い、特集・小特集の毎号化を実施した。

電子化の対応としては、更に使用しやすいアプリとなるよう検討を行い、会誌アプリv5をリリースし、毎月順調に会誌記事を配信した。

2022年度の会誌記事の内容・件数及びページ数は次のとおりである。

種 類	件数	ページ数	種 類	件数	ページ数
4月小特集 (極限環境の計測を支える回路とシステム技術)	6	32	講 演	2	6
5月特集 (深層学習は情報・システムの研究をどう変えたか)	18	92	編集長退任にあたって	1	5
6月小特集 (マイクロ波・ミリ波を用いた生体計測の最新動向)	6	33	解 説	31	202
8月小特集 (5G/Beyond 5Gを実現する技術——フロントエンドデバイスから仮想化まで——)	9	66	講 座	3	23
8月別冊特集 (東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のテクノロジーとイノベーション)	50	300	総 合 報 告	0	0
9月小特集 (ドローン活用の今)	8	43	ジュニア会員のページ	3	7
10月小特集 (機械学習を活用したネットワーク監視・予測・制御技術の最新動向)	5	29	寄 書	0	0
11月特集 (シリコンフォトニクスを用いた光通信素子の研究開発最新動向)	15	100	回 想	0	0
12月小特集 (電子スピンの回路とシステムへの応用)	6	35	学生/教養のページ	6	22
1月特別小特集 (画像の高画質変換技術の最新動向)	7	38	オピニオン	2	12
2月小特集 (データセンターネットワークの最新動向)	6	39	コラム	1	3
3月小特集 (電子情報通信技術のもたらす社会・個人への影響——倫理	11	47	ニュース解説	22	43
			ニュースフラッシュ	0	0
			ソサイエティのページ	6	11
			EiC記事	1	5
			情報社ト-今学会では-	0	0
			学生会だより	10	32
			予 定 目 次	13	2
			学会ニュース	0	0
			慶 賀	2	2
			追 悼 抄	7	7
			国 際 会 議	13	6
			図 書 紹 介	22	11
			国内文献目次		2
			図書寄贈一覧		
			本会だより		18
			編 集 室	12	12
			役員等口絵		8
			総会・選奨		114
			フェロー口絵		2
			会誌総目次		14
			会 報		0
			会 告	12	85
			そ の 他	3	0
			計		1,508
			巻 頭 言		12

綱領改定に向けて――)	目 次	36
	合 計	1,556

*その他：広告（カラー、前付等）68 ページ

2. 2 ハンドブック（定款 第4条 ト号）

知識ベースアクセス件数（累計）は、740 万件で広く利用され続けている。また、2023 年度以降は維持員向けサービスとして希望に応じてサイトにバナー広告を掲載することとした。

また、知識ベース 2.0 として、2023 年 4 月号から会誌に「知識の森」欄を新設、毎号 2 件、年間 24 件の記事を掲載することとした。コンテンツについては、各ソサイエティ・グループを通じて研究専門委員会からの提案を基に 1 年間分の内容を検討した。あわせて、2.0 としての新サイトの在り方も検討した。

2. 3 単行本（定款 第4条 ト号）

2023 総合大会（芝浦工業大学）会場において図書注文受付を行った。また、監査法人からの指導に従い適切な在庫整理を行った。

2. 4 教科書「電子情報通信学会大学シリーズ」（全 59 巻）（定款 第4条 ト号）

重版 2 点を発行した。（コロナ社委託出版）（昭和 55 年 8 月第 1 回配本以降既刊書目 52 点）

2. 5 教科書「電子情報通信レクチャーシリーズ」（全 64 巻）（定款 第4条 ト号）

大学院及び学部の学生を対象とし、併せて一般勉学者の参考に供するための教科書シリーズとして新刊 1 点、重版 7 点を発行した。（コロナ社委託出版）

新刊書は次のとおりである。

新 刊 書 名	発行年月日	ページ数	部数
コンピュータプログラミング —Pythonでアルゴリズムを実装しながら問題解決を行 う—	2022.4.28	208	1,000

（2002 年 3 月第 1 回配本以降通算 40 点）

また、紙版ではなく電子版による提供について、一部の書目で試行的に開始した。（コロナ社委託出版）

なお、従来の教科書委員会（1999 年 7 月設置）を解散、次期シリーズについては、教科書の是非も含め検討することとし、教科書シリーズ特別委員会を設置した。

3. 総合大会に関する事項(定款 第4条 ロ号)

下記の期日・会場において 5 ソサイエティ(ヒューマンコミュニケーショングループは基礎・境界ソサイエティに含まれる)が合同して、ハイブリッドで開催した。

期 日 2023 年 3 月 7 日(火)～10 日(金)

会 場 芝浦工業大学 大宮キャンパス(埼玉)・Zoom

参加者 10,216 名

懇親会 生協・食堂棟

Welcome Party 大学会館 2 階 グローバルラーニングコモンズ

I S S 企画のジュニア&学生ポスターセッションについては、154 件の講演を行った。

期 日：2023年3月7日(火)～8日(水)
 会 場：齋藤記念館 1F 展示スペース

(a) 企画セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ					合 計
		基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	情報・システム	
大会委員会企画	3	—	—	—	—	—	3
ソサイエティ特別企画	—	1	1†	2	1	3†	8
パネルセッション	—	1	0	1	0	0	2
チュートリアルセッション	—	2	1‡	4‡*	2*	0	9
依頼シンポジウムセッション	—	3※	0	11※§	7§*	2	23
合 計	3	7※	2†‡	18‡※§*	10§*	5†	45

(2023年)

- ※ 基礎・境界と通信の共催企画1件を含む。
- * 通信とエレクトロニクスの共催企画1件を含む。
- † NOLTAと情報システムの共催企画1件を含む。
- ‡ NOLTAと通信の共催企画1件を含む。
- § 通信とエレクトロニクスの共催企画1件を含む。

(b) 公募セッション講演数

	ソサイエティ					合 計
	基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	情報・システム	
一般セッション	199	32	826	273	306	1636
シンポジウムセッション	0	0	55	0	5	60
合 計 [共催含む]	199	32	881	273	311	1696

4. 選奨に関する事項 (定款 第4条 ホ号、へ号)

今年度の各選奨は所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり受賞者を決定した。

4. 1 功績賞 (第84回)

上田 修功 (NTT)
 齋藤 洋 (東大)
 松山 泰男 (早大)
 村岡 裕明 (東北大)
 横矢 直和 (奈良先端大)
 以上5名

4. 2 業績賞 (第60回)

【選奨規程第9条イ号】

(業績の50音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
光線空間法に関する先駆的研究	藤井 俊彰 (名 大)

シリコンフォトニクス集積光回路技術の先駆的研究	山田 浩治 (産総研) 土澤 泰 (産総研) 福田 浩 (千歳科学技術大)
複雑系数理モデル学の基礎理論構築とその応用に関する先駆的研究	合原 一幸 (東 大)

【選奨規程第9条ロ号】

(業績の50音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
安全なIoT機器を実現する楕円曲線暗号に関する先駆的研究	宮地 充子 (阪 大)
パスワードレス個人認証方式の国際標準化と商用システム開発	五味 秀仁 (ヤフー) 山口 修司 (ヤフー) 伊藤 雄哉 (ヤフー)
光ファイバ伝送によるアクセス系多チャンネル映像配信(CATV)システムの研究開発、及び国際標準化と実用化・導入	菊島 浩二 (富山大) 吉永 尚生 (元NTT) 池田 智 (NTT西日本)

【選奨規程第9条ハ号】

(業績の50音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
情報通信技術を活用した教育実践への貢献	西原 明法 (東工大)

4. 3 論文賞 (第79回)

(分冊別掲載年月順・敬称略)

A	論文名 著者名 掲載年月	Optimal Control of Timed Petri Nets Under Temporal Logic Constraints with Generalized Mutual Exclusion 藤田 浩平 (三菱電機), 潮 俊光 (阪大) 2022年5月号 (EA)
A	論文名 著者名 掲載年月	Proximal Decoding for LDPC Codes 和田山 正 (名工大), 高邊 賢史 (東工大) 2023年3月号 (EA) 早期公開 (2022年9月1日)
A	論文名 著者名 掲載年月	Concatenated Permutation Codes under Chebyshev Distance 川隅 元博 (日本経済新聞社), 笠井 健太 (東工大) 2023年3月号 (EA) 早期公開 (2022年9月21日)
B	論文名 著者名 掲載年月	NLOS環境における複数UAVを用いた単一波源位置の最ゆう推定手法 村田 真一, 松田 崇弘 (都立大), 西森 健太郎 (新潟大) 2022年3月号 (B)
B	論文名 著者名 掲載年月	BOTDA-Based Technique for Measuring Maximum Loss and Crosstalk at Splice Point in Few-Mode Fibers 小田 友和, 中村 篤志, 飯田 大輔, 押田 博之 (NTT) 2022年5月号 (EB)
B	論文名 著者名 掲載年月	Energy-Efficient KBP: Kernel Enhancements for Low-Latency and Energy-Efficient Networking 藤本 圭, 名取 廣, 金子 雅志, 白神 彰則 (NTT) 2022年9月号 (EB)
C	論文名 著者名 掲載年月	X-Band GaN Chipsets for Cost-Effective 20W T/R Modules 神岡 純, 河村 由文, 幸丸 竜太, 半谷 政毅, 加茂 宣卓 (三菱電機), 小寺 哲夫 (東工大), 新庄 真太郎 (三菱電機) 2022年5月号 (EC)
C	論文名 著者名 掲載年月	13.56MHz Half-Bridge GaN-HEMT Resonant Inverter Achieving High Power, Low Distortion, and High Efficiency by 'L-S Network' 大矢根 蒼, Thilak SENANAYAKE (名大), 増田 満 (古河電工), 今岡 淳, 山本 真義 (名大) 2022年9月号 (EC)
C	論文名 著者名	高精度 TDR による基板配線不良位置の非破壊解析 小山 雅紀 (サムスン電機), 篠原 誠 (アドバンテスト), 金 貞我, 池 受玲, 崔 大徹 (サムスン電機)

	掲載年月	2022年9月号(C)
D	論文名 著者名 掲載年月	Effects of Image Processing Operations on Adversarial Noise and Their Use in Detecting and Correcting Adversarial Images Huy H. NGUYEN (総研大), 栗林 稔 (岡山大), 山岸 順一, 越前 功 (NII) 2022年1月号(ED)
D	論文名 著者名 掲載年月	複数時間解像度特徴量を用いた複数識別器出力を統合する音声感情識別手法 藤村 浩司 (東芝) 2022年3月号(D)
D	論文名 著者名 掲載年月	Time-Multiplexed Coded Aperture and Coded Focal Stack -Comparative Study on Snapshot Compressive Light Field Imaging 立石 航平, 都竹 千尋, 高橋 桂太, 藤井 俊彰 (名大) 2022年10月号(ED)

((A)、(B)、(C)、(D) : 和文論文誌、(EA)、(EB)、(EC)、(ED) : 英文論文誌、所属は:掲載時)
以上12編

4. 4 最優秀論文賞 (第5回)

(敬称略)

論文名	NLOS環境における複数UAVを用いた単一波源位置の最ゆう推定手法
著者名	村田真一, 松田崇弘, 西森健太郎
掲載年月	2022年3月号(B)

以上1編

4. 5 末松安晴賞 (第9回)

(敬称略)

カテゴリ	受賞者(所属)	研究・開発の題目
学术界貢献	五十部孝典(兵庫県立大)	次世代共通鍵暗号の研究開発と社会展開
産業界貢献	大神 渉(ヤフー)	パスワードレス個人認証の研究開発、国際標準化および商用化

以上2名

4. 6 学術奨励賞 (第85回)

基礎・境界ソサイエティ: 6名

(50音順)

受賞者	所属(発表時)	講演題目	大会別	講演番号
阿部 浩太郎	東大	スカラー倍算におけるサイドチャネル攻撃対策効果について	ソ大	A-19-1
岩田 翔吾	阪大	非凸問題に対する交互方向乗数法の分散エネルギー管理システムへの応用	総大	A-10-6
川出 有紗	名城大	空間多重低輝度アップリンク OCC の緑/青と赤/緑2波長多重伝送	総大	A-9-7
		空間分割多重4PPMを用いたスクリーンカメラアップリンク通信	ソ大	A-9-4
北澤 太基	奈良先端大	漏えい電磁波の伝達特性の差に着目した高解像度ディスプレイに対するTEMPESTの検討	総大	A-19-6
鯨井 慎也	法政大	ヒステリシスニューラルネットの2目的最適化問題について		
福島 悠生	工学院大	デプスカメラとステレオマイクロホンを用いた配管損傷位置の推定に関する検討	総大	A-5-3
		座標系の異なるデプスカメラとステレオマイクロホンを用いた配管損傷箇所的位置推定に関する検討	ソ大	A-5-1

通信ソサイエティ：23名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
秋山 良太	NHK	ISDB-S3 の 32APSK 伝送における衛星中継器動作点の検討	ソ大	B-3-26
大戸 琢也	KDDI 総合 研究所	5G ミリ波通信に適用した IRS 制御方式に関する一検討	総大	B-5-29
大沼 晃浩	日立	ローカル 5G と既設ネットワークの相互接続におけるモバイルルータ利用時の IoT 機器識別技術	ソ大	B-6-33
金正 英朗	NTT	セルラー網におけるトラヒックデータに基づくチルト角最適化フレームワークの提案	総大	B-11-26
呉 超	NTT	観測数を考慮した階層ベイズモデルに基づく無線基地局のスループット推定モデル構築手法の提案	ソ大	B-11-7
		ユーザ体感品質を考慮したサーバリソース制御手法	総大	B-11-11
小島 駿	東大	Web 会議のサーバリソースを最適制御する会議振り分け高速化検討	ソ大	B-14-6
		敵対的生成ネットワークによる受信信号データセットの拡張	ソ大	B-5-9
小原 日向	NTT ドコモ	高高度プラットフォーム (HAPS) による 5G 網と連携した 38GHz 帯の無線通信システム開発ー地上ネットワーク設備の利活用による新規 HAPS システム構成ー	総大	B-3-20
小山 大輝	KDDI 総合 研究所	自律的ネットワーク運用のための 5GC スケールアウト構成検討	ソ大	B-16-17
酒井 優	NTT	マイクロサービスにおける障害注入データを利用した障害識別の検討	総大	B-14-20
		監視間隔の動的変更を併用した傾向変化検知方式の提案	ソ大	B-14-8
清水 新平	NTT	PPLN 導波路を用いた光パラメトリック増幅器の増幅帯域拡張に関する一検討	ソ大	B-10-28
瀧川 将弘	KDDI 総合 研究所	高周波数帯上りリンクにおける多重軸変換システム	総大	B-1-187
竹澤 和輝	KDDI 総合 研究所	IRS の反射パターン形成によるユーザ端末方位推定手法の一検討	総大	B-5-116
立野 翔真	NEC	海底ケーブルにおける SDM 伝送システムでの伝送容量拡大	総大	B-10-10
		双方向 6 コア MCF 海底光ケーブルシステムにおける伝送容量拡大	ソ大	B-10-4
田中 康就	NTT	AMCC 信号の電気重畳と光重畳による信号品質の影響に関する分析	総大	B-8-4
辻井 明日香	日本特殊陶業	超音波センサアレイを用いる低速走行時障害物検出システム的设计	総大	B-15-16
中島 康雄	日立	中心周波数の異なる超音波センサを用いた低速走行障害物の観測	ソ大	B-15-37
		鉄道及び WiMAX 環境におけるスループットのクラス分類及び解析	総大	B-11-8
長谷川 拓哉	ソフトバンク	5G HAPS 無線中継システムにおける自動利得制御に関する基礎検討	総大	B-17-1

		HAPS無線中継システムの自動利得制御に関する実験評価	ソ大	B-17-4
平川 昂	ソフトバンク	並列接続された整流回路の電流電圧特性に関する実験	ソ大	B-20-14
福間 恵	三菱電機	2つのチャープ信号を用いたDS-SS初期捕捉のレイリーフェージング環境下の特性評価	総大	B-5-125
古谷 航一	三菱電機	周波数拡散シールドの試作評価結果	ソ大	B-4-11
堀 勇太	三菱電機	チャープ拡散FSK方式における送信ダイバーシティ手法の比較	総大	B-5-127
宮坂 拓弥	三菱電機	双方向指向性を有する金属カバー付アンテナの2周波共用化	総大	B-1-82
和井 秀樹	NTT	高周波数帯分散アンテナシステムにおけるビーム組合せ履歴に基づくビーム探索数削減法の伝送容量改善に関する検討	総大	B-5-69
		高周波数帯分散アンテナシステムにおけるビーム組合せ履歴に基づくビーム探索数削減法の実験的評価	ソ大	B-5-52

エレクトロニクスソサイエティ：8名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
久楽 顕	三菱電機	周波数選択性並列帰還回路を用いたC-Ku帯GaN MMIC低雑音増幅器	ソ大	C-2-2
齋木 研人	三菱電機	スイッチング型GaNエンベロープ増幅器の出力電圧最適化によるエンベロープ・トラッキング増幅器の高効率化の検証	総大	C-2-15
佐藤 孝憲	北大	III-V/Siハイブリッド集積光デバイスに向けた非対称方向性結合器の多段接続による高効率結合構造の検討	総大	C-3/4-20
相馬 豪	東大	垂直入射型コヒーレント光受信器の実証	総大	C-3/4-22
増山 圭	三菱電機	グリッドフリーWDMシステム向け量子ドット多波長レーザの無温調動作実証	ソ大	C-3/4-26
森田 佳恵	三菱電機	複数の高調波を利用した位相差検出の高精度化についての原理検証	総大	C-2-50
山栄 大樹	横浜国大	Delay-line clockingを用いた断熱量子磁束パラメトロン8-bit加算器の動作実証	総大	C-8-11
山岡 優	NTT	可逆量子磁束パラメトロン回路を用いた8-word by 4-bitレジスタファイルの動作実証	ソ大	C-8-2
		SiC基板上直接変調メンブレンレーザの85°Cにおける光子-光子共鳴効果により増強された74GHz帯域の実証	ソ大	C-3/4-42

情報・システムソサイエティ：4名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
-----	-------------	------	-----	----------

井上 智裕	早大	テキスト情報とグラフ情報を考慮した埋め込み	総大	D-20-16
大峠 仁輝	九大	Self-Attention による非局所構造の利用状況解析	総大	D-12-18
齋藤 雄太	KDDI 総合研究所	隣接子ノードの占有状態を利用したイントラ予測による点群圧縮	総大	D-11-13
森瀧 瑞希	阪府大	英語空所補充問題の自動生成	総大	D-15-31

4. 7 教育優秀賞 (第7回)

(50音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
井上 克郎 (南山大)	情報技術人材の育成拠点 (enPiT) の構築と普及
小田まり子 (久留米工大)	数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの開発および実践
杉山 昭彦 (ヤフー)	信号処理技術の実践的教育並びに効率的な論文執筆法の開発と普及

計 3 名

4. 8 教育功労賞 (第7回)

(50音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
木村 雄一 (埼玉大)	アンテナ伝搬基礎講座の伝送線路理論講師としての貢献
佐々木宣介 (県立広島大)	学生会イベント「フレッシュ IT あわ〜ど」への長年の支援活動
陳 強 (東北大)	アンテナ伝搬基礎講座の電磁気学分野講師としての貢献
陳 春平 (神奈川大)	マイクロ波研究専門委員会「学生研究発表会」の活発化への貢献
中川 泰宏 (千葉工大)	子供の科学教室講師としての貢献
中村守里也 (明大)	光通信システム研究会サマースクールの講師および運営への貢献
橋本 邦寛 (タムラ製作所)	東京支部公募教育イベント「ものづくり教室」の主催への貢献
山下 秀一 (アスパーク)	技術者教育認定活動における審査への貢献
山中 直明 (慶大)	東京支部公募教育イベント「子供向け科学教室」の主催への貢献
米谷 竜 (オムロンサイニックエックス)	パターン認識・メディア理解研究会「研究メンターシッププログラム」立案・運営への貢献

計 10 名

5. 会員に関する事項 (定款 第3章)

5. 1 名誉員の推薦

定款の定めにより以下の4名を名誉員に推薦した。

小川 博世 (NICT)
黒田 徹 (元 NHK)
杉山 昭彦 (ヤフー)
松島 裕一 (早大)

5. 2 フェロー称号の贈呈

[基礎・境界ソサイエティ: 3名]

贈呈者氏名	貢献内容
-------	------

石浦菜岐佐	論理設計の自動化およびコンパイラのテストに関する先駆的研究
関屋 大雄	非線形解析技術を用いた高周波電源設計に関する研究
高島 克幸	代数曲線理論に基づく高安全・高機能な暗号構成の先駆的研究

[通信ソサイエティ：7名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
相田 仁	複数経路通信方式の研究及び情報通信政策における指導的役割
足立 朋子	無線 LAN の国際標準化推進及び国内外への普及
有吉 正行	動的周波数共用及びレーダ応用セキュリティシステムの研究開発
石川 博康	無線通信システムのユーザ位置検出法と高速伝送技術の研究開発
石橋 圭介	インターネット安定運用に向けたトラヒック品質の計測分析の研究
木下 和彦	通信・計算資源の一元管理によるネットワークサービス基盤の研究
小西 聡	衛星・固定・移動通信用無線資源割当に関する研究開発と実用化

[エレクトロニクスソサイエティ：4名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
臼井 博明	物理蒸着による高分子製膜の新展開と有機エレクトロニクス応用
柴山 純	高効率陰的 FDTD 法の先駆的研究
山崎 恆樹	電磁界の高精度解析手法の構築とその応用に関する研究
山田 誠	光ファイバ増幅器の低雑音化および広帯域化の先駆的研究と実用化

[情報・システムソサイエティ：8名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
川村 正樹	情報統計力学の情報処理モデルへの応用に関する研究
小林 哲則	ロボットを用いたマルチモーダル多人数会話研究に対する貢献
坂野 鋭	解釈性の高いパターン認識に関する貢献
佐藤 洋一	コンピュータビジョンによる物体と人物行動のモデリング
中谷 智広	音声強調・認識のための遠方場音響信号処理
西 宏章	広帯域スイッチの開発と高機能スイッチの社会実装の推進
三宅 優	電気通信システムのセキュリティ研究開発、および、標準化展開
和田 俊和	コンピュータビジョン,パターン認識の実用的アルゴリズムの開発

5. 3 シニア会員称号の贈呈

[基礎・境界/NOLTA ソサイエティ：24名]

荒井伸太郎	荒木 章子	岩本 貢	日下 卓也	小西 啓治
小林 学	新保 淳	陶山 健仁	高橋 俊彦	谷本 洋
常田 明夫	鳥飼 弘幸	夏目季代久	野上 保之	福島 和英
藤沢 匡哉	堀内 俊治	松下 春奈	松嶋 智子	宮北 和之
武藤 浩二	山西 健司	吉田 隆弘	和田山 正	

[通信ソサイエティ：6名]

川原 圭博	侯 亜飛	佐々木 力	村岡 一志	山下 真司
吉兼 昇				

[エレクトロニクスソサイエティ：10名]

石川 亮	大久保賢祐	大平 昌敬	河口 民雄	小林 一哉
------	-------	-------	-------	-------

進藤 隆彦 中西 泰彦 馬場 俊彦 平山 浩一 森 竜雄

[情報・システムソサイエティ：21名]

大江 和一 大西 淳 岡田 真人 小口 正人 小篠 裕子
 加藤 晴久 加藤ジェーン 神原 誠之 黒川 茂莉 小林 隆志
 小松 佑人 竹内 一郎 竹内 広宜 中川 博之 中村 哲
 灘本 明代 西村 仁志 長谷川まどか 林 晋平 横川 智教
 吉田 真紀

5. 4 会員の現況

2022年度末の会員数の減少は2021年度との前年度末と-498名の差となった。

なお、継続的取組みとして、(1)会費滞納会員に対して継続的な会費請求の実施の他、新規取組みとして2023年度及び2024年度の学生会員の年会費を3,000円とするキャンペーンを実施することをサービス委員会で決定した。また、非会員に本会のイベント情報等を周知することで、本会への興味を促し、入会のきっかけとすべく、アソシエイトメンバー制度を新規に創設した。

(1) 会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数

会員種別	名誉員	正員	学生会員	ジュニア会員	購読会員	維持員	合計
2021年度末 会員数	98[75]	19,370 [857]	2,241	172	283	136	22,300[932]
2022年度末 会員数	103[79]	18,909[859]	1,993	370	284	143	21,802[938]
前年度末との差	5 [+4]	-461[+2]	-248	+198	+1	+7	-498 [+6]

(注) 名誉員の釜江尚彦氏は2022年1月9日、下村尚久氏は2022年3月29日、佐々木元氏は2022年6月21日、古井貞熙氏は2022年7月31日、戸田 巖氏は2022年9月28日に逝去した。

(2) 各支部における年度末会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数

会員種別 支部	名誉員	正員	学生会員	ジュニア 会員	購読 会員	維持員	合計
北海道	2 [2]	373 [12]	66	14	5	3	457 [14]
東北	10 [5]	626 [46]	61	20	10	1	724 [51]
東京	66 [50]	11030 [551]	796	176	133	104	12261 [601]
信越	1 [1]	360 [11]	63	3	9	4	439 [12]
北陸	6 [5]	1224 [50]	195	11	30	13	1478 [55]
東海	[0]	354 [8]	64	11	6	0	431 [8]
関西	14 [13]	2321 [118]	278	66	32	15	2682 [131]
中国	[0]	641 [19]	135	21	9	0	791 [19]

四 国	【0】	309【8】	49	22	3	1	373【8】
九 州	2【2】	923【29】	169	26	11	2	1121【31】
海外在中	2【1】	748【7】	117	0	36	0	903【8】
合 計	103【2】	18909【859】	1993	370	284	143	21660【938】

5. 5 学生事業に関する事項（定款 第4条 へ号）

(1) 会誌「学生会だより」欄の掲載記事

各支部学生会・学生ランチの活動状況等を会誌「学生会だより」欄に掲載した。

(2) 学生ランチについて

ホームページに学生ランチ設置校の活動紹介記事及び設置申込みから報告書作成までの資料、流れを掲載し、学生ランチ設置校の拡大を図った。

支部活動として実施するため、設置校の申請、報告を各所属支部を通じて受け付けた。

6. 教育活動に関する事項（定款 第4条 ロ号、ハ号、へ号）

教育関連サービス（生涯教育の意味の検討、活性化、内容のアップデート、CPDの啓発・利活用、電子情報通信分野へ子供への興味を持たせる教育の検討などを含む）に関しては、サービス委員会の所掌として以下のような活動を行った。

6. 1 学会主催の技術講座に関する事項

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持・向上を目的として、2020年度に「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を開設した。このプログラムはスクーリング形式の教育プログラムで、産業界・学界から最先端の研究・開発を進めておられる方々を講師として招き、今後中核となる若手技術者に電気電子通信領域で必要となる高度な技術・知識を身につけて頂くことを目的としており、2022年度は35名が受講した。

6. 2 技術者教育認定活動（日本技術者教育認定機構：JABEEの一員としての活動）

JABEEの学部認定審査については、2022年度も定常的な活動を行った。JABEE本体へ委員を派遣してJABEEの運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

6. 3 技術者の継続的な教育・能力開発

CPD情報の管理については、電気学会・情報処理学会と連携した試行システムから、よりコスト効率のよいASP型システムへの切り替えを2015年10月に行って以来、2022年度も運用した。また、本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系CPD協議会については、情報交換やCPD制度の有用性訴求に関する連携を中心とした活動を行うこととしているが、2022年度は打ち合わせを1回開催した。

我が国においてCPDプログラムを中心的に行っている日本工学会のCPD協議会・CPDプログラム委員会に、委員を派遣して継続的に参画した。

6. 4 IEICE 先端セミナーの新設

これまで電子情報通信分野の第一人者に、話題のテーマにおける現状と展望を講演頂く「テクノロジートレンドシリーズ」と、重要なテーマに関して非専門家向けに基礎的な内容から最新技術までを解説頂く「チュートリアルシリーズ」の Webinar を実施してきた。この両シリーズのコンセプトに基づく教育講座「IEICE 先端セミナー」の企画を検討した。2023 年度から実施予定としている。

6. 5 小中高校生を対象とした科学教室

小中高校生を対象とした科学教室は、2022 年度は会員及び大学等の協力の下に実施した。開催回数は 2 回、参加者合計は 79 名であった。

7. 国際活動に関する事項（定款 第 4 条 へ号）

7. 1 国際セクションの活動

(1) 各セクションにおける講演会等の実施件数

セクション	件数	セクション	件数
バンコク	0	上海	0
北京	0	シンガポール	0
韓国 (Communication)	0	台北	0
韓国 (Electronics)	0	ヨーロッパ	0
韓国 (Information)	0	インドネシア	0
ベトナム	0	マレーシア	0

合計 0 件

(2) 国際セクションが主催・共同主催した国際会議 なし

(3) 国際セクションホームページ

ヨーロッパセクションにおいて Facebook オンラインコミュニティ、北京セクションにおいて WeChat の運用を継続して行った。

7. 2 国際委員会活動

国際委員会では、英語 Webinar を継続的に実施し、動画のアーカイブを行った。

7. 3 All Sections Meeting

次期会長・副会長・国際委員会委員が出席し、国際セクション代表者と意見交換を行う場として、3月 29 日（水）All Sections Meeting をオンライン開催した。

8. 学会からの情報発信に関する事項（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

8. 1 総合大会の場の活用

2023 年 3 月の総合大会では、プレナリーセッション、全ソサイエティ合同で開催した Welcome Party、企業イニシアティブ委員会の提案による、「企業から求められる学会への変革～企業イニシアティブ活動の紹介～」、相澤副会長による、スペシャルセッション「特別企

画「次世代を担う、日本のテック系スタートアップ 第 2 弾」、開催校によるスペシャルセッション「特別企画：パネルディスカッション 脱炭素社会に向けた DX への期待」「特別企画：デモ展示 芝浦工業大学先端技術展示会」を実施し、多くの方が参加された。

8. 2 IEICT ICT Pioneers シリーズ (Webinar)

ライブ Webinar への最初の取組みとして、IEICE ICT Pioneers Series を 2020 年 6 月から開始した。毎回多数の聴講申込みがあり、諸事情によりライブ配信を聴講できなかった方からオンデマンド配信の希望も多いため、Webinar コンテンツをアーカイブ化し、本会ホームページから Web ブラウザで視聴可能としている。

9. 規格調査会に関する事項 (定款 第 4 条 二号)

規格調査会会議を 4 回、専門委員会及び小委員会を 39 回開催した。国際標準化に関して取り扱った IEC 文書は 70 件であった。

委員会名		委員長名	委員数		開催数
規格調査会委員会		浅谷 耕一	20		4
専門委員会名		専門委員長名	専門(委)	小(委)	開催数
1	通信用伝送線及びマイクロ波受動部品	岸川 諒子	11	38	12
2	周波数制御・選択・検出デバイス	作田 幸憲	21	82	4
3	光ファイバ	大橋 正治	42	63	5
4	電子実装技術	高橋 満	18	0	4
5	無線通信用送信装置および受信装置	小川 博世	21	22	10
6	電子通信用語	—	0	0	0
7	電子通信記号	—	0	0	0
8	複雑システムの安全検討委員会	—	0	0	0
9	標準化教育検討委員会	中西 浩	15	0	4
合 計			128	205	39

10. その他の事項

10. 1 外部機関との連携に関する事項 (定款 第 4 条 四号、八号)

(1) 関連他学会との連携

電気・情報系関連 5 学会とは 2004 年に「電気・情報関連学会連絡協議会」を発足させ、協力してきている。2022 年度も、2 回の定例会議を開催し、各学会の会員数動向、財務問題、情報システムの課題を含め諸活動状況の報告に加え、会員増強の取組み、公益目的支出計画の課題、大会活性化への取組み等に関して情報交換・情報共有を行った。

電気学会については、企画戦略室を中心に意見交換を継続した。2023 年 2 月に両会長をはじめとする電気学会 6 名、本会 7 名による役員懇談会を実施した。日本機械学会 2022 年度年次大会先端技術フォーラムにおいて、連携企画セッションを実施した(現地参加 35 名、オンライン参加 100 名)。

(2) 関連学術団体との連携

2022 年度は、関連学術団体等に対する協力・連携活動として、200 件の協賛・後援等を行った。

(3) 府省との連携

ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「Society5.0によるデジタル社会の設計構築に向けた科学技術イノベーション政策」というテーマで、内閣府、デジタル庁、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。内閣府科学技術・イノベーション推進事務局（統合戦略担当）と『『総合知』の基本的考え方及び戦略的な推進方策』について意見交換を実施し、内閣府は当会との意見交換を含めた有識者議論向け報告を行った。2023年1月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員、支部長ら21名との第14回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。

(4) モバイルコンピューティング推進コンソーシアム(MCPC)との相互協力

MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

Ⅱ. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要

2022年度も、各ソサイエティ及びグループごとに特色のある企画等を実施し、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に活動した。

1. 1 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティは、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしており、新しい研究分野を創造するとともに、重要な研究分野を一層活性化させることに基礎・境界ソサイエティの使命があると考えている。しかしながら、昨今の会員の減少やコロナ禍における活動を考えると、研究面のみならず、ソサイエティのビジネスモデルの改革等についても検討することが不可欠となっている。2022年度は、2019年度にソサイエティ運営委員会の下に「サブソ・研専会議」が設けられた体制のさらなる定着と発展を図るとともに、コロナ禍によって図らずも実施せざるを得なくなった、研究会のリモートもしくはハイブリッド開催の有効性を検証し、今後の改革に関する議論を推し進めていく。

(1) 新会議体制の定着

2019年度に設けられたサブソサイエティ・研究専門委員会に関する議論を行う「サブソ・研専会議」の設置によって、必要に応じた検討内容の会議間の移行によって重複議論の回避ができ、効率的にソサイエティ運営ができるようになってきた。2022年度もこの体制を維持し、ソサイエティ全般に亘る事項の議論をより適切に行うとともに、研究専門委員会の活性化、サブソサイエティの編成の議論も活発に行った。

(2) サブソサイエティの活性化

基礎・境界ソサイエティは、新しいソサイエティの創造のためにサブソサイエティ制を導入しており、2015年度には NOLTA がサブソサイエティからソサイエティとなり独立した。ソサイエティとしての独自活動により、研究分野の拡大やプロモートの強化、それらを通じた会員の増加が期待される。NOLTA ソサイエティは基礎・境界ソサイエティと共同運営の形態を取りつつも、そのソサイエティ活動の独立性は担保されている。NOLTA ソサイエティの独自の活動や基礎・境界ソサイエティとの共同運営を効果的に利用してシナジー効果を生み出すことによって、海外会員を含めた上で会員増加に結びつける必要がある。

現在、基礎・境界ソサイエティには3つのサブソサイエティがあり7研究専門委員会がその3つのサブソサイエティに属している。一方、サブソサイエティに属していない研究専門委員会が12あり、必ずしも基礎・境界ソサイエティ内においてサブソサイエティ制が浸透しているとは言えない。そこで2022年度はサブソ・研専会議を通じて、既存のサブソサイエティのさらなる活性化を図ることと、新たなサブソサイエティ創造に関する議論を深めた。具体的にはサブソサイエティによる、研専事務の共通化の議論などが考えられる。現在、会員減少による若手会員への負担増加の問題が顕在化しており、この問題への対応が喫緊の課題となっている。そこで、ひとつのサブソサイエティに属する研専の間で共通化可能な事務作業を洗い出し、それらをサブソサイエティが負担することで研専の事務作業を軽減する可能性を探る。そのサブソサイエティに属する研専は対象とする研究分野が似ているため、こうした作業が比較的容易に行え、これによって既存のサブソサイエティ自体の活性化や、サブソサイエティ化を介した研専の融合／統合、さらには新たな研専の創造への議論が深まることが期待される。

(3) グローバル化と国外会員へのサービスの充実

国外会員へのサービスのひとつとして、基礎・境界ソサイエティのアクティビティを毎月メールによって情報発信を行っている。

国外からの英文論文誌への論文投稿数を増加させるために、国外におけるジャーナル論文の書き方セミナーを継続的に実施する。2020年度から2022年度はCovid-19の影響で実施できなかったが、これまでこのセミナーを4か国22回開催し、参加者の延べ人数は1,800名を超え、基礎・境界ソサイエティの代表的な事業へと成長した。2014年度から始めた国外におけるIEICE-ESS論文編集・査読活動

紹介セミナーも継続し、IEICE-ESS の論文誌の投稿・掲載・編集・出版のプロセスを知ってもらい、編集において査読委員と編集委員がどのような立場でどのような役割を果たしているかを理解してもらう。そのことによって、国外査読委員の拡充や英文論文誌の小特集を中心に国外編集委員を増加させるなど、論文誌の編集に関わるグローバル化を図る。

更に 2022 年度は、国際セクションやシスターソサイエティとの国際会議共催など共同企画の実施や、国外の学会との連携企画などについても議論を進めた。

(4) 論文誌・機関誌の充実

基礎・境界ソサイエティでは、和英論文誌に加え、2014 年 10 月から NOLTA ソサイエティとの共同機関誌として **Fundamentals Review** を発行している。**Fundamentals Review** は良質の解説論文に定評のある機関誌であり、**Fundamentals Review** ベストオーサー賞を設けてその解説論文の中から毎年 1 論文の著者を授賞している。この解説論文の質の高さを考えると、例えば、授賞論文については和文論文誌への掲載、もしくは英文論文誌における解説論文等への翻訳掲載することの検討を進める。

論文誌、機関誌は研究者に対して最も重要なサービスであり、その価値の向上は永続的な課題である。英文論文誌 **EA** は 2022 年 10 月から **J-STAGE** 上においてオープンアクセスとなったことで、今後より多くの論文などで引用される機会が増えることが期待される。また 2022 年度には、編集作業の効率化や上質の招待論文の掲載など、種々の施策を推し進め、コンテンツの質の向上とともに論文誌の知名度を上げ、インパクトファクターなどの指標の向上を図るための施策について議論も深めた。企業や大学では、出版された論文が業績としてカウントされるためには、その論文が掲載された論文誌が文献データベースでインデックスされていることが必要とされる場合がある。そこで和文論文誌 **JA** では、**Scopus** でインデックスされるためにフォーマットの変更も行っており、早期の登録を目指す。

(5) 研究会の円滑な運営

基礎・境界ソサイエティでは 2019 年度に技報の完全電子化を実施し、2020 年度に技報アーカイブを学会の共通システムへ移行した。2020 年度から 2022 年度は Covid-19 の影響でほとんどの研究会がオンラインもしくはハイブリッド開催されているが、2022 年度においては一部、対面のみで開催も実施された。特に 2022 年度はこれからの研究会の運営形態の在り方や、技報が電子化された状態での研究会の円滑な運営、参加費、掲載料、参加者のアクセスしやすさ等についての検討を行った。加えて、前述の研専の事務手続きの簡略化や共通化についても議論を深めた。

また、2022 年度より通信ソサイエティが保有するハイブリッド型研究会セットについて、空きがあれば他ソサイエティの研専でも使用可能という運用が始まっているが、別途基礎・境界ソサイエティでも NOLTA ソサイエティと共同でハイブリッド研究会実施のための機材を保有・運用する方針を議決した。2022 年度は基礎・境界ソサイエティの特定研専において試験運用を行い、マニュアル整備など運用ノウハウの蓄積・整理・共有を進めた。試験運用を経て **ESS-NLS** 共有の機材として適当ということになれば、次年度以降にもう一式追加購入し、計 2 セットの機材で本格運用を予定している。

(6) その他の活動

2012 年度から実施している基礎・境界ソサイエティの活動に貢献した人々の表彰制度を円滑に継続する。また、本ソサイエティでは、学会共通会議の遠隔会議化に先立ち TV 会議システムを導入してきた。2020 年度から 2022 年度は Covid-19 の影響により対面による会議実施が難しく **Zoom** 等による遠隔会議が数多く実施され、オンラインでの会議が定着しつつある。そこで、2022 年度は資料データベース化の推進など、実質的な議論を効率良く行うための形態について議論を深めた。

1. 2 通信ソサイエティ

通信ソサイエティは、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、及びその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2022 年度はコロナ禍も 3 年目に突入し、徐々にではあるが、社会全体が通常の社会活動に戻ってきた。通信ソサイエティにおいても、昨年度まではほぼリモートでの活動であったが、2022 年度に入ってから、対面型やハイブリッドの活動が増えてきた状況である。

研究会活動においては、with コロナ時代の新たな研究会運営を模索する1年となった。研究会や総合大会等での発表者数が回復の方向に向かっている一方で、研究会開催の大きな役割である研究者間のネットワーキングを高めるFace-to-Faceの取り組みについては様子を見ながらスモールスタートした段階である。研究領域横断型の取り組みにおいても、分野横断型研究会MIKA 2022、RISING 2022を継続開催した他、国際会議ICETC 2022を3年目にして初めて、ハイブリッドで開催した。

出版活動においては、世界中の研究者が投稿し読んでもらえる論文誌を目指し、グローバル化とオープンアクセス化を同時に進めるべく、IEEE Xploreを英文論文誌(EB)およびComEXのプラットフォームとして活用するため、IEEEと通信ソサイエティ間で契約を締結した。その結果、2023年6月以降の投稿分からIEEE Xploreへ掲載されることとなった。これにより、両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。

会員事業企画においては、会員間コミュニケーションの促進に積極的に取り組んだ。総合大会におけるWelcome Partyを3年ぶりにランチボックス形式でリアル開催した他、コロナ前並みにEメールニュースによる情報発信を実施する等、会員間の情報交流拡大に務めた。今後も、オンラインツールを活用した情報配信を活発化し、国内外の会員に対して意義ある情報を広くタイムリーに送り届ける施策の充実化に努めていく。

以下、今年度の活動の詳細を記す。

(1) 財務管理

通信ソサイエティの2022年度の収入は18075万円、支出は16645万円であり、1430万円の黒字の見込みである。2021年度との比較では、収入、支出いずれも増加しており、収支は、2021年度の1860万円から430万円の黒字減少となる。各事業の2022年度の収支見込みの概要を述べる。出版活動においては、論文誌は400万円の赤字、ComEX誌は200万円の黒字の見込みである。研究会活動においては、2022万円の黒字を見込んでいるが、2021年度と比較すると、収入減・支出増で872万円の黒字減少となる。ハイブリッド開催が増え、支出が増えたことが要因と思われる。全国大会(総合大会、ソサイエティ大会)の収支は298万円の黒字の見込みである。国際会議の収支はICETC開催の影響もあり、478万円の黒字の見込みである。ソサイエティ誌の収支は55万円の赤字の見込みで、赤字幅は2021年度と同程度である。通ソ活性化活動準備金については、1件の提案に対し予算執行された。

2023年度の予算案は、606万円の赤字予算である。2022年度の決算見込みとの比較では、収入が約5285万円減、支出が2720万円減となり、全体としての規模は縮小している。変動の大きな要因は国際会議開催による収益が期待できないためと思われる。また、2017年から2022年度までの予算案の収支を見ると、赤字と黒字を繰り返す傾向となっているが、これは、会員数の減少などの要因により収入・支出の実績が縮小トレンドにあるのに対し、予算計画時にこのトレンドを組み込めていないために、予算と実績の差が非常に大きくなっているものと思われる。今後は、これまでの収入・支出の実績の傾向を踏まえた予算立案の検討が必要である。

通ソの活動活性化が必要な時期であり、財務とのバランスを取りながら、活性化に向けた活動への投資を進めていきたい。

(2) 研究専門委員会

2022年度の研究専門委員会による研究会活動は、with コロナ時代の新たな研究会運営を模索する年度となった。年度前半から対面とオンラインのハイブリッド型研究会が主流となり、参加者数の安定的な増加に加えて、年度後半になってからは発表者数も回復の方向に向かっており、活発な活動による大きな成果が得られた。一方で、研究会開催の大きな役割である研究者間のネットワーキングを高める取り組みや、海外の研究者とのつながりについては、懇親会の開催がまだまだ難しいことや、海外開催の研究会の開催が本格的に再開できない中、コロナ前に戻る途上にあると言えよう。分野横断の取り組みも複数専攻が合同で取り組むワークショップや第三種研究会の開催など、活発な活動が行われており、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議ICETCにも研究専門委員会として、当該分野の専門性を活かした招待講演への貢献などその成功に寄与している。大会も2023年総合大会よりハイブリッド型開催となり、各研究専門委員会の特徴のある企画が再開されるなど、全般的に2022年度はコロナ前の賑わいが戻る途上として重要な年度になったものと考えている。

(2-1) 新型コロナウイルス感染症の感染継続期での研究会運営

1. 分野横断的な研究会の活性化

通信ソサイエティでは、研専間の連携による研究活動の活性化に取り組んでいる。例えば、第二種研究会等のイベント企画に通信ソサイエティの名称を付与し、広い研究分野からの参加を促している。例えば、国際ワークショップ Asian Wireless Power Transfer Workshop (AWPT) 2022 や情報ネットワーク研究会とネットワークシステム研究会の合同ワークショップが本制度を利用し開催された。

また、第三種研究会である革新的無線通信技術に関する横断型研究会 (Multiple Innovative Kenkyukai Association for wireless communications: MIKA)、超知性ネットワーキングに関する分野横断型研究会 (Cross-Field Research Association of Super-Intelligent Networking: RISING) が、合計 5 回の研究会・講演会 (発表・講演数合計 167 件、参加者延べ 528 名)、1 回の大会企画 (講演数 4 件、参加者 160 名) を実施し、分野横断的なテーマについて、活発な討議を行った。

更に、通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした通信ソサイエティフラグシップ国際会議 ICETC はこれまでオンラインで開催されてきたが、ICETC2022 では早稲田大学においてハイブリッド開催し、参加登録者 212 名、現地参加者 160 名となった。各研専から 37 名が技術プログラム委員として参加するとともに、研専委員長 27 名がテクニカルアドバイザーとして運営に貢献、研専による招待講演 17 件を推薦し、会議の成功に貢献した。

2. ハイブリッド開催/オンライン開催の取組み

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が断続的に繰り返された 2022 年度も、多くの研究会が Zoom などを用いたオンラインと対面を同時に行うハイブリッド開催で実施され、2022 年 4 月～2023 年 2 月の期間で、122 回のハイブリッド研究会と 17 回のオンライン研究会が開催された。発表件数は 1792 件であり、新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前の 80%程度となり、回復基調が継続している。オンライン参加可能な研究会は手軽に参加できることや通ソの研究会に参加できる一括年間登録が普及したことにより、新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前の 130%程度の参加者があり、昨年度と同じ程度となっている。

(2-2) 研究専門委員会の変更

2022 年度は、通信ソサイエティの基幹分野を担う 20 の研究専門委員会と新規分野を担う七つの特別研究専門委員会が活発な研究会活動を行った。2022 年度で三つの特別研究専門委員会の設置期間が満了となるが、(1) 情報指向ネットワーク技術特別研究専門委員会 (ICN 特別研専)、(2) デジタルサービス・プラットフォーム技術特別研究専門委員会 (DPF 特別研専) について、それぞれの特別研究専門委員会から延長申請があり、研専運営会議での審議の結果、これらは全て承認された。期間は 2023 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日である。(3) ネットワーク仮想化特別研専 (NV 特別研専) は設置期間満了で活動終了となった。また、コミュニケーションシステム (CS) 研専から研究トピックス変更の申請があり、審議の結果、2023 年 4 月 1 日からの変更が承認された。

(2-3) 活性化資金関係

研究会活動の活性化と会員増強を図るための研専運営活性化資金に対して、下記の 3 件の企画の応募について研専運営会議での審査を経て採択された。

1. 既存文献の電子アーカイブ化による会員囲い込み及び増強を促すための施策 (AP 研専)
2. コロナ禍/後のバーチャル型 EMC 設計対策コンテストによる研究会活性化 (EMCJ 研専)
3. ハイブリッド環境におけるディスカッションを促進するカンファレンスシステムの構築 (IN 研専)

これら活動については計画どおりに実施し、実施後に研専運営会議内での紹介と報告を行い、その効果の確認や施策の水平展開を図っている。

(2-4) 研究会開催実績

2022 年度は 2 月までに、第一種研究会を 122 回 (講演数合計 1792 件) 実施した。研専、特別研専併せて 40 回の第二種研究会を実施し、技術の普及や新たな技術に対する展開を図った。なお、第一種研究会の 122 回のうち、オンライン開催は 17 回、ハイブリッド開催は 105 回であった。

(2-5) 大会活動実績

2022年ソサイエティ大会（オンライン）では、一般セッション 20 分野／公募シンポジウム 5 課題合わせて講演数 626 件と企画セッション 15 課題を実施した。2023 年総合大会（ハイブリッド）では、一般セッション 20 分野／公募シンポジウム 7 課題合わせて講演数 880 件と企画セッション 18 課題を実施した。総合大会での Welcome Party は大会会場にて、全ソサイエティ合同で、3 年ぶりに対面を実施した。研専紹介は、若手会員・学生員が IEICE の重要な構成組織である研究専門委員会を身近に感じていただけるよう、パネル展示の形態で実施した。ポスターを貼り出して、若手会員や他研専の方々と交流することができた。通ソとしては、8 研専が研専紹介に参加した。研専紹介の他に、企業プレゼンやランチボックスの無料提供が行われ、約 200 名の参加となり盛況だった。

(2-6) 研究会連絡会

研究会連絡会は、研究会に関する課題についてソサイエティ・グループ横断で情報共有し意見交換する場であり、通信ソサイエティからも継続的に参画している。本年度も、研究会のオンラインと対面のハイブリッド開催の課題や実施例に関して他ソサイエティ・グループと意見交換を行うなど、研究会運営に関する諸課題について議論を行った。通信ソサイエティからはハイブリッド型研究会のための機材について各研専で共有して使うためのセットを用意し、これを他のソサイエティ・グループへも提供した。また、通信ソサイエティで検討している研専幹事団へのインセンティブや研究会発表参加費免除についての施策、研専会計事務の学会事務局への集約トライアルについての情報を提供した。情報システムソサイエティが進めている第一種研究会における外部資金の受け入れについては、通信ソサイエティの立場から積極的な意見を言うことで、全ソサイエティ・グループにおいて実情に合わせた運用ができるガイドラインの作成に貢献した。

(3) 出版活動

EB および ComEX の論文をオープンアクセスとし、IEEE Xplore に掲載する件について、IEEE との契約交渉が完了し、2023 年 6 月 1 日以降の投稿分から IEEE Xplore へ掲載されることとなった。IEEE Xplore への掲載開始は 2024 年 2 月以降 (EB)／2023 年 10 月以降 (ComEX)となる。さらに、2023 年 6 月より ComEX にインパクトファクタが付くことが決定した。これらにより、EB 及び ComEX 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。2009 年 3 月から総合大会／ソサイエティ大会で継続的に開催している「論文の書き方講座」は、毎回聴講者から好評を博しており、オンライン開催でも多数の参加があった。また、英文論文誌をはじめとする通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けて、各種施策を実施した。オープンコール特集号企画トライアルは、より柔軟で魅力ある特集号企画の実現を目指した施策である。さらに、編集会議推薦発表を開始した。編集会議推薦発表は、論文誌に掲載された優れた論文の著者を研究会等での発表に推薦する施策である。通信ソサイエティが主催の国際会議 ICETC 2022 では編集会議から推薦した 9 件の招待講演が実施された。推薦論文制度に関しては、2 年間のトライアル運用を経て本運用に移行し、国際会議 ICETC 2022 の優れた発表に対しても論文誌への推薦を実施した。

(4) 本部論文賞候補、および、通信ソサイエティ論文賞

2021 年 10 月から 2022 年 9 月までの間に通信ソサイエティの論文誌に早期公開された論文の中から、本部論文賞候補 3 編を選定した。これら 3 編の中で最も支持を集めた論文を最優秀論文賞候補とした。また、通信ソサイエティ論文賞として、同期間に和英論文誌、和文マガジンおよび ComEX に掲載された論文の中から、優秀論文賞 2 編、チュートリアル論文賞 2 編、Best Paper Award 4 編、Best Tutorial Paper Award 1 編、ComEX Best Letter Award 1 編、和文マガジン論文賞 1 編の計 14 編を選定した。また、通信ソサイエティマガジン賞を 1 編選定した。選定された 15 編の著者に対しては、2023 年 9 月のソサイエティ大会にて表彰が行われる予定である。

(5) 国際会議

(5-1) 通信ソサイエティフラグシップ国際会議 ICETC2022

2022 年 11 月 29 日～12 月 1 日の 3 日間、電子情報通信学会ソサイエティ主催によるフラグシップ国際会議 2022 International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC 2022) を早稲田大学 国際会議場 井深大記念ホールおよびオンラインにて開催した。通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした国際会議であり、通信ソサイエティ執行委員会、研専運

営会議、研究専門委員会、編集会議等の通信ソサイエティを運営する会議体が連携・協同し準備・実施した。

参加者 212 名（内現地参加者約 160 名）、Keynote 6 件、Invited/Special セッション 27 件、一般投稿からの Oral セッション 30 件、Short Presentation セッション 105 件の発表があった。優れた論文・優れたプレゼンテーション・活発な投稿に対して、Best Paper Award 2 件、Best Short Presentation Award 4 件、Student Presentation Award 19 件、Outstanding Contribution Award 3 件を授与した。

Keynote 講演は IEICE オンデマンド Webinar アーカイブとして一般公開した。また、Oral セッション、Short Presentation セッションの全原稿も IEICE Proceeding Series 上でオープンアクセスとして公開した。

(5-2) ICETC2022 以外の国際会議

2022 年度においては、通信ソサイエティ（研究専門委員会を含む）が主催・共同主催の国際会議 3 件が開催された。その他、13 件の国際会議に対し技術協催、3 件の国際会議に対し協賛を行った。この結果、通信ソサイエティが関与した国際会議は 2021 年度 15 件に対し 19 件であった。主催・共同主催の国際会議数は 2020 年度及び 2021 年度にて各々 2 件であることに対して、2022 年度は 3 件であり、例年通りの開催件数となった。2023 年度については 2022 年度末の時点で 11 件の国際会議への関与が予定されている。

主催・共同主催・技術協催向けの国際活動資金の活用実績は 7 千円、余剰金は 79.3 万円である。国際会議の開催準備費用補助を目的とした主催・共同主催団体向けの資金貸与制度については、活用実績無しであった。

(6) 国際活動（シスターソサイエティ協定について）

通信ソサイエティでは 6 団体（IEEE ComSoc（米国）、IEEE EMCS（米国）、KICS（韓国）、KIEES（韓国）、VDE/ITG（ドイツ）、CIC（中国））とのシスターソサイエティ協定を締結している。お互いの海外会員増強を目的とした海外でのプロモーション活動や会費相互減免制度などにおいて協力を実施している。2022 年度は、IEEE ComSoc と 1 年半かけて契約更新、KICS と契約内容の見直しを行った。また 2023 年度は KIEES、CIC との契約更新を実施予定である。また、締結済のシスターソサイエティ協定を有効活用し、通信ソサイエティの論文誌や研究会・国際会議等の活動について海外へのプロモーション活動による会員獲得活動を強化していく。

(7) ホームページ・会員サービス

ホームページについては、2020 年度のホームページの刷新以降、国際会議案内、CS アーカイブサービス等への安定的なアクセスに加え、最近では 2023 年 6 月 1 日に控えた IEEE Xplore との連携に向け、6 月 1 日以降の著者への情報のページへのアクセスが増加している。CS アーカイブサービスでは、例年通り、2022 年総合大会ならびに 2022 年ソサイエティ大会における通信ソサイエティ企画セッションの講演資料の一部を閲覧できるサービスを実施した。これらの資料はそれぞれ 5 月中旬、11 月下旬に公開している。E メールニュースでは、研専企画や国際会議、出版物目次などを含め、2022 年度は合計 60 件（2021 年度は 71 件）とコロナ禍前の水準（50 件程度）を上回る配信を行っている。新型コロナウイルス感染症の未曾有の経験を経て、ハイブリッド開催によるイベント開催が定常化しつつある。今後も、その利便性の高さからオンラインツールを活用した情報配信が活発化していくことが予想され、サービス向上や利用者拡大の検討を行っていく所存である。

(8) 通信ソサイエティ Welcome Party

Welcome party は、学生会員や若手会員の方々が、諸先輩方と自由にコミュニケーションできる場の提供を目的として 2008 年から始まり、2022 年度が 14 回目となる。2017 年度からは全ソサイエティ合同での開催と規模を拡大してきたが、2019 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止を余儀なくされた。2020 年度は緊急事態の状況下であっても会員同士の交流の場が失われてしまわないよう、通ソ単独にてオンラインによる開催、2021 年度は通ソが主導し、全ソサイエティ合同でのオンライン開催を行った。2022 年度は総合大会のハイブリッド開催の決定を受け、対面での Welcome Party 開催を基本方針に企画・立案した。開催にあたって、感染状況に応じて対面からオンラインへ移行しやすいイベントとして、前年度のオンライン開催で好評を得た企業紹介をメイン企画とし、また、密な接触を避けるため、飲食（とくにアルコール）を伴う交流は実施せずに代わりに無料のランチボックスの提供を検討した。実施内容の基本的な骨子はコロナ禍前の 2017 年度のを踏襲し、学生会員・若手会員と学会との繋がり強化を目的とし、メイン企画

である企業ショートプレゼン(10社参加)、企業とのキャリア相談会に加えて、各ソサイエティから有志で募った研専によるポスター展示(23研専参加)を実施した。本会副会長の開会挨拶から始まり、エレス会長の挨拶により Welcome Party を閉会した。参加者は事前登録の105名に加えて当日参加者も含めると総勢200名に上り、当初の予定を上回る賑わいをみせた。終了後のアンケート結果では、会場の手狭さに関するコメント(交流しづらい、導線がよくないなど)がみられたものの学生会員からは高い評価を得られた。今後も総合大会での開催を継続し、学生・企業からのフィードバックを通して、学生会員や若手会員の学会活動参加推進のための施策を検討していく予定である。

(9) 通信ソサイエティ表彰

2020年、2021年ソサイエティ大会に引き続き、2022年ソサイエティ大会は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のためにオンライン開催となり、ソサイエティ大会会場で開催予定であった「通信ソサイエティ特別講演及び表彰式」は中止となった。通信ソサイエティ功労顕彰状規定に基づき、功労顕彰状を贈呈する功労者16名を選定した。また、通信ソサイエティ活動功労賞規程及び功労者選定手続に基づき、活動功労賞を贈呈する功労者123名を選定した。特別講演及び表彰式が開催される予定であった9月7日付で作成した通信ソサイエティ功労顕彰状及び活動功労賞を選定した功労者139名に郵送した。

1. 3 エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティ(以下、エレスと略す)は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員(研究者)の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の3会議体制で上記活動を効率良く実施し、会員の満足度向上を目指している。2016年度から研究技術会議内に立ち上げた三つの領域委員会(電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会)に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動に関わる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。更に、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議で議論を進めている。

2022年度は、ソサイエティ大会はオンライン開催であったが総合大会は4年ぶりの対面を交えたハイブリッド開催となった。エレスのプレナリーセッションでは研究活性化のための他分野からの情報提供を意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「カーボンニュートラル社会の実現に向けた革新的な技術の芽生え」と題してカーボンニュートラルに向けた半導体の活用、熱エネルギー変換技術、フォトニック結晶に関する3つの特別講演、総合大会のプレナリーセッションでは、「半導体から『幸せ研究』へ」と題して、ウェルビーイングとビジネスに関する特別講演を行った。いずれも、カーボンニュートラルやウェルビーイングなど現在注目されている課題に関するものであり、情報通信エレクトロニクスの今後の展開(あらたな研究テーマ)を考えるトリガーとなることを期待している。また、学生会員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の提供を目指して、総合大会で全ソサイエティ共催の Welcome Party をエレスが幹事となり対面で実施した。

また、継続的な取組みとして委員会資料の集約・配布のオンライン化やリーダーズミーティング(研専幹事向けオリエンテーション)等、ソサイエティ運営の強化・効率化も進めた。なお、2022年度は5回の執行委員会を含め各種委員会をオンラインとハイブリッドで開催し、アフターコロナに向けた交流の場を増やしつつソサイエティの運営を円滑に進めている。

以下、2022年度のソサイエティの主な活動を三つの会議ごとに記す。

(1) 企画会議: 例年通りエレス全体の財務立案と把握、企画の取りまとめと発信、会員サービスの充実、对外広報などを担当した。

(1-1) 予算: 2022年度に引き続き2023年度も「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」に関する予算を確保し、会員活性化・増加施策の強化を図る。2022年度については、コロナ禍の影響を想定し予算案段階では約390万円の黒字であった。12月末時点での執行状況は、2021年度と比較して収支ともに増加傾向にあり黒字となる見込みである。研究会等のオンライン開催により会場費用等を削減

できた影響が大きい。また、昨年と比べ国際会議がリアルで開催されるようになり、予算規模は増大した。2023年度についても、大型の国際会議の開催や実施事業調整後において約550万円の黒字を見込んだ予算案を策定した。会員減少による収益減少傾向が続いており、引き続き「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」の有効活用を図るとともに、アフターコロナの状況も注視しつつ財務の安定を図る必要がある。

(1-2) 顕彰：エレクトロニクスソサイエティ活動功労表彰として29名の表彰を行った。例年通り、令和4年度（第26回）エレクトロニクスソサイエティ賞の選考を実施し、3分野において表彰を行う予定である。また、2022年度エレスフェロー推薦候補者を4名、2022年度シニア会員候補者を10名選定した。2022年ソサイエティ大会での発表に基づき5名の優秀な学生を選考し、2023年総合大会（ハイブリッド開催）においてエレス学生奨励賞を授与した。

(1-3) 広報：エレス Newsletter は年4回発行した。各号において、各領域委員会の活動紹介、各賞受賞者、技術解説の寄稿などを編集し、記事内容の充実を図った。

(2) 編集出版会議：例年通り出版戦略、編集出版関係財務の立案と把握、著作権管理方法、3論文誌発行を担当した。エレス各論文誌の存在感が一層高まるよう、以下の施策を進めた。

(2-1) 和文誌：総合大会、ソサイエティ大会で発表のあった注目研究をピックアップし、招待論文の依頼・掲載を継続して進め、論文誌の魅力増大を図った。これは多くを占める本会の日本人会員（特に学生や若手研究者）に対し、母国語による効率的な教育・知識普及、最新技術動向の把握の効果が望めるためである。また、論文誌活性化の一環として、学生を対象とした「学生論文特集」、それぞれの分野の第一人者の研究者に執筆を依頼した「エレクトロニクス分野におけるシミュレーション技術の進展論文特集」「マイクロ波ミリ波論文特集」を企画し、それぞれ、J105-C No.4、J105-C No.5、J106-C No.1に掲載した。また、新たな論文投稿増加施策として研究会技報と和文誌の同時投稿による論文掲載料の割引を2023年4月から開始するため、制度設計や投稿のしおりの改定などの準備を進めるとともに、電子情報通信学会 Web サイト、公式 Twitter、メーリングリスト、総合大会会場などにおいて施策の宣伝を行った。

(2-2) 英文誌：引き続き投稿件数の増加を図るため、投稿ウェブサイトでの投稿促進を行うと共に、各国際会議と連携して、論文誌としての注目度の向上が期待される特集号を中核とする方針の下、編集活動を進めた。投稿数、閲覧数の増加、および論文誌のステータス、インパクトファクタ向上を目的に、昨年度来進めてきた引用論文数の下限設定、JSTAGE におけるオープンアクセス化に次ぐ施策として、新たな投稿枠である「モノグラフカテゴリ」の新設に関する検討を行った。モノグラフカテゴリは若手研究者が筆頭著者として自らが牽引したプロジェクトを総括する論文を出版する機会を与えるものであり、本施策の有効性の検討、ならびに実現に向けた意見の集約と議論を編集委員会において行った。

(2-3) ELEX：全面オープンアクセスという特長を堅持し、発刊以来、速報性の維持・向上につとめてきた。近年はインパクトファクタの向上を目指して編集体制の強化や最低引用論文数の厳格化など様々な施策を実施してきている。今年度も引き続き、インパクトファクタのさらなる向上を目指して、国際的な認知向上に向けた海外査読員への積極査読依頼、著名な研究者によるレビュー論文の増加施策などを検討、実施した。加えて、CC マークの付与に向けたテンプレート改訂の検討等、Gold OA 化（Open Access）、DOAJ（Directory of Open Access Journals）への ELEX 誌の採録に向けた取り組みを進めている。

(3) 研究技術会議：今年度も3つの技術領域委員会と領域連携会議が協力して、研究専門委員会（研専）の活性化策立案、新規/特別研専の設立/継続審議、研専財務掌握、全国大会統括、国際会議支援、対外活動支援を実施した。とくにエレスの主体を成す研専の活動をサポートするため財務/運営上の改善を継続した。

具体的には、領域委員長の負担改善のための規定改定（2023年1月）、領域委員会の体制を柔軟に構成するための規定改定（2022年6月）、エレス協賛会議の周知フロー再確認（2023年1月）、他組織国内会議への協賛フロー明確化（2023年3月）、国際会議実施報告の簡易化（2023年3月）などを行っ

た。

また、オンサイト研究会の開催数回復や本部の謝金方針見直しなどを受け、会計処理フロー／ガイドラインの明確化の要望が強まった。そこで、大会／研究会の講演者謝金／旅費支給・講演参加費免除に関する制度の整理（2023年3月）、活性化費の黒字決算処理の明確化（2023年4月）、懇親会／宿泊費の自己負担ガイドライン周知（2023年4月）などを行った。

with コロナ時代となりハイブリッド研究会の開催も増加している。ハイブリッド研究会は参加者増の観点では有効であるが、企画・運営側の負担軽減が課題となってきた。そこで、各研専の要望や課題を集約し、エレス内や他ソサイエティの運営ノウハウを共有し、学会事務局の運営支援施策をホームページ掲載により宣伝周知した。

2023年度は、和文誌投稿数増加のため編集出版会議と協力して、エレス研究会技術報告と和文誌の同時投稿施策を開始する（2023年4月）。本施策は、投稿増により和文誌の価値を高めつつ、学生・若手研究者が業績となる論文誌へ簡易なプロセスで投稿できるようにすることを目的とした。施策開始にあたり、各研専の意見を集約し実施フローに反映させ、各研専を通じて施策を宣伝周知した。

(3-1) 研究専門委員会等の活動：15の研究専門委員会、5の特別研究専門委員会、6の国際会議国内委員会が、各種の研究会や全国大会セッションの企画運営、国際会議などの研究学術活動を行った。

(3-2) 国際会議：2022年4月から2023年3月にかけて、エレス協催・協賛・後援として五つの国際会議（CeRAM, MWP2022, AWAD2022, CLEO-PR2022, OECC/PSC 2022）を開催した。

(3-3) 2022年（令和4年）ソサイエティ大会（オンライン開催）では一般講演232件に加えて、シンポジウム講演25件、ソサイエティ特別企画2セッション、依頼シンポジウム6セッションを実施した。2023年（令和5年）総合大会（ハイブリッド開催）は一般講演273件に加えて、ソサイエティ特別企画1セッション、チュートリアル1セッション、依頼シンポジウム7セッション（共催1セッション含む）を実施した。

(3-4) リーダーズ・ミーティング（研専幹事意見交換会）を2022年7月に開催し、研究専門委員会運営に関わる幹事、幹事補佐及び運営委員を対象に、各会議から研専への施策や依頼事項の説明及び質疑を行い、研専運営に関する手続き、情報等に関する理解を深めた。

1. 4 情報・システムソサイエティ

情報・システムソサイエティ（以下、ISSと略す）は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISSが、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2022年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。

(1) 運営委員会の体制

会員数増強、会員サービス向上、ダイバーシティ向上等の課題は、本会全体にまつわる重要な課題であると同時に、ISS内でも集中的な検討が必要な喫緊の課題である。ISSでは、こうした中長期的な課題を検討するため、新たにISS未来企画委員会を設けた。

(2) 論文誌（和文論文誌・英文論文誌）

(2-1) 和文誌

投稿数の確保の対策として継続的な特集号の企画を行っており、2022年度は7件の特集号を発行した。投稿数の多い特集号は、2023年2月号の「変容する社会における持続発展的な学びのための教育工学特集」（投稿数32件、掲載数8件）であった。例年、和文誌編集委員会が特集編集委員会となって企画している「学生論文特集」については、2022年度も編集作業を進め、2023年4月に9件の論文を掲載予定である（投稿数30件）。また、2022年度は新たな施策として、通信ソサイエティ和文論文誌の掛け声の下、全ソサイエティ和文誌合同特集号として2023年6月号に「LiDAR関連技術とその応用特集」を企画し、本ソサイエティからは1件の論文を掲載予定である（投稿数3件）。臨時査読委員の査読の質の記録と、査読の質が高い委員を常任査読委員として推薦するプロセスも継続して実施してお

り、開始時から常任査読委員が 114 名増加（2022 年度中に 1 名増加）した。コロナ禍が長引く中、編集委員会はすべてオンライン開催となったが、判定報告書の質すなわち査読の質を維持するために幹事団による全数チェックや、編集委員の編集能力向上のための委員会への出席率改善策などは継続実施できている。

(2-2) 英文誌

英文誌は数年、投稿数の減少が続いている。その対策として、IF の向上および投稿数の増加を目指し、2017 年 1 月から論文誌の部分的なオープンアクセス化（J-STAGE 公開）を、2020 年 1 月からはすべての投稿論文のオープンアクセス化を実施している。その結果、年々アクセス数が増加し、大きな効果が認められる。Web of Science の IF では、0.411（2016）、0.5（2017）、0.576（2018）、0.449（2019）、0.559（2020）、0.71（2021）と増加しており、やがて投稿数の増加に繋がると考える。

また、今年度は特集号についても投稿数がやや減少した。これまで投稿数維持・増加のため、特集号は毎月 1 つのペースで発行してきたが、今年度はいくつかの月で実施できなかった。しかし、“Blockchain Systems and Applications”（投稿数 18 件、内 Letter 0 件、採録数 10 件、内 Letter 0 件）、“Next-generation Security Applications and Practice”（投稿数 21 件、内 Letter 9 件、採録数 15 件、内 Letter 8 件）などは多くの投稿を集めた。特集号の充実が必要である。特に 2021 年の海外編集委員による特集には投稿が多かった。2023 年度にも海外編集委員による特集が計画されており、期待される。さらに、投稿者へのサービス改善の 1 つとして、査読日数の削減を目指しており、査読委員の割り当てが遅れ気味の編集委員に対し、週一回の自動メールとは別に担当幹事から直接催促メールを出している。これに返信して作業を急ぐ編集委員も多く、例えば条件付き採録後に採否が決まる場合の平均査読期間は、2020 年 6.16 ヶ月、2021 年 5.59 ヶ月、2022 年 5.42 ヶ月と短縮されてきた。

(3) 研究会

2022 年度は、23 の研究専門委員会と、4 つの特別研究専門委員会により活発な活動を行った。第一種研究会開催総数は 113 回（前年比 105.6%）、発表総件数は 1,828 件（前年比 105.2%）であった。外部資金受け入れは計 1 件（10 万円）を承認・実施した。また FIT2022 で開催された併催（同会場・会期中で開催した）研究会（計 10 件・192 件の講演）において、8 つの研究専門委員会が運営に関わった。

with コロナ、after コロナ時代における新たな研究会のあり方の 1 つとして、ハイブリッド開催が挙げられる。発表者・参加者両方にとって参加形態の自由度が上がる一方、運営側の負担増大が問題となる。負担軽減策の 1 つとして、他ソサイエティと同様、ハイブリッド開催に係る配信機材の調達を行った。次年度以降、順次活用される見込みである。今後、ハイブリッド開催を続けるのか、現地・オンライン開催のみに絞るのか等、研究専門委員会の意向を最大限尊重しつつ、ソサイエティとして可能なサポートを行っていきたい。

企業連携に対する施策の一環として行っていた第一種研究会における企業等からの資金受入について、研究会連絡会で議論を進め、ガイドラインの見直しを行った。他ソサイエティも含めて次年度から正式運用される見込みである。

(4) 大会・FIT

(4-1) FIT2022（情報科学技術フォーラム）

ソサイエティ大会（ISS/HCG）と情報処理学会（IPSJ）の秋の全国大会を統合した FIT2022 を、2022 年 9 月 13 日～15 日の 3 日間でハイブリッド開催した。参加者数は 2,181 名（前年 2,159 名）であった。現地来場者は 685 名となっており、ハイブリッド開催に対する一定の需要が窺えた。選奨論文 92 件、一般論文 446 件、の計 538 件（前年 476 件）の研究発表が行われたほか、トップコンファレンスセッションの 11 セッション・58 講演を含め、計 23 件の企画セッションが実施された。FIT の参加者の他、研究会のみとして 183 名の参加者があった。学術賞表彰式も開催し、FIT2022 船井業績賞（1 件）、および前年の発表の中から選定された FIT2021 船井ベストペーパー（3 編）、FIT2021 論文賞（8 編）、FIT2021 ヤングリサーチャー賞（7 名）を表彰した。

FIT2023 は、大阪公立大学（中百舌鳥キャンパス）で 2023 年 9 月 6 日～8 日にハイブリッド形式にて開催予定である。引き続き、各種企画の一層の充実など参加者に対するメリットの訴求を図る予定である。

(4-2) 2023 年総合大会

2023 年 3 月 7 日～10 日にハイブリッドで開催された総合大会に合わせ、ISS は 3 件のシンポジウムセッションと 3 件のソサイエティ特別企画セッションを実施した。ソサイエティ特別企画の一つであるジュニア&学生ポスターセッションは 3 年ぶりに対面形式で開催した。本企画の申込総数は 154 件であり、高専生（専攻科を含む）の発表が 27 件、高校生の発表が 9 件、小学生の発表も 1 件含まれていた。表彰式では優秀ポスター賞（3 件）と特別賞（3 件）の従来の賞に加えて、本年度から新設したジュニア会員世代（小学生～大学 3 年相当）の優れた発表を評価するジュニア奨励賞（2 件）を表彰した。

(5) 国際化施策

2022 年度は、主催・共催・協賛等として、以下の国際会議を開催した。

- The Tenth International Symposium on Computing and Networking (CANDAR2022), November 21-24, 2022, Himeji, Japan (ハイブリッド開催、本会協賛)
- IEEE 15th International Symposium on Autonomous Decentralized Systems (ISADS2023), March 15-17, 2023, Mexico City, Mexico (ハイブリッド開催、本会協賛)

さらに、2023 年度には以下の国際会議が開催予定である。

- International Symposium on Highly-Efficient Accelerators and Reconfigurable Technologies (HEART2023), June 14-16, 2023, Shiga, Japan (ハイブリッド開催、本会技術協賛)
- 18th International Conference on Machine Vision Application (MVA2023), July 23-25, 2023, Hamamatsu, Japan (本会主催)

特に、MVA2023 は本会が主催する国際会議であり、ISS が行う学会活動の国際化のための、重要な一ステップとして位置づけられるものである。今後は、国際会議の主催に積極的に取り組むことにより、学会の国際的なプレゼンスの向上を目指す。

また、ISS では、本年度から設置した国際担当幹事担当とともに、企画広報・国際担当副会長が中心となって、新しい国際化施策を検討した。まず、従来より取り組んでいる国際会議論文のメンター制度とリンクして、国際会議参加支援制度を検討した。支援対象や申請資格などを整備して、2023 年度中には運用開始ができるように整備する予定である。

加えて、将来的な課題として、ワークショップの開催支援やコンテンツ提供、留学生支援、他学会などとの連携方法についても、検討を開始したところである。

(6) その他

(6-1) ソサイエティ誌

本年度もソサイエティ誌は、5 回/年の発行を継続し、研究会活動を紹介するためのインタビュー記事、研究会の会議報告等を掲載した。さらに、ソサイエティ活動の活性化を目的として、研究会、国際会議、コンテスト等の幅広い活動内容の情報発信を積極的に研究会に呼びかけることで、多彩な記事が掲載され、with コロナ、after コロナ時代におけるソサイエティ会員の情報共有、円滑な連携を支援した。

(6-2) 選奨

ISS では、ソサイエティの独自性向上と活性化のための施策として、サーベイ論文、先見論文、連作論文、システム開発論文を選定対象とするソサイエティ論文賞を設定している。ソサイエティ活動について顕著な貢献があった会員を選奨する活動功労賞も設定し、2009 年度からは、従来の活動功労賞を「活動功労賞」と「査読功労賞」に発展的に分割し、貢献のあった会員を選奨している。2022 年度は 2022 年度ソサイエティ論文賞（1 件）、2022 年度活動功労賞（6 名）ならびに査読功労賞（10 名）の授与を行った。また、2023 年総合大会 ISS 特別企画ジュニア&学生ポスターセッションにおいて、優秀賞（3 名）、特別賞（3 名）、新設のジュニア奨励賞（2 名）を決定し、表彰式を行った。

(6-3) 広報

Web を介した運営支援機能の一つとして、戦略的講演の実施に関する審議と情報共有の機能を新設し、2022 年 6 月より運用を開始した。これまでに、18 件の講演が可決された。また、昨年度に実施した Web サイトの刷新に伴い、旧コンテンツの参照などで問題が生じないように、対策を講じた。

加えて、各種広報活動に用いるため、ISS の研究分野のマップを作成した。これは、ISS の研究専門委員会の相互関係や他ソサイエティとの関連を記したものである。

1. 5 NOLTA ソサイエティ

(1) ソサイエティ運営と規定の見直し

今年度は、国際会議等の実行組織が円滑に手続きを進めるための事務処理要綱の改定など、規程類の見直しを行った。また、COVID-19 の感染状況や世界情勢などを考慮しつつ、国際会議等の準備状況や方針の確認を各回の委員会にて定期的に行った。

(2) 研究活動とその活性化

(2-1) 研究専門委員会の活動

本ソサイエティには非線形問題研究専門委員会(NLP)と複雑コミュニケーションサイエンス研究専門委員会(CCS)の2つの研究専門委員会がある。今年度の研究会は、COVID-19 の感染状況を考慮しつつ、オンライン/ハイブリッド/完全対面を適宜切り替えながら開催された。NLP は年間 6 回開催され講演数は招待講演 6 件を含む 115 件であった。CCS は年間 4 回開催され講演数は 71 件であった。NLP と CCS それぞれにおいて前年度の研究会発表論文の中から優秀な発表に対する奨励賞受賞者を選定し、NOLTA ソサイエティ大会において表彰した。

(2-2) 非線形理論とその応用に関する国際シンポジウム

(International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications: NOLTA)

・ NOLTA2022

当初は 2021 年にクロアチアで開催予定であったが開催を延期し、COVID-19 の状況やウクライナ情勢などを考慮して、2022 年 12 月 12 日～15 日にフルオンラインのシンポジウムとして開催された。参加者数は 263 名、発表件数は 209 件、セッション数は合計 52 セッションであった。

・ NOLTA2023

2023 年 9 月 26 日～29 日にイタリア・カターニアでの開催を目指し、準備を進めている。これまで COVID-19 の状況やウクライナ情勢などを見極めながら開催時期や開催方法を検討しており、現時点では現地開催の予定である。

・ NOLTA2024

2024 年 12 月 3 日～6 日にベトナム・ハノイでの開催を目指し、準備を開始した。

(2-3) Japan-Korea Joint Workshop on Complex Communication Science (JKCCS / KJCCS)

・ JKCCS2023

2023 年 1 月 4 日～6 日に韓国・慶州で開催された。2020 年 1 月に広島で開催された後、COVID-19 による開催延期が続き、今回が 3 年ぶりの開催となった。講演件数は招待講演 2 件を含め、計 47 件であった。

・ KJCCS2024

2024 年 1 月 29 日～31 日に大分での開催を目指し、準備を開始した。

(2-4) 総合大会・ソサイエティ大会における活動

2022 年ソサイエティ大会（オンライン）の一般セッション講演数は NLP 19 件、CCS 6 件の合計 25 件であった。また、ソサイエティ大会では ESS と合同でソサイエティ表彰贈呈式を開催した。2023 年総合大会（芝浦工業大学）では 1 件のチュートリアルセッションが開催され、一般セッション講演数は NLP 19 件、CCS 13 件の合計 32 件であった。

(2-5) NOLTA ソサイエティ大会

ソサイエティ全体の活動を総括して、NOLTA ソサイエティがカバーする学問分野の更なる発展・充実を図るため、NOLTA ソサイエティ独自のソサイエティ大会を開催している。今年度は、2022 年 6 月 11 日に大阪大学にて完全対面の形式で開催された。一般講演数は 46 件であり、この他、2 件のフェロー記念講演、計 5 件の研究会奨励賞受賞者講演などが行われた。

(3) 編集活動

(3-1) 論文誌の編集活動

英文電子ジャーナル「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE（略称 NOLTA）」（オープンア

クセス(OA)ジャーナル)を4回発行し、62編の論文、4編の巻頭言、(総ページ数541)を掲載し、前年を上回る論文編数の出版を行った。それらの発行の中で特集号企画を3回実施し、さらに、招待論文を4編掲載することによってNOLTAの内容の充実を図った。2022年10月号よりNOLTAへの掲載論文はCC BY-NC-NDライセンスを付与されることとなった。

また、NOLTAは2023年6月にClarivate社のJournal Impact Factorが付与される見通しであるが、引き続き他のCitation Indexが付与されることを目指している。

1. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

ヒューマンコミュニケーショングループ(HCG)は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として1995年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由に開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、他分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入口的役割を果たしている。

2022年度は、運営委員会はほぼオンラインで開催したが、各研究会、HCGシンポジウムではハイブリッド開催が企画・実施された。COVID-19の拡大防止に配慮し、学会の指針に従って安全な開催を心がけた。論文誌での特集号の企画を通じて、学際研究の発表・議論の場を提供するための活動を行った。財務状況改善のためHCGシンポジウムの収益増を検討し、三種研の在り方を議論した。以下、2022年度の主な活動概要を示す。

(1) 研究会活動

2021年度は、4つの研究専門委員会、および4つの特別研究専門委員会、2つの第三種研究会運営委員会での活動が行われた。特別研専の2008年に発足した発達障害支援(ADD)研究会は、2020年度をもって役目を終えて解散した。

(2) HCGシンポジウム

前身であるHCG大会から数えて29回目、2004年のHCGシンポジウムへの改称から20回目となる、HCGシンポジウム2022は、香川県高松市のサンポート高松の会場とオンラインのハイブリッド形式で2022年12月14日から16日まで、「リアル・バーチャルが響き合うヒューマンコミュニケーション」というテーマで開催した。このシンポジウムはHCGの全ての研究専門委員会、特別研究専門委員会、運営委員会が合同で主催し、プログラムも研専ごとではなく、研究内容によって構成し、研専の枠を越えた議論を行っている。

今年度は、2度のオンライン開催を経て、3年ぶりのハイブリッド開催となったが、COVID-19の拡大防止に努めながらの開催とした。発表件数は121件(招待講演およびチュートリアル講演:1件ずつ、特集テーマセッション内の招待講演:8件、口頭発表とインタラクティブ発表:83件、インタラクティブ発表のみ:28件)であり、2021年度開催時の70件より7割増と大幅に増加し、COVID-19流行前のシンポジウムと同程度まで回復した。さらに、参加者数も合計で273名と、2021年開催時190名よりも4割増、前回の現地開催(2019年)時よりも3.5割増となった。また、参加者の6割以上の173名、発表者の8割以上の101名が現地での参加、発表を選択し、現地での交流の需要が高いことがうかがわれた。特に、本シンポジウムの特徴である対話セッション「インタラクティブセッション」で発表を行ったが、久々に対面での議論を行うことができ、参加者からも好評であった。

また、特定のテーマに関係する発表者を集めた特集テーマセッションを6つ企画した。ソーシャル・インタラクション、ロケーション・インフォマティクス、テレワークの受容とテクノロジー・心理、インターバースにおける体験デザインとその評価、ユーザーニーズに即した視覚障害者支援、(パラ)スポーツと(パラ)eスポーツのそれぞれをテーマにしたセッションが生まれ、優秀な発表に対して、特集テーマセッション賞が贈られた。

今回のシンポジウムでは、チュートリアル講演として、AIと音楽・メディアアートについての講演を企画した。また、招待講演として、withコロナ社会における遠隔協調に関する講演を企画した。講演題目および講師はそれぞれ以下の通りであった。

チュートリアル講演

題目：「創るための AI —音楽・メディアアートの実践を通して考える、人と AI、創造性の未来—」
講師：徳井 直生（慶應義塾大学 大学院 政策・メディア研究科／株式会社 Qosmo）

招待講演

題目：「with コロナ社会におけるこれからの遠隔協調」
講師：葛岡英明（東京大学 大学院 情報理工学系研究科）

対面の他、オンラインでは、Zoom を使って口頭発表、oVice を使ってインタラクティブ発表、懇親会を行い、Slack を使って参加者間の情報共有を行った。懇親会は COVID-19 の影響に配慮し、オンラインのみで行った。3 年ぶりのハイブリッド開催のため現地对応の経験がない委員が多く、ノウハウの伝承が課題として明らかになった。

次回、2023 年度の HCG シンポジウムは、12 月 11 日～13 日の 3 日間、実際の会場（福岡県北九州市北九州 AIM 館）とオンラインでの発表を組み合わせたハイブリッド形式で開催する予定である。

（3）研究会運営の改革

前年度の財務将来構想ワーキンググループ（WG）の提言に基づき、HCG シンポジウムを主たる収益事業として位置づけて、魅力ある内容にしつつ収益をあげて、グループの収入源とすることを主たる施策として実施した。魅力的な講演を揃え、現地開催を 3 年ぶりに行い、参加人数を大幅に増やすことができた。さらに、様々な条件を整え現地の開催補助金制度（高松観光コンベンション・ビューロー全国大会等開催補助金およびハイブリッド会議開催支援助成金）を活用し収支改善に努めた。

また、現在、三種研究会に属している研究会については、その在り方を議論し、工学以外の研究者が多いという事情にも配慮しながら、特別研専への変更を目指して活動していくことになった。

（4）編集活動

HCG は独自の論文誌を有していないが、2004 年から隔年で、2013 年からは毎年、和文論文誌の A、D、あるいは英文論文誌のいずれかで「ヒューマンコミュニケーション」特集号を発行してきた。2016 年度からは常設の編集委員会を設置して活動している。次回の特集号として、2024 年 3 月発行予定（投稿〆切 2023 年 5 月）の英文論文誌 D 分冊の「ヒューマンコミュニケーション特集号」を企画し、論文募集を開始した。

（5）表彰活動

2022 年度ヒューマンコミュニケーション賞（HC 賞）の選定を行い、5 件を選考し、HCG シンポジウム 2022 の会場において表彰式を行った。本賞は第一種研究会の発表から 25 件につき 1 件、以降 50 件ごとに 1 件を基準とし、各研究会で組織した HC 賞審査委員会において選考した。

また HCG シンポジウム 2022 の発表の中から最優秀インタラクティブ発表賞 3 件、優秀インタラクティブ発表賞 3 件、学生優秀インタラクティブ発表賞 3 件、特集テーマセッション賞 7 件を選考し、表彰した。

2. ソサイエティ大会に関する事項(定款 第 4 条 ロ号)

2. 1 ソサイエティ大会

下記の期日・会場において基礎・境界、NOLTA、通信、エレクトロニクス の 4 ソサイエティが合同して開催した。

期 日 2022 年 9 月 6 日(火)～9 日(金)
会 場 オンライン開催
参加者 3,480 名
懇親会 中止

(a) 企画講演セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ				合計
		基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	
大会委員会企画	3(2)	—	—	—	—	3(2)
ソサイエティ特別企画	—	※2(※1)	※1(※1)	1(3)	2(1)	6(6)
パネルセッション	—	0(0)	0(0)	1(3)	0(0)	1(3)
チュートリアルセッション	0(0)	1(0)	0(0)	0(3)	0(0)	1(3)
依頼シンポジウムセッション	—	2(2)	0(0)	‡14(†7)	‡6(†6)	22(15)
合計	3(2)	※5(※3)	※1(※1)	‡16(†16)	‡8(†7)	33(29)

※基礎・境界とNOLTAの共催企画1件を含む。

‡通信とエレクトロニクスの共催企画2件を含む。

(b) 公募講演件数

	ソサイエティ				合計	実数
	基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス		
一般講演	98	25	590	232	945	945
シンポジウム講演	7	0	†36	†25	68	58
合計	105	25	†626	†257	1013	1003

†通信とエレクトロニクスの共催企画10講演件数を含む。

2. 2 FIT2022(第21回情報科学技術フォーラム)

下記の期日・会場において情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して開催した。

期 日 2022年9月13日(火)～15日(木)

会 場 慶応義塾大学 矢上キャンパス (ハイブリッド開催)

参加者 2,181名 (現地来場者 685名)

情報交換会 40名程度 (飲食なしにて大学内で開催)

イベント企画	研究会提案企画	5 課題
	委員会提案企画	3 課題
	現地提案企画	1 課題
講演件数		538 講演

3. 国際会議に関する事項(定款 第4条 ロ号、へ号)

次のとおり開催した。

会 議 名	開催年月日	参加者数	論文数	場 所	
27th Optoelectronics and Communications Conference / International Conference on Photonics in Switching and Computing 2022 (OECC/PSC 2022)	2022.7.3 ～7.7	595	256	日本 富山	CS
The 27th OptoElectronics and Communications Conference International Conference on Photonics in Switching and Computing 2022 (OECC/PSC 2022)	2022.7.3～ 7.6	595	343	Toyama, Japan/O nline	ES
The 37th International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2022)	2022.7.5～ 7.8	299	257	Phuket, Thailand / Online	ESS
The 15th Pacific Rim Conference on Lasers and Electro-Optics (CLEO Pacific Rim,	2022.7.31～ 8.5	1,142	602	Sapporo, Japan/O	ES

CLEO-PR 2022)				nline	
The 15th Pacific Rim Conference on Laser and Electro-Optics 2022(CLEO-PR2022)	2022.7.31 ～8.5	909	678	日本 札幌	CS
Research Exchange Beyond Information Theory (RE: BIT)	2022.8.26～ 8.29	32	14	Aulani, USA	ESS
The 17th International Workshop on Security (IWSEC 2022)	2022.8.31～ 9.2	86	24	Tokyo/ Online	ESS
The 2022 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA 2022)	2022.9.15～ 9.16	93	37	Online	ESS
アジア・太平洋 ネットワーク運用と管理シンポジウム (APNOMS 2022)	2022.9.28 ～9.30	139	103	日本 香川	CS
The International Symposium on Information Theory and Its Applications (ISITA2022)	2022.10.17 ～10.19	115	70	Tsukuba/ Online	ESS
The 28 th Asia and South Pacific Design Automation Conference (ASP-DAC2023)	2023.1.16～ 1.19	365	127	Tokyo/ Online	ESS
International Workshop on Control, Communications, and Multimedia 2023(IWCCM 2023)	2023.2.22～ 2.23	73	13	Phuket, Thailand / Online	ESS

4. 出版に関する事項(定款 第4条 イ号)

4. 1 和文論文誌の発行状況

各ソサイエティ別(A・B・C・D)に電子版を本会サイトにて公開した。

掲載総ページ数は 2,207 ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数 回
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	
JA	23	4		27	2
	268	17	3	288	
JB	71	28		99	5
	728	93	7	828	
JC	43	10		53	3
	368	25	4	397	
JD	55	10		65	6
	646	40	8	694	
計	192	52		244	16
	2,010	175	22	2,207	

※その他：巻頭言、正誤

4. 2 英文論文誌の発行状況

各ソサイエティ別(A・B・C・D)に電子版を本会サイト及び J-STAGE にて公開した。

掲載総ページ数は 5,817 ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数 回
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	
EA	143	54		197	10
	1,405	248	13	1,666	

EB	151	0		151	5
	1,554	0	8	1,562	
EC	76	21		97	10
	649	93	14	756	
ED	145	69		214	10
	1,518	302	13	1,833	
計	515	144		659	35
	5,126	643	48	5,817	

※その他：巻頭言、正誤

4. 3 電子ジャーナルの発行状況

(1)NOLTA ソサイエティ

NOLTA ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(年4回発行)に62件、541ページを掲載した。

(2)通信ソサイエティ

通信ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「IEICE Communications Express(略称 ComEX)」(月1回発行)に142件、831ページを掲載した。

(3)エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティでは、ペーパーレス研究速報英文論文誌「IEICE Electronics Express(略称 ELEX)」(月2回発行)に168件、933ページを掲載した。

4. 4 ニュースレター、ソサイエティ誌の発行状況

各ソサイエティ及びグループでニュースレター、ソサイエティ誌を下記のとおり発行した。

(1) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ	Fundamentals Review	4回	333ページ
(2) 通信ソサイエティ	マガジン誌(通信ソサイエティマガジン)	4回	374ページ
(3) エレクトロニクスソサイエティ	ニュースレター	4回	79ページ
(4) 情報・システムソサイエティ	ニュースレター	5回	100ページ
(5) ヒューマンコミュニケーショングループ	ニュースレター (Web)	4回	

5. 選奨に関する事項(定款 第4条 ホ号、へ号)

所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり各受賞者を決定した。

5. 1 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

(1)基礎・境界ソサイエティ

(1-1)功労賞

業 績	貢 献 者
2022年暗号と情報セキュリティシンポジウム実行委員長としての貢献	宮地 充子

以上1名

(1-2)貢献賞

(1-2-1) ソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
基礎・境界ソサイエティ「庶務幹事」としての貢献	藤吉 正明
基礎・境界ソサイエティ「会計幹事」としての貢献	小平 行秀
基礎・境界ソサイエティ「事業担当幹事」としての貢献	多和田雅師
基礎・境界ソサイエティ「大会担当幹事」としての貢献	和田 昌浩
基礎・境界ソサイエティ「電子広報担当幹事」としての貢献	谷口 一徹

基礎・境界ソサイエティ「和文論文誌編集幹事」としての貢献	サントソ バグス
基礎・境界ソサイエティ「ソサイエティ誌担当幹事」としての貢献	山肩 大祐

以上 7名

(1-2-2) 編集

業 績	貢 献 者
FR 誌編集委員としての貢献	松田 哲直

以上 1名

(1-2-3) サブソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
情報理論とその応用サブソサイエティの運営及び活動に対する貢献	小林 学
システムと信号処理サブソサイエティの運営及び活動に対する貢献	下田 真二

以上 2名

(1-2-4) 研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
回路とシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	下田 真二
VLSI 設計技術研究専門委員会の運営および活動に対する貢献	兼本 大輔
信号処理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	杉本憲治郎
高信頼制御通信研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	林 直樹
超音波研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	荒川 元孝
応用音響研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	加古 達也
情報理論研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	廣友 雅徳
情報セキュリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	山本 大
ワイドバンドシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	中村 僚兵
技術と社会・倫理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	吉永 敦征
高度交通システム(ITS)研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	橋浦康一郎
スマートインフォメディアシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	三澤 秀明
イメージ・メディア・クオリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	大橋 剛介
バイオメトリクス研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	奥井 宣広
安全・安心な生活と ICT 研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	遠藤 邦夫
ハードウェアセキュリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	高橋 順子

以上 16名

(1-2-5) 会議運営

業 績	貢 献 者
国際会議 IWSEC2021 の運営に対する貢献	伊豆 哲也
国際会議 SISA2020 の運営に対する貢献	筒井 弘
国際会議 IMQA2022 Publication Chair、広報委員としての貢献	中口 俊哉
第 44 回情報理論とその応用シンポジウムの運営に対する貢献	井坂 元彦
バイオメトリクスと認識・認証シンポジウム 2021 の運営に対する貢献	伊藤 康一
第 34 回回路とシステムワークショップの運営に対する貢献	佐藤 隆英
第 36 回信号処理シンポジウムの運営に対する貢献	山田 功

以上 7名

(1-2-6) その他の事業

業 績	貢 献 者
「2020 年 12月号情報理論とその応用小特集」編集幹事及び「2022 年 3月号情報理論とその応用小特集」編集幹事としての貢献	野崎 隆之

以上 1名

(2) NOLTA ソサイエティ

(2-1) Distinguished Contribution Award (特別功労賞)

業 績	貢 献 者
NOLTA ソサイエティの学術基盤の構築に対し顕著な貢献をすると共に、国際会議 NOLTA の創設を通して NOLTA ソサイエティの設立に著しく貢献した。	堀内 和夫

以上 1 名

(2-2) Contribution Award (功労賞)

業 績	貢 献 者
コロナ禍における NOLTA ソサイエティの運営への多大なる貢献	神野 健哉

以上 1 名

(2-3) Service Award (貢献賞)

業 績	貢 献 者
Devoted Contribution to Operation of NOLTA2019 conference as A General Chair	神野 健哉
Devoted Contribution to Technical Committee on Nonlinear Problems As A Secretary	松下 春奈
Devoted Contribution to Technical Committee on Complex Communication Sciences As A Secretary	中田 一紀

以上 3 名

(3) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

Fundamentals Review ベストオーサー賞

論 説	著 者
深層展開に基づくアルゴリズム設計—収束加速とその理論的解釈—	和田山 正 高邊 賢史

以上 1 編

5. 2 通信ソサイエティ

(1)ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
【優秀論文賞】 遠隔運転環境の操作性向上のための遅延の見える化機能	佐藤 雄大(KDDI 総合研究所) 檜原 俊太郎(KDDI 総合研究所) 大岸 智彦(KDDI 総合研究所)
無線設備の耐雷性能向上を可能とする光ファイバを 活用した電気絶縁可能なアンテナシステムの開発	池田 研介(電力中研)
【チュートリアル論文賞】 サステナブル社会への変革に伴う通信 EMC の将来課題 —2040 年の通信サービスを想定して—	田島 公博(NTT-AT) 小林 隆一(NTT-AT) 富永 哲欣(NTT-AT) 秋山 佳春(NTT-AT)
フィジカル空間情報を用いた深層学習に基づく無線通信品質予測	工藤 理一(NTT) 高橋 馨子(NTT) 永田 尚志(NTT) 村上 友規(NTT) 小川 智明(NTT) 高杉 耕一(NTT)
【Best Paper Award】 Blind Signal Separation for Array Radar Measurement Using Mathematical Model of Pulse Wave Propagation	Takuya Sakamoto(Kyoto Univ.)

Channel Arrangement Design in Lumped Amplified WDM Transmission over NZ-DSF Link with Nonlinearity Mitigation Using Optical Phase Conjugation	Shimpei Shimizu(NTT) Takayuki Kobayashi(NTT) Takeshi Umeki(NTT) Takushi Kazama(NTT) Koji Enbutsu(NTT) Ryoichi Kasahara(NTT) Yutaka Miyamoto(NTT)
Sigma-Delta Beamformer DOA Estimation for Distributed Array Radar	Toshihiro Ito(Mitsubishi Electric) Shoji Matsuda(Mitsubishi Electric) Yoshiya Kasahara(Kanazawa Univ.)
Highly Accurate Vegetation Loss Model with Seasonal Characteristics for High-Altitude Platform Station	Hideki Omote(SoftBank Corp.) Akihiro Sato(SoftBank Corp.) Sho Kimura(SoftBank Corp.) Shoma Tanaka(SoftBank Corp.) HoYu Lin(SoftBank Corp.)
【Best Tutorial Paper Award】 Experiment of Integrated Technologies in Robotics, Network, and Computing for Smart Agriculture	Ryota Ishibashi(NTT) Takuma Tsubaki(NTT) Shingo Okada(NTT) Hiroshi Yamamoto(NTT) Takeshi Kuwahara(NTT) Kenichi Kawamura(NTT) Keisuke Wakao(NTT) Takatsune Moriyama(NTT) Ricardo Ospina(Hokkaido Univ.) Hiroshi Okamoto(Hokkaido Univ.) Noboru Noguchi(Hokkaido Univ.)
【ComEX Best Letter Award】 Multishape radio: new approach to utilizing the physical properties of electromagnetic waves	Doohwan Lee(NTT) Yasunori Yagi(NTT) Hiroyuki Shiba(NTT)
【マガジン論文賞】 災害対応におけるICT活用と防災チャットボットSOCDA	萩行 正嗣(ウェアニュース) 東 宏樹(LINE) 上谷 珠視(ウェアニュース) 大竹 清敬(NICT)

以上 11 編

(2)マガジン賞

記 事 名	著 者 名
世界に出てみた。ノープランで。	高山 泰一(Andes Ag, Inc.)

以上 1 編

5. 3 エレクトロニクスソサイエティ

(1)ソサイエティ賞

分 野	業 績	貢 献 者
第 1 分野	サブ波長光学構造の電磁界解析シミュレーション手法およびその応用に関する先駆的研究	大寺康夫 (富山県立大学)
第 2 分野	光信号処理技術のシステム応用ならびに光集積デバイス適用に関する先駆的研究	植之原裕行(東京工業大学)
第 3 分野	シリコン基板上窒化物パワー半導体に関する先駆的研究	江川孝志(名古屋工業大学)

以上 3 件

(2) レター論文賞

論 文 名	著 者 名
コヒーレント検波による 2 キャリア間のアンド演算を用いた暗号化無線伝送システムの原理実証	山内 健太 (九州大学) 河合 優佑 (九州大学) 車 明 (九州大学) 伊藤 弘 (北里大学) 石橋 忠夫 (NTT エレクトロニクステクノ株式会社) 加藤 和利 (九州大学)

以上 1 件

(3) ELEX Best Paper Award

論 文 名	著 者 名
64QAM wireless link with 300GHz InP-CMOS hybrid transceiver	Ibrahim Abdo (Tokyo Institute of Technology) Hiroshi Hamada (NTT Corporation) Hideyuki Nosaka (NTT Corporation) Atsushi Shirane (Tokyo Institute of Technology) Kenichi Okada (Tokyo Institute of Technology)
High-definition object detection technology based on AI inference scheme and its implementation	Hiroyuki Uzawa (NTT Corporation) Shuhei Yoshida (NTT Corporation) Yuukou Iinuma (NTT Corporation) Saki Hatta (NTT Corporation) Daisuke Kobayashi (NTT Corporation) Yuya Omori (NTT Corporation) Ken Nakamura (NTT Corporation) Shuichi Takada (ArchiTek Corporation) Hassan Toorabally (ArchiTek Corporation) Kimikazu Sano (NTT Corporation)
Design of broadband high-gain GaN MMIC power amplifier based on reactive/resistive matching and feedback technique	Lin Peng (Guangdong University of Technology) Jianqiang Chen (Guangdong University of Technology) Zhihao Zhang (Guangdong University of Technology) Yang Huang (Sichuan YiFeng Electronic Science & Technology Co., Ltd.) Tong Wang (Sichuan YiFeng Electronic Science & Technology Co., Ltd.) Gary Zhang (Guangdong University of Technology)

以上 3 件

(4) 招待論文賞

論 文 名	著 者 名
Recent Progress on High Output Power, High Frequency and Wide Bandwidth GaN Power Amplifiers	Masaru SATO (Fujitsu Laboratories) Yoshitaka NIIDA (Fujitsu Laboratories) Atsushi YAMADA (Fujitsu Laboratories) Junji KOTANI (Fujitsu Laboratories) Shiro OZAKI (Fujitsu Laboratories) Toshihiro OHKI (Fujitsu Laboratories) Naoya OKAMOTO (Fujitsu Laboratories) Norikazu NAKAMURA (Fujitsu Laboratories)

以上 1 件

(5) エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞

2022 年総合大会 (2022 年 3 月)

分野	講演者
電磁波理論およびマイクロ波分野	稗田 直哉 (室蘭工業大学) 岩城 昂琉 (呉工業高専)
光半導体及びフォトニクス分野	相馬 豪 (東京大学) 中嶋 大 (東北大学)
回路およびエレクトロニクス分野	良知 颯太 (山梨大学) 池田 和瞭 (広島大学)

以上 6 名

2022 年ソサイエティ大会 (2022 年 9 月)

分野	講演者
電磁波理論およびマイクロ波分野	三枝 美波 (日本大学) 田村 成 (横浜国立大学)
光半導体及びフォトニクス分野	高橋 直樹 (東京工業大学) 仲下 智也 (大阪大学)
回路およびエレクトロニクス分野	山田 真聖 (大阪大学) 田岡 楽登 (広島大学)

以上 6 名

5. 4 情報・システムソサイエティ

(1)ソサイエティ論文賞

論文名	著者名
【連作論文】 1.Preventing Fake Information Generation Against Media Clone Attacks	Noboru BABAGUCHI Isao ECHIZEN Junichi YAMAGISHI Naoko NITTA Yuta NAKASHIMA Kazuaki NAKAMURA Kazuhiro KONO Fuming FANG Seiko MYOJIN Zhenzhong KUANG Huy H. NGUYEN Ngoc-Dung T. TIEU
2.Generation and Detection of Media Clones	Isao ECHIZEN Noboru BABAGUCHI Junichi YAMAGISHI Naoko NITTA Yuta NAKASHIMA Kazuaki NAKAMURA Kazuhiro KONO Fuming FANG Seiko MYOJIN Zhenzhong KUANG Huy H. NGUYEN Ngoc-Dung T. TIEU

以上 1 編

(2)功労賞

(2-1)活動功労賞

業績	貢献者
ソサイエティ誌編集幹事・編集委員としての貢献	田村 雅人(日立)

英文論文誌編集委員としての貢献	荒木 徹(群馬大)
英文論文誌編集委員としての貢献	滝口 哲也(神戸大)
和文論文誌編集委員としての貢献	近藤 一晃(京大)
和文論文誌編集委員としての貢献	林 雄介(広島大)
コンピュータシステム研究専門委員会副委員長(2017-2018), 同幹事(2015-2016), 英文論文誌 D 並列分散コンピューティングとネットワークワーキング小特集編集委員(2016-2019)としての貢献	三吉 貴史(富士通)

以上 6 名

(2-2)査読功労賞

業 績	貢 献 者
論文誌査読委員としての貢献	山田 浩史(東京農工大)
論文誌査読委員としての貢献	天寄 聡介(岡山県立大)
論文誌査読委員としての貢献	庄野 逸(電通大)
論文誌査読委員としての貢献	新田 直子(阪大)
論文誌査読委員としての貢献	鷺崎 弘宜(早大)
論文誌査読委員としての貢献	北原 格(筑波大)
論文誌査読委員としての貢献	木村 昌弘(龍谷大)
論文誌査読委員としての貢献	丸山 勝久(立命館大)
論文誌査読委員としての貢献	藤田 桂英(東京農工大)
論文誌査読委員としての貢献	中原 啓貴(東工大)

以上 10 名

(3)ジュニア&学生ポスターセッション

(3-1)優秀ポスター賞

論 文 名	著 者 名
選択した雰囲気に合わせて空間デザイン	鷹野礼音 (東京電機大)
記憶型学習に対する性格の影響度評価	徳永 達 (東京理科大)
eテストにおける学習者の視線移動特徴を用いた本人認証手法の開発と評価	羽切まどか (都立産業技術高専)

以上 3 名

(3-2)特別賞 (協創)

論 文 名	著 者 名
サステナブルファッションへ向けたセンシングデバイスによる打ち込みの DX 化	川崎大誠 (旭川高専)
既存の救助訓練用ダミーへの装着を前提とした救助訓練評価システム	三宅翔大 (岡山県立大)
学生によるポインタデザインに基づくハイフレックス授業環境に適した音量ポインタの検討	三宅 匠 (福山大)

以上 3 名

(3-3)ジュニア奨励賞

論 文 名	著 者 名
発達心理学に基づいた子供の家庭における読書活動促進システムの提案	太田 葵 (川崎市立真福寺小)
ロボット・VR・AI 技術を用いたキクラゲ自動収穫システムの開発	田口 創 (大島商船高専)

以上 2 名

5. 5 FITの各賞

(情報・システムソサイエティ及びヒューマンコミュニケーショングループと情報処理学会との合同)

(1)船井業績賞

業 績	受 賞 者

機械学習分野における先駆的研究	杉山 将 (理研/東大)
-----------------	--------------

以上 1 件

(2)船井ベストペーパー賞

論 文 名	受 賞 者
重み一定符号を用いた DNN 電子透かしの検出法	安井 達哉 (岡山大) ・ Malik Asad (Aligarh Muslim Univ.) ・栗林 稔 (岡山大)
継続的かつ複数拠点からの観測に基づく悪性サイトのクローキング調査	藤井 翔太 (日立/岡山大) ・佐藤 隆行・青木 翔 (日立) ・津田 侑 (NICT) ・川口 信隆・重本 倫宏・寺田 真敏 (日立)
可搬型 3 次元空間センシングデバイスを用いた軽量なりアルタイム物体検出	大河内 悠磨 ・ Rizk Hamada ・山口 弘純 (阪大)

以上 3 編

(3)FIT 論文賞

論 文 名	受 賞 者
オンライン割当における最小効用最大化	澄田 範奈 (東工大) ・河瀬 康志 (東大)
メルセンヌ・ツイスタのための最小テスト系列組込み法	渡邊 未来・山口 賢一・岩田 大志 (奈良高専)
講演音声認識の言語モデル適応のための Doc2vec によるフィルタリングを活用した自動コーパス構築	和田 蒼汰・早川 大智・岩田 憲治 (東芝)
脳波の位相同期により推定された機能的結合の中心性に基づくアルツハイマー病の判別	荒井 祐斗・信川 創 (千葉工大) ・池田 尊司・長谷川 千秋・菊知 充 (金沢大) ・高橋 哲也 (金沢大/福井大/魚津神経サナトリウム)
Novel view synthesis のための Multiplane image の超解像	佐藤 千幸・都竹 千尋・高橋 桂太・藤井 俊彰 (名大)
敵対的サンプル攻撃に対するデータ多様体の埋め込み幾何学に基づく防御手法	田崎 元・趙 晋輝 (中大)
権限情報の動的な再配置による特権昇格攻撃防止手法の提案と評価	葛野 弘樹 (神戸大) ・山内 利宏 (岡山大)
データ同化を用いた大規模イベントにおける分散退場の効果分析	丹羽 了・鷹見 竣希・重中 秀介・大西 正輝 (筑波大/産総研) ・保高 徹生・内藤 航 (産総研)

以上 8 編

(4)FIT ヤングリサーチャー賞

論 文 名	受 賞 者
マトロイド判定問題に対する ZDD を用いた解法とその評価	江本 洸海 (京大)
隠れマルコフモデルを用いたピアノ練習演奏の弾き間違い分析	加藤 徳啓 (釧路高専)
深層 CNN によるレーザ超音波可視化試験における欠陥検出と位置推定	中島 未椰 (群馬大)
ホログラフィックプロジェクタを用いたリアルタイム空中描画システムの開発	内田 十内 (高知大)

運転に対する過大自己評価の是正を阻害する高齢ドライバの情報受容特性	西本 昂生 (東大)
マスクの紐をインタフェース化する手法	山本 匠 (慶大)
モバイル学習者の読書行動に基づく未知単語推定	東村 理功 (阪公大)
仮想計算機モニタによるシステムコール検知箇所の推定	大森 卓 (岡山県立大)

以上 8 名

5. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

(1)ヒューマンコミュニケーション賞

研究会名	業 績	受 賞 者
HCS	視覚障がい者のためのアーチェリー競技支援システムの開発 ～ 被験者実験による音響式照準器の性能評価～(HCS2021-64)	大平原 誠・辻岡哲夫・渡辺一志・岡 育生 (阪市大)
HCS	摂食を介したヒューマンロボットインタラクションを実現するための可食ロボットのデザインと動きの印象評価(HCS2021-47)	山木 廉 (阪大)・仲田佳弘 (電通大)・堀部和也・伴 碧・高橋英之・石黒 浩 (阪大)
HIP	オブジェクトベースの視覚的注意に基づく情報入力システム(HIP2022-2)	呂 雨虹・久方瑠美・金子寛彦 (東工大)
MVE	卓上直立空中像を 4 方向に示す光学系における迷光低減手法の検討(MVE2022-3)	武縄瑞基 (東大)・福嶋政期 (九大)・矢作優知・菊池知世・苗村健 (東大)
WIT	スポーツ中継番組への解説音声サービスの実証実験における視覚障害者の受容性調査(WIT2021-37)	一木 麻乃・宮崎 勝 (NHK)・今井 篤・都木 徹 (NHK ES)

以上 5 件

(2)HCG シンポジウム賞

業 績	受 賞 者
画像呈示時における眼球運動を用いた個人認証法【学生優秀インタラクティブ発表賞】	山上礼夢・田川風音・高野博史 (富山県立大)
スマートウォッチを用いたうなずき反応振動提示によるコミュニケーション支援システムの開発【学生優秀インタラクティブ発表賞】	小池健汰 (岡山県立大)・石井裕・渡辺富夫 (岡山県立大)
バーチャルヒューマンの歩行動作を用いた譜面理解に関する研究【学生優秀インタラクティブ発表賞】	松村由聖・矢野博明 (筑波大)
ペア型ソーシャルロボットを用いた負の感情伝達に基づく遠隔非同期インタラクション【最優秀インタラクティブ発表賞】	内田美紗子・廣川暢一・モダルハサン・鈴木健嗣 (筑波大)
ブワッときたらそこに壁 ～ 距離差分から生成した振動刺激を通した障害物検知 ～【最優秀インタラクティブ発表賞】	吉田裕輝・奥田昂太・森田慎一郎・小林春美・武川直樹・中村明生 (東京電機大)
「ウェアデバイス」開発のためのニットセンサの作製とその評価【最優秀インタラクティブ発表賞】	泉 小波・一刈良介・三浦貴大・堀 典子・鶴岡利至・蔵田武志・牛島洋史 (産総研)
ヴァーチャルリアリティと現実社会における信頼・利他行動・関係流動性【特集テーマセッション賞】	李 楊 (名大)・山田順子 (立正大)・水口陽太 (オックス・ブルックス大)
社会的相互作用行動を拡張する複合現実感装置：発達支援教室における相互作用量分析の試み【特集テーマセッション賞】	大木美加・松田壮一郎 (筑波大)・榎本大貴 (LITALICO)・鈴木健嗣 (筑波大)
e スポーツ観戦時における観客間の緊張感共有デバイスの開発【特集テーマセッション賞】	橋場元紀・山崎洋一 (神奈川工大)
バーチャル柏センター見学システムの開発と一般公開での活用【特集テーマセッション賞】	大槻麻衣・大隈隆史 (産総研)
視覚障害者用ナビガイダンスシミュレーターインターフェース	エルデネサンブー デルゲルバヤ

【特集テーマセッション賞】	ル・松尾政輝（筑波技術大）・三浦貴大（産総研）・坂尻正次・大西淳児（筑波技術大）
What Can Data-driven Calibration Do for 6DoF Visual-Inertial Odometry? 【特集テーマセッション賞】	Huakun Liu・Monica Perusquia-Hernandez・Naoya Isoyama・Hideaki Uchiyama・Kiyoshi Kiyokawa (NAIST)
Sharing Heartbeat ～疑似心拍の触覚提示による心拍及び会話テンポへの影響～ 【特集テーマセッション賞】	藪谷瑞生・真柴雄一・前田祐佳・岡田幸彦・善甫啓一（筑波大）
白杖の訓練のための牽引力錯覚を利用した無線駆動型デバイスの試作 【優秀インタラクティブ発表賞】	田辺 健（産総研）・布川清彦（東京国際大）・土井幸輝（同志社女子大）・井野秀一（阪大）
音と触覚により楽しめるインクルーシブな落ち物パズルの検討 【優秀インタラクティブ発表賞】	松尾政輝・エルデネサンブー デルゲルバヤル・坂尻正次・大西淳児（筑波技術大）・三浦貴大（産総研）
場所同一性の提案と仮想現実技術による実現の試み 【優秀インタラクティブ発表賞】	青柳西蔵（駒澤大）・福森 聡（香川大）

以上 16 件

6. 研究会等に関する事項(定款 第4条 口号、ハ号)

6. 1 基礎・境界ソサイエティ／NOLTA ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：103回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
回路とシステム	前田 義信	5	1 2 3
情報理論	小嶋 徹也	4	1 3 8
信頼性	土肥 正	8	5 7
超音波	中村 健太郎	9	8 2
応用音響	古家 賢一	6	1 2 7
非線形問題	常田 明夫	6	1 5 5
VLSI 設計技術	池田 奈美子	4	1 2 2
情報セキュリティ	國廣 昇	4	1 1 7
信号処理	田中 聡久	5	1 7 1
ワイドバンドシステム	庄納 崇	4	1 3 5
システム数理と応用	尾崎 敦夫	4	1 1 0
思考と言語	森下 美和	5	4 5
技術と社会・倫理	大谷 卓史	5	6 8
ITS	藤井雅弘	5	8 4
スマートインフォメディアシステム	木村 誠聡	4	5 8
イメージ・メディア・クオリティ	魚森 謙也	5	9 1
高信頼制御通信	東 俊一	4	1 3 5
バイオメトリクス	今岡 仁	4	7 3
複雑コミュニケーションサイエンス	赤井 恵	4	8 5
安全・安心な生活と ICT	和田 友孝	4	5 9
ハードウェアセキュリティ	永田 真	4	9 3
合計		1 0 3	2, 1 2 8

6. 2 通信ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：139回 また、第二種研究会、第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
アンテナ・伝播	山田 寛喜	12	251
宇宙・航行エレクトロニクス	森山 敏文	8	120
衛星通信	井家上 哲史	5	74
環境電磁工学	西方 敦博	9	96
ネットワークシステム	大石 哲矢	10	251
情報ネットワーク	波戸 邦夫	7	125
コミュニケーションシステム	梅原 大祐	7	100
電子通信エネルギー技術	中島 善康	6	60
光通信システム	星田剛司	8	88
無線通信システム	樋口 健一	10	297
コミュニケーションリテリ	岡本 淳	6	106
フォトニックネットワーク	古川 英昭	6	73
光ファイバ応用技術	山田 誠	6	66
情報通信マネジメント	野村 祐士	5	66
インターネットアーキテクチャ	義久 智樹	7	91
スマート無線	亀田 卓	5	101
短距離無線通信	野田 華子	5	69
ヘルスケア・医療情報通信技術	田中 宏和	5	59
無線電力伝送	西川 健二郎	7	62
センサネットワークとモバイルインテリジェンス	山本高至	5	115
合計		139	2,270

6. 3 エレクトロニクスソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：81回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
機構デバイス	上野 貴博	3	35
磁気記録・情報ストレージ	田河 育也	4	29
超伝導エレクトロニクス	水柿 義直	3	17
電子ディスプレイ	山口 雅浩	4	8
電子デバイス	藤代 博記	7	97
電子部品・材料	中村 雄一	7	106
電磁界理論	出口博之	4	79
シリコン材料・デバイス	大見 俊一郎	8	92
マイクロ波	末松憲治	10	178
集積回路	高橋 真史	3	72
有機エレクトロニクス	山田俊樹	9	90
光エレクトロニクス	橋本 俊和	6	121
レーザ・量子エレクトロニクス	高原 淳一	5	81
エレクトロニクスシミュレーション	柴山 純	4	101
マイクロ波テラヘルツ光電子技術	菅野 敦史	4	67
合計		81	1,173

6. 4 情報・システムソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：113回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ME とハイサイバネティクス	堀 潤一	7	71
ライフインテリジェンスとオフィ情報システム	戸田 浩之	6	64
画像工学	児玉和也	6	168
言語理解とコミュニケーション	吉田 光男	4	29
コンピュータシステム	鯉渕 道紘	4	55
コンピューテーション	宇野 裕之	5	37
人工知能と知識処理	清 雄一	4	54
ソフトウェアサイエンス	岡野 浩三	4	73
データ工学	吉田尚史	2	14
パターン認識・メディア理解	内田誠一	5	127
デバイス・ブルコンピュティング	土屋 達弘	7	114
ニューロコンピュティング	山川 宏	5	117
知能ソフトウェア工学	猿渡 卓也	5	69
音声	戸田 智基	5	91
教育工学	渡辺健次	9	94
医用画像	本谷秀堅	5	130
ソフトウェアインタラティブモデリング	五月女 健治	4	33
リコフイキ・キャラブルシステム	佐野 健太郎	4	95
情報通信システムセキュリティ	吉岡克成	4	80
情報論の学習理論と機械学習	杉山 将	4	134
マルチメディア情報ハイティング・エンリッチメント	西村竜一	6	92
クラウドネットワークロボット	神原 誠之	4	39
サービスコンピュティング	木村 功作	4	48
合計		113	1,828

6. 5 ヒューマンコミュニケーショングループ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：20回 また、第二種研究会及び第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ヒューマンコミュニケーション基礎	神田 智子	5	99
ヒューマン情報処理	和田 有史	6	94
メディアエキスペリエンス・バーチャル環境基礎	清川 清	5	121
福祉情報工学	酒向 慎司	4	28
合計		20	342

7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項(定款 第3章)

各ソサイエティ及びグループにおける会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数 (ESSにNLSも含む)

	ESS	CS	ES	ISS	NLS	HCG	合計
2021年度末 登録数	4,103	7,799	4,189	7,814	274	783	24,962
	【151】	【321】	【178】	【282】	-	-	【932】

2022年度末 登録数	4,021	7,710	4,081	7,697	295	792	24,596
	【153】	【327】	【177】	【281】	-	-	【938】
前年度との差	-82	-89	-108	-117	21	9	-366
	【2】	【6】	【-1】	【-1】	-	-	【6】

注) ESS : 基礎・境界ソサイエティ
CS : 通信ソサイエティ
ES : エレクトロニクスソサイエティ
ISS : 情報・システムソサイエティ
NLS : NOLTA ソサイエティ
HCG : ヒューマンコミュニケーショングループ

Ⅲ. 支部事業

1. 北海道支部

2022年度は、支部連合大会、各講演会等の毎年実施してきて効果的な事業、学生会発表研究会（インターネットシンポジウム）の開催など当支部独自の事業を継続して行い、最大限の会員サービスに努めた。

1-1 事業概要

2022年度の諸事業は年度当初の計画に沿って以下のとおり実施した。

1-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

- ア. 講演会：4件開催した。（北海道大学 北見工業大学）
- イ. 支部連合大会：電気・情報関係学会で組織された連合大会を1回開催した（一般講演数135件、参加者数378名）。オンライン開催
- ウ. 専門講習会：4名の講師を招へいし、ホログラフィ技術の流れと展望（過去、現在、未来）をテーマとして講習会を開催した（参加者数20名）。
- エ. 総務省北海道総合通信局と電子情報通信学会北海道支部との意見交換会（参加者数：17名）

1-1-2 教育事業（定款 第4条 ホ号）

- ・ 応用物理学会が企画した主に小中高生を対象としたイベント（「リフレッシュ理科教室」サイエンス・オリエンテーリング in 札幌 2022）を共同主催した（参加者数：59名）。

1-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ヘ号）

- ア. 学生会主催講演会：3件開催した。（室蘭工業大学 北見工業大学 北海道大学）。
- イ. 学生見学会：1件開催した。（北見工業大学）
- ウ. 学生会研究発表会：インターネット上で論文発表を行うインターネットシンポジウムを1回開催した（発表件数23件）。
- エ. 室蘭工業大学学生ランチ活動として、講演会を開催。支部連合大会にてIEEE 北海道大学・室蘭工業大学 Student Branch とともに学生交流会を企画した。

1-2 選奨（定款 第4条 ホ号）

1-2-1 2022年度北海道支部学生奨励賞

北海道支部における学生奨励賞の選奨細則に基づき以下の10名を選定（推薦5名、公募5名）し、2023年3月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属
梶原 朋也	北見工業大学 大学院工学研究科工学専攻 機械電気工学プログラム
上川 恭平	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
文 清一	北海道大学 大学院情報科学院 情報エレクトロニクスコース
丸山 皓貴	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
和田 篤士	北見工業大学 大学院工学研究科工学専攻 情報通信工学プログラム
奥谷 怜平	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
北村 洸一	北海道大学 大学院情報科学院 システム情報科学コース
櫻井 慶悟	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
稗田 直哉	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
望月 大翔	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース

1-2-2 2022年度北海道支部学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞

インターネットシンポジウム優秀発表賞細則に基づき以下の3名を選定し、2023年3月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
川勝 孝基	北海道大学	局所的な電気刺激が誘発する小動物脳波応答の時空間的解析 ―脳内電場分布推定とフレキシブル基板多点計測との比較―
熊木 礼於奈	北海道大学	短符号長 Polar 符号復号のための全結合ニューラルネットワークの構造比較
平井 康太	北海道大学	環境センシング向け IoT デバイスの間欠動作による低消費電力化検討とその実機評価

*北海道支部学生ランチ顧問表彰（発表賞）

氏名	所属	氏名	所属	氏名	所属
大森 裕介	公立千歳科学技術大学	能登 幸広	室蘭工業大学	李 聖博	北見工業大学

* 北海道支部学生ランチ顧問表彰(貢献賞)

氏名	所属
中島 大地	北見工業大学

1-2-3 2022 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会若手優秀論文発表賞

2022 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会における若手発表を対象として、若手優秀論文発表賞選考委員会において選考を行い、以下の 11 名を受賞者として選定、賞状と副賞を贈呈した(順不同、敬称略)。

氏名	所属	氏名	所属
鈴木 紗楽	室蘭工業大学	佐藤 広務	北海道大学
大澤 拓門	北海道大学	稗田 直哉	室蘭工業大学
西川 拓次	北海道大学	田中 智朗	公立千歳科学技術大学
七田 亮	北海道大学	五箇 亮太	北海道大学
檜垣 長陽	公立千歳科学技術大学	荒澤 孔明	北海道科学大学
山本 一輝	北海道大学		

2. 東北支部

2022 年度は、事業計画に基づき以下の各事業を実施した。また、支部運営委員による事業活性化ワーキンググループを設置して、ジュニア向け事業・地域活性化施策・広報の充実等を重点テーマとして一層の事業充実のための検討を継続して行っている。

2-1 事業概要

2-1-1 一般事業(定款 第4条 ロ号)

- ア. 講演会 7 件(いずれもオンライン開催)を実施した。
- イ. 東北支部連合大会 1 件を実施した(オンライン開催)。
- ウ. 協賛・後援事業 4 件を実施した。

2-1-2 教育事業(定款 第4条 ロ号、ヘ号)

小中高生向け事業 3 件(共催)を実施した。

2-1-3 学生会事業(定款第4条ロ号、ヘ号)

東北大学に学生ランチを設置し活動を行った。

2-2 選奨(定款 第4条 ホ号)

2-2-1 学生優秀論文賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した(五十音順、敬称略)。

授賞者氏名	所属	講演題目
武山 莉奈	東北大学	赤血球集合度評価を目指した超音波伝播減衰特性の in vivo 計測一身体模倣ファントムの減衰係数計測
近野 翼	東北大学	眼底 3 次元画像解析のための画像セグメンテーションに関する検討

2-2-2 学生優秀発表賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した(五十音順、敬称略)。

授賞者氏名	所属	講演題目
神谷 壮紀	山形大学	8 角形多端子 MOSFET の各端子の磁界検出特性の評価
佐々木 啓太	東北工業大学	屋内配送用全方向移動ロボットの開発と LiDAR SLAM による障害物回避
田中 柊羽	山形大学	LSTM を用いた Bluetooth 屋内測位システムの精度向上
平間 圭悟	東北工業大学	自己パルス発振アレキサンドライトレーザーのサブワット級動作特性
八重樫 暁	山形大学	ストレス計測の安定化に向けたイヤークリップ型脈波検出デバイスの研究

2-2-3 優秀学生表彰について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した(五十音順、敬称略)。

授賞者氏名	所属	授賞者氏名	所属
稲川 恭也	福島工業高等専門学校	新田 彩奈	八戸高等専門学校
上野 聡太	東北学院大学	鈴木 晴登	山形大学
扇田 英寿	八戸工業大学	竹永 裕貴	会津大学
栢木 優希	秋田県立大学	富田 理人	東北文化学園大学
菊池 春希	一関工業高等専門学校	平井 嘉人	東北大学
工藤 遼太郎	弘前大学	星野 柊平	東北工業大学
黒須 愛祐美	医療創生大学	堀野 泰輔	仙台高等専門学校
郡司 遥輝	日本大学	南野 冠太	秋田工業高等専門学校
小林 聡太	仙台高等専門学校	村松 亨朗	岩手大学

齋藤 太新	鶴岡工業高等専門学校	吉田 奈央	東北大学
佐藤 雄亮	秋田大学		

2-2-4 学生会活動貢献賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（敬称略）。

授賞者氏名	所属	表彰事由
田中 詠・ 松下 明哲	東北大学	東北大学学生ランチおよび東北支部学生連合会の代表者として、支部事業活性化WG 討論会への積極参加、新規事業の企画・提案・イベント実施による支部事業活性化への貢献

3. 東京支部

2022年度は、支部会員へのサービスを以下の観点から充実させることを目標とした。一つは、この2年間の間にやむを得ず中止・縮小していた企画を可能な範囲でコロナ以前の状態に戻し、以前と同様のサービスを提供することである。もう一つは、この2年間で得られたオンライン・ハイブリッド開催方法、あるいは企画の広報についての知見を元に、コロナ以前よりもさらに充実し、かつ安心・安全に配慮したサービスを提供するための事業形態について検討・試行することである。

3-1 事業概要

2022年度の諸事業は、年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

3-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

最新の研究開発動向を紹介する企画を継続的に開催しただけでなく、電子情報通信学会の新たな取り組みである企業イニシアティブ活動と連携した第1回企業イニシアティブ活動シンポジウムを開催した。社会状況に応じてオンライン/ハイブリッドの開催形態を柔軟に採用し、シンポジウム（3回、参加者 計 341名）、見学会（1回 参加者 20名）を開催し、大変盛況であった。

3-1-2 教育事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

東京支部地域内の学校、企業、NPOなどと連携し、共同主催の教育イベントの公募を行い、3件を採択したが、新型コロナウイルス感染症の影響により、1件が現地開催、1件がオンライン開催、1件が開催中止となった。

3-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

- ・オンライン講演会（1回 参加者 33名）、オンライン見学会（1回 参加者 31名）を開催し参加者の知識の向上に役立ち大変有意義であった。
- ・当支部学生会活動のPRの一環として、学会誌12月号「学生会だより」の記事を執筆した。
- ・学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、また最近行っている研究の紹介のための研究発表会を3月4日にオンラインにて開催した。本年度の発表件数は135件であった。（うちジュニア会員は9件）。
- ・学生ランチの5校が子供科学実験教室、講演会、交流会等を実施した。

3-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

3-2-1 2022年度東京支部学生奨励賞

東京支部学生奨励賞選奨規程に基づき、下記12名を選定し、贈呈した。（五十音順、敬称略）

氏名	所属	氏名	所属
阿瀬 駿佑	東京電機大	桑原 世紀	芝浦工大
石井 悠斗	湘南工科大	末吉 勇斗	日大
伊藤 稜	茨城大	中島 尚哉	芝浦工大
岡崎 景滉	電通大	星野 拓巳	都立産技高専
河西 孝明	東京電機大	宮崎 淳	東京工芸大
木屋 大地	日大	吉永 帆花	茨城大

3-2-2 2022年度東京支部学生功労賞

東京支部学生功労賞選考方針に基づき、下記3名を選定し、贈呈した。（五十音順、敬称略）

役職	氏名	所属
学生会委員	相澤 廣樹	拓殖大
学生会委員	大井 鞠奈	日本女子大
学生会委員	佐藤 拓実	千葉工大

4. 信越支部

2022度は、コロナウイルスが社会に甚大な影響を与える中で、オンライン会議システムを活用した支部大会、講演会等のイベントを企画、実施、支援した。長野県、新潟県内における学会活動の活性化

や学生会活動の更なる強化を促進するとともに、信越支部ならではの新たな活動についての検討も進めた。

4-1 事業概要

2022 年度の諸事業は年度当初の計画を変更し、下記のようにそれぞれ実施を行った。

4-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ・支部大会（1 回、発表件数 128 件）をオンライン開催で行った。支部からの参加者を中心に、電子情報通信に関する情報交換及び議論の場として役立った。
- ・講演会は 3 回（新潟地区 1 回、長野地区 2 回）行った。電子情報通信に関する先端的な知識の向上に役立った。

4-1-2 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

- ・研究交流会：本支部の主催するもの 1 回（新潟大・オンライン開催）を行った。学生会員の交流促進、学生自身の電子情報通信技術に対する意識の向上に役立った。

4-2 選奨に関する事項（定款 第 4 条 ホ号）

信越支部内における研究活動を評価し表彰した。

4-2-1 2022 度信越支部学生奨励賞

選奨規程に基づき下記の 14 名を選定し贈呈した。（順不同、敬称略）

氏名	所属	講演・研究題目
渡邊 貴宣	新潟大学	水中電磁界評価のための Sommerfeld 積分の数値積分手法の比較
加藤 立騎	新潟大学	ミリ波等間隔 2 次元 MIMO レーダを用いた危険物の 3 次元イメージングに関する実験的検討
原田 宗玄	長岡技術大学	感情誘発語を含む聴覚刺激に対する瞳孔反応の特徴抽出の試み
佃 充宏	長岡技術大学	言語モデルによる日本語文章中の誤り箇所検出における検出精度の改善
鈴木 翔太	信州大学	Android 端末を用いた音響通信における 8QAM/PORC-OFDM システムの特性評価
川里 康太	信州大学	平坦な色成分を抽出平坦な色する色変換における第二主成分の計算法
川久保 峻	新潟工科大学	ラリーにおけるマイクロフォンを利用した卓球ボール落下位置の推定
野村 駿平	新潟工科大学	低消費電力型水位計の開発
井上 悟	公立諏訪東京理科大学	iPS細胞拍動の加速度とその角度を特徴量とした判定モデルの作成
上條 康佑	公立諏訪東京理科大学	ライン式工場型アンサンブル学習による生産数予測
山口凜太郎	長野工業高等専門学校	折り曲げ可能な QZSS 用平面アンテナに関する研究
小宮山晃弘	長野工業高等専門学校	折り曲げ可能な QZSS 用平面アンテナの高性能化に関する研究
矢野 夏海	長岡工業高等専門学校	Visual Inspection System Using Multi-Layer Feature Sparse Coding with Acoustic Support
山岸 遼平	長岡工業高等専門学校	反射輝度解析に基づくコンクリート表層品質評価法の改善

4-2-2 2022 度信越支部ベストプラクティス賞

選奨規程に基づき下記の研究室を選定し贈呈した。

順位	所属
1 位	新潟大学工学知能情報システムプログラム波動情報研究室（山田研究室）
2 位	公立諏訪東京理科大学工学部情報応用工学科 適応信号処理研究室（田邊研究室）
3 位	信州大学 工学部 電子情報システム工学科 田久研究室

5. 東海支部

2022 年度は、2021 年度に引き続き積極的にオンラインを利用し、活発な意見交換などを行うことができた。また、3 年ぶりに総合報告会も現地開催することができ、学生研究奨励賞等の授与式も現地で直接学生たちに授与することができた。

5-1 事業概要

2022 年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

5-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

講演会（2 回 参加者合計 232 名）をそれぞれハイブリッド・オンライン開催、専門講習会（1 回 参加者数 132 名）は同時通訳を利用しオンラインで開催した。また、昨年度に引き続き、

電気電子情報工学分野への女性進学を後押しする趣旨の女子学生向けイベント（参加者 25 名）もオンライン開催した。例年共催をしている小中高生向け理科教室は規模を縮小して 3 年ぶりに開催することができた。また、見学会は中止となった。

5-1-2 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号）

講演会（2 回、参加者数 200 名）、学生研究発表会（2 回、参加者合計 231 名）は、学生の知識向上、学会活動の宣伝、他校学生間交流に役立ち有意義であった。

卒業研究発表会も 2022 年度は 3 年ぶりに現地開催し、発表件数は 70 名、参加者は 92 名であった。

5-1-3 その他（定款 第 4 条 ロ号）

電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会（参加者 608 名）を 8 学会で、オンラインにて共同開催した。

5-2 選奨に関する事項（定款 第 4 条 ホ号）

5-2-1 2021 年度 東海支部学生研究奨励賞

学生研究奨励賞選奨規程に基づき下記の 15 名を選定し、2022 年 6 月に表彰した。

（氏名五十音順）

氏名	所属（2022 年 3 月現在）	研究テーマ
■高専／学部		
斉藤 大貴	豊橋技術科学大学 工学部 情報・知能工学科	次世代不揮発メモリ VC-MRAM を用いた低消費電力コンピュータのシステムレベルシミュレーションによる評価
■修士		
五十川 翔梧	愛知県立大学大学院 情報科学研究科 メディア情報専攻	量子通信における量子測定過程の幾何学的表現に関する研究
伊与田 友貴	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	デジタルサイネージ・イメージセンサ可視光通信における機械学習に基づく信号復調方式
川出 有紗	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	空間多重低輝度スクリーンカメラ間可視光通信のデータレート向上とセキュリティ強化に関する研究
佐藤 栄作	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科 電気・電子情報工学専攻	帯域内全二重通信の性能改善に関する研究
中村 藍梨	愛知工業大学大学院 経営情報科学研究科	デバイス主体の自律分散処理サービスフレームワークの提案
松尾 武	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	ファイバ粒度ルーティングネットワークの設計法
水野 良哉	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	圧縮センシングによる動的光線空間の取得
奥村 守	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	電波暗号化変調を用いた Beyond 5G IoT 通信の性能改善の研究
澤 優太	三重大学大学院 工学研究科 電気電子工学専攻	IEEE 802.15.7 可視光通信ネットワークにおける改良型バックオフ手法の提案および理論解析に基づく性能評価に関する研究
角谷 勇仁	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	フーリエ級数展開によるローカルブラシアンフィルタの高精度近似
原田 誠一	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	深層マルチタスク学習による感情のクロスモーダル表現
松本 まりも	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科 電気・電子情報工学専攻	体内の医療デバイスに向けた電界結合型 WPT の設計手法の構築
■博士		
唐 正強	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	光の残像を用いたイベントカメラ可視光通信システムの構築
箕浦 大晃	中部大学大学院 工学研究科 情報工学専攻	Deep Learning を用いた移動物体間のインタラクションを考慮した経路予測の研究動向

5-2-2 2022 年度 卒業研究発表会

3 月 1 日、現地（岐阜大学）にて卒業研究発表会が開催され、下記 8 名を表彰することとした。（所属五十音順）

最優秀卒業研究発表賞 (1件)		
講演者名	所属	講演題目
山本 卓巳	愛知工業大学	YOLO を用いた視覚障害者向け現金管理支援手法の検討
優秀卒業研究発表賞 (7件)		
講演者名	所属	講演題目
小泉舞歌	名古屋工業大学	Ethernet ベースのネットワークにおける IEEE 802.1AS の時刻同期精度の評価
伊藤隆佑	名城大学	色変調を用いた可視光通信における補色によるフリッカの抑制手法に関する検討
石田匠	名古屋大学	大気揺らぎとポインティングエラーを伴う自由空間光通信における知能反射面位置と通信性能の関係
磯崎新	名古屋大学	雑音を活用した 1bit ADC 受信機における非線形増幅器の影響
河辺志温	名古屋大学	無線 LAN を用いた空対空ドローン間通信における MIMO 技術による性能向上効果の実験的検証
片桐翼	愛知工科大学	暗所撮影画像に対するグレースケール手法の一検討
岩本侑哉	愛知県立大学	歩行者の注視方向解析に基づく external Human Machine Interface の信頼感評価

5-2-3 2022 年度 学業成績優秀賞

学業成績優秀賞の規程に基づき下記 26 名を表彰した。(所属五十音順)

受賞者名	受賞者所属
矢野 椋大	愛知県立大学 情報科学部 情報科学科
尾崎 孝典	愛知工科大学 工学部 情報メディア学科
小水流 健太	愛知工業大学 工学部 電気学科
上原 温揮	愛知工業大学 情報科学部 情報科学科
村上 友紀	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 情報コース
石原 健翔	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 電気電子コース
杵山 太志	近畿大学工業高等専門学校 生産システム工学専攻 (電気電子工学)
池上 陽向	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科 電気電子コース
小柳 賢季	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科 制御情報コース
木村 湧哉	静岡大学 工学部 電気電子工学科 エネルギー・電子制御コース
久保寺 玲央	静岡大学 工学部 電気電子工学科 情報エレクトロニクスコース
南 友基	鈴鹿工業高等専門学校 電子情報工学科
山田 活樹	豊田工業高等専門学校 情報工学科
十亀 龍星	豊橋技術科学大学工学部 電気・電子情報工学課程
扇塚 和希	豊橋技術科学大学 情報・知能工学課程
澤田 侑典	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科
志水 祐介	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科 電気電子分野
寺田 龍人	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科 電気電子分野
奥田 陵太郎	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科 電気電子分野
伊藤 暢浩	名古屋工業大学 工学部 情報工学科
古木 琢磨	沼津工業高等専門学校 制御情報工学科
小倉 拓也	三重大学 総合工学科 情報工学コース
佐藤 秀	三重大学 総合工学科 電気電子工学コース
安間 美貴	名城大学 理工学部 情報工学科
仙田 彩音	名城大学 理工学部 電気電子工学科
加藤 美沙	名城大学 理工学部 メカトロニクス工学科

6. 北陸支部

北陸地区の会員に対する情報提供、会員相互の情報交流を目指し、講演会・研究発表会・見学会等を開催した。また、支部選奨規程に基づき、学生に対する表彰を行った。さらに、新たな会員サービスについても実施した。

6-1 事業概要

2022 年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

6-1-1 一般事業 (定款 第 4 条 ロ号)

- ・講演会（2回）・見学会（1回）
講演会の実施を1回、講演会および見学会を1回実施した。
その他、シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を7件行った。
- ・電気・情報関係学会北陸支部連合大会（1回）
富山県立大学が開催を担当し、オンライン形式で9月3日（土）に実施した。
発表件数は209件、うち81件が電子情報通信学会の発表であった。
また、大会内で本支部が担当する招待講演（1回）を実施した。

6-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ヘ号）

- ・学生向け講演会（0回）
新型コロナウイルス感染拡大の影響で、実施していない。

6-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

6-2-1 2022年度学生優秀論文発表賞

電気関係学会北陸支部連合大会における学生の発表を対象として、支部学生優秀論文発表賞規程に基づき審査を行い、下記の20名を受賞者として選定した。2023年2月に賞状と賞金を贈呈した。
(順不同、敬称略)

氏名	所属	発表論文タイトル
溝手 啓太	金沢大学	XRを用いた地球電磁環境の教育支援用オブジェクト共有システムの基礎開発
一橋 佳生	金沢工業大学	映像を活用したプログラミング学習システム
原田 隼輔	富山大学	都市運動公園における駐車場利用の実態調査
深澤 亮祐	富山大学	自発分極を利用した有機発光ダイオードの正孔注入特性とアニール温度依存性
大谷 遼太	富山大学	OTA評価装置における測定エリア拡大の検討
大坪 海翔	富山大学	モノパルス測角手法における位相差アンビギュイティ排除方法の検討
甲斐 雅也	富山県立大学	富山県における交通事故現場周辺の道路形状による事故属性の分析
小池 祐生	富山県立大学	積層ペーパーズゴースト型ライトフィールドディスプレイの視点数拡張手法
深津 明日香	富山県立大学	光伝送行列を用いたレンチキュラレンズ型裸眼立体ディスプレイのキャリブレーション時間短縮手法の検討
鶴谷 百恵	高志中学校, 福井高専ジュニア ドクター受講生	個人の嗜好を考慮した伝統工芸品の情報発信に関する研究
伊藤 圭護	福井大学	年賀はがき当選確認アプリの構成と手法
加藤 寿輝	福井大学	ICAを用いたMIMOの受信信号分離におけるLPFの効果
岸本 雄氏	福井大学	プレゼンテーション動画作成支援システム～オープンキャンパスのための～
大島 文也	福井大学	ネットワークスライスの帯域制御を実現するtrTCMのP4実装
池田 彰宏	福井大学	位置拘束付電力最小化に基づく無線電力伝送の有効性比較
池田 友典	福井大学	実運用環境下での車載MIMO通信に向けたアンテナ構成・電波環境の評価
木邨 春菜	福井大学	量子インターネットにおけるE2E伝送とHBH伝送を併用した量子ネットワークシステムの提案
林 真之介	福井大学	シミュレーションによるアレーアンテナBF利得評価
Cui Zhihan	北陸先端科学 技術大学院大学	Study of Network Capacity in Wireless Multihop Networks with Factor Graph
伊藤 健一	北陸先端科学 技術大学院大学	前処理付きGMRES法のGPUに対する適合性調査

6-2-2 2022年度優秀学生賞

支部優秀学生賞選奨規程に基づき審査を行い、下記の11名を受賞者として選定した。2023年2月に賞状と賞金を贈呈した。
(順不同、敬称略)

学校	所属	氏名
石川工業高等専門学校	電気工学科	長野 史門
金沢工業大学	工学部 電気電子工学科	臼田 悠斗
金沢大学	理工学域 電子情報通信学類	近藤 岳琉
国際高等専門学校	国際理工学科	青木 心路
富山県立大学	工学部 電子・情報工学科	河原 裕紀
富山高等専門学校	電子情報工学科	平田 怜
富山大学	工学部工学科	押川 樹里

福井工業高等専門学校	電子情報工学科	林 明香里
福井工業大学	工学部 電気電子工学科	田島 舜也
福井大学 大学院	工学研究科 知識社会基礎工学専攻知能システム科学コース	中山 翔太
北陸先端科学技術大学院大学	先端科学技術研究科	ANUNPATTANA, Punyawee

6-3 新たな会員サービスに関する事項

新たな会員サービスの企画の一つとして、11月9日(水)に「学生間研究交流会」をオンラインにより初開催した。企業研究者から1件の基調講演と、3セッションで30名の学生に発表してもらった。参加者数は60名(教員、聴講者を含む)であった。

7. 関西支部

関西(大阪府、京都府、奈良県、滋賀県、和歌山県、兵庫県)を拠点としている会員に対するサービス及び社会的責務として、講演会、見学会、講習会、教育事業等を企画し実施した。

講演会等の開催にあたっては、学会の会員数の維持・増加を目指し、多くの方に参加頂けるテーマを選定した。また、学生会活動を通じ、地域学生にとっての学会の価値向上を図った。

7-1 事業概要

7-1-1 一般事業(定款 第4条 ロ号)

ア. 講演会: 1回(計画1回)、参加者20名、テーマ「アフターコロナ時代に向けたコミュニケーションDX」をオンラインで実施。

イ. 見学会: 1回(計画1回)、参加者23名、西日本旅客鉄道様の運行管理システムを見学。

ウ. 講習会: 2回(計画5回)、参加者57名(2回の合計)であった。暗号技術(13名)に関する少人数制の講習会を実施した。また、社会人が参加しやすいように18時から開始されるイブニングセミナー(44名)を「量子アニーリング技術とその応用」というテーマで開催した。2023年3月27-28日に画像処理の講習会を実施。

7-1-2 教育事業(定款 第4条 ロ、ヘ号)

ア. 講演会: 1回(計画1回)、参加者11名、テーマ「小さなコンピュータでビジュアルプログラミング」で、実習も含めた講演会を開催。

イ. 関西支部地域内の学校、企業、NPOなどと連携し、共同主催、協賛等の教育イベントについてコロナ禍の影響で開催を見送った。

7-1-3 学生会事業(定款 第4条 ロ号、ホ号、ヘ号)

ア. 講演会: 1回(計画1回)、参加者34名、NTT 西日本株式会社、住友電気工業株式会社の各社から若手技術者を招いて「若手企業技術者に関する講演」を対面で実施。

イ. 研究発表会: 1回(計画1回)、2022年3月15日に大阪大学で開催。

7-2 選奨に関する事項(定款 第4条 ホ号)

7-2-1. 2022年度 関西支部学生会支部長賞 奨励賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の6名を選定し、2023年3月15日頃に贈呈する。

(敬称略)

氏名	所属	講演題目
大黒佐輔	同志社大学	レイトレーシングを用いた OFDM-SSM の秘密伝送の評価
山本拳太郎	京都工芸繊維大学	高感度化座屈ダイヤフラム上 MEMS センサの圧電層負荷抑制プロセス評価
山本純平	京都工芸繊維大学	共振周波数可変圧電センサを用いた高分解能・低ゴースト超音波計測法の評価
石川裕也	大阪府立大学	QR コード画像にかかる暗影の深層学習による除去法
竹森聖起	大阪工業大学	エネルギー散逸を考慮したラグランジアン ニューラルネットワークによる力学系の学習
栗田侑実	大阪府立大学	CG 画像に基づく深層学習による三次元計測縞投影法の精度向上の基礎検討・カメラの幾何学的歪み補正の導入

7-2-2. 2022年度 関西支部 優秀論文発表賞

関西支部優秀論文発表賞規定に基づき下記の5名を選定し、2023年4月20日頃に郵送で贈呈する。

(敬称略)

氏名	所属	講演題目
植山洗希	兵庫県大	導電糸人工筋肉の熱処理時の長さによる動作時の最適荷重の推移
新谷一貴	同志社大	アンテナ特性の変化を利用したセンシング方式における距離検出
内田享佑	大阪府大	非線形光学効果を用いたルートナイキストパルス発生法に与えるファイバ損失の影響
明石健太郎	神戸大	ビームサーチを用いたグラフ彩色アルゴリズム

岩崎悠斗	大阪公立大学	OpenFlow 搭載型シングルボードコンピュータを用いたウェブベースネットワーク設定機能
------	--------	---

7-2-3. 2022 年度 関西支部学生会支部長賞 功労賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の 13 名を選定し、2023 年 3 月 15 日に贈呈した。
(敬称略)

本賞は関西支部学生会に属する学生のうち、学生会幹事として、支部の活動活性化に多大な貢献をなした功績により表彰するものである。

特別功労賞

中尾 彰吾 (大阪大学)

功労賞

寺師 悠平 (大阪大学)、前田 貴也 (大阪大学)、玉柏 昌大 (大阪公立大学)、
樋口 貴大 (大阪公立大学)、前谷 忠之 (近畿大学)、伊藤 滉平 (近畿大学)、
ジョンソン ジョージェフ (近畿大学)、布野 翔也 (大阪電気通信大学)、
川極 恋 (大阪電気通信大学)、大石 一哉 (神戸大学)、平田 悠人 (立命館大学)、
西谷 洋太 (奈良先端科学技術大学院大学)、松岡 航太郎 (京都大学)、
田中 大貴 (立命館大学)

8. 中国支部

一般事業では、中国地区における電子情報通信関連分野及び学会の活性化を目指し、会員及び関連する地域の学生・学校・企業を対象とした各種講演会、講習会等を実施した。

学生会事業では、企業と連携して学生による、フレッシュ IT あわ〜ど (旧学生ケータイあわ〜ど) を中心に活動した。また、選奨に関する事項に基づき学生に対する各種表彰を実施した。

8-1 事業概要

8-1-1 一般事業 (定款 第 4 条 ロ号)

(1) 講演会 15 回 (主催 1 回 共同主催 14 回)、講習会 2 回 (共同主催 2 回)

(2) 見学会 1 回 (共同主催 1 回)

(3) 専門講習会 0 回

(4) シンポジウム等への後援・協賛 (4 回)

(5) 電気記念日行事に共催

開催日: 2023 年 3 月 25 日 (土)

開催地: 中国電力本社ビル

(6) 2022 年度 (第 73 回) 電気・情報関連学会中国支部連合大会

開催日: 2022 年 10 月 22 日 (土)

開催校: オンライン (島根大学)

幹事学会: 電気設備学会中国支部

参加者: 470 名、一般講演: 206 件

特別講演 題目: 成長を続ける島根の日本酒

講師: 未多仁 尊文 様 (AAO 島根の地酒をにぎわす会)

8-1-2 教育事業 (定款 第 4 条 ロ号、へ号)

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催計画目途立たず

8-1-3 学生会事業 (定款 第 4 条 ロ号、ホ号、へ号)

(1) 学生向け講演会及び見学会 1 回 (主催 1 回)

(2) 学生会自主活動の活性化

ア. フレッシュ IT あわ〜ど 2022 (応募数: 総数 42 件 (アイデア部門 38 件、作品部門 4 件))

イ. 電子情報通信学会中国支部ホームページの維持、管理 (年間 95 件対応)

ウ. 学生による支部ホームページの改訂作業を実施

8-2 選奨に関する事項 (定款 第 4 条 ホ号)

8-2-1 連合大会奨励賞表彰 (中国支部における連合大会奨励賞の選奨規程 2020 年 5 月 8 日改正)

電気・情報関連学会中国支部連合大会論文発表者より、下表に示す 21 名を選出した。(五十音順)

	氏 名	学 校 名	題 目
1	浅野 光	山口大学	有意味・無意味騒音が 3 刺激オドボール課題時の選択的注意に及ぼす影響
2	稲松 優利	鳥取大学	日時の曖昧な発話からの予定表生成
3	岩切 遼	広島大学	正実性制約と LASSO 回帰を用いたスパース IIR フィルタの設計

4	江野口 裕希	岡山理科大学	NoCに基づいた血管径計測手法における動的ルーティングアルゴリズム
5	大谷 元統	呉工業高等専門学校	4分の1波長線路と4分の1波長短絡スタブを利用した300GHz帯DTMライン帯域フィルタの設計
6	大西 朔永	岡山理科大学	ニューラルネットワーク対話モデルによる授業における深い学びの発話分析
7	大野 耀太郎	水産大学校	畳み込みニューラルネットワークを用いた混獲魚の魚種判別
8	岡田 颯太	岡山県立大学	斜め誘電体格子の散乱解析における多層分割法の改良
9	河野 冬紀	大島商船高等専門学校	Recycle-GANを用いた大腸CT画像における電子洗浄法に関する基礎検討
10	黒田 菜摘	津山工業高等専門学校	網膜に学んだアナログ-デジタル混在型エッジ検出基本回路の設計
11	田主 春月	岡山大学	空間的並列信号伝送を用いたLED可視光通信における最適変調方式選択の検討
12	辻 優太郎	島根大学	SCDVモデルを利用する技術用語に対応した自然言語文書検索の提案
13	永田 崇弘	島根大学	波長掃引型光周波数コムを用いた周波数変調連続波型光距離計
14	中山 海人	岡山大学	LED可視光通信受信機における選択型非線形歪補償法の検討
15	新田 翔也	島根大学	頭部移動量の観点から見た昇降動作におけるVR酔いに関する調査
16	橋本 ひかり	県立広島大学	全二重無線LANにおけるRTS/CTS併用型同期送信促進MACプロトコル
17	浜田 篤	岡山県立大学	加算のみに帰着した射影変換法におけるテ일러展開の応用
18	原 琳音	岡山県立大学	2段スリットアレイの音波伝搬特性におけるヘルムホルツ共振器の取付け位置の影響
19	山方 駿輔	近畿大学	分光脈波計測システムを用いた脈波中の個人固有のうなりの検出とAIによる個人識別
20	山下 竜太	鳥取大学	援助行動を促す「デジタルヘルプサイン」における安全な通信手法と効果の検証
21	渡邊 康平	広島市立大学	画像切抜と深層学習を用いた水位変化の推定

8-2-2 2021年度電気・情報関連学科優秀卒業生表彰（高校・高専・短大）
 連合大会事業の一環として下表に示す中国地区の58校90名を表彰
 （幹事学会：電子情報通信学会中国支部）

対象	表彰学校数		表彰者数
高校	広島県	11校	16名
	岡山県	13校	18名
	島根県	6校	13名
	鳥取県	5校	9名
	山口県	14校	16名
高専	中国地区	8校	17名
短大	中国地区	1校	1名
合計		58校	90名

8-2-3 学生功労賞の表彰（学生功労賞の選奨規程2010年5月28日制定）（敬称略）

	氏名	学校名	所属（受賞時）
1	伊藤 詩恩	鳥取大学	大学院 持続性社会創生科学研究科 情報エレクトロニクスコース
2	猪原 圭一	山口大学	大学院 創成科学研究科
3	大森 卓	岡山県立大学	大学院 情報系工学研究科システム工学専攻
4	柿根 尚喜	広島市立大学	大学院 情報科学研究科情報工学専攻
5	北川 大輝	広島大学	大学院 先進理工系科学研究科情報科学プログラム
6	齋藤 伸樹	岡山理科大学	大学院工学研究科 情報工学専攻
7	正畑 智徳	福山大学	大学院 工学研究科情報処理工学専攻
8	辻 優太郎	島根大学	自然科学研究科理工学専攻 知能情報デザイン学コース
9	松尾 龍弥	広島工業大学	大学院 工学系研究科情報システム科学専攻
10	山口 暁一	岡山大学	大学院 自然科学研究科 電子情報システム工学専攻

9. 四国支部

2022年度は、四国における電子・情報・通信工学分野での学術・技術振興に寄与できるよう、講演会、講習会、連合大会などの事業を実施し、四国内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。

9-1 事業概要

2022年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

9-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

- ・講演会は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、実施していない。
- ・専門講習会はいずれも対面にて2回実施した。

- ・支部協賛・後援事業はフォーラムやサマースクールなど2回実施した。
- ・2022年度電気・電子・情報関係学会四国支部連合大会（2022年9月24日）については対面にて実施し、会員については参加費を無料とすることで参加者数の増加を図った。講演論文について、論文を収録した論文集（ダウンロード版、DVD-ROM版）が9月24日に発行され、公知（発表件数：198件）

9-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、ヘ号）

- ・学生向け講演会（3回）では、様々な分野で優れた業績を持つ講師を招き、参加者は幅広く技術情報や知識を得た。
- ・学生ランチとして、3校が講演会、見学会、交流会等の活動を実施した。

9-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

9-2-1 令和4年度電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞

電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞選奨規程に基づき下記の50名を選定し、各機関の卒業式・修了式において贈呈した。（機関別、敬称略）

No.	学校名	所属学科・専攻名	氏名
1	愛媛大学工学部	工学科 電気電子工学コース	橋本 綾香
2	愛媛大学工学部	工学科 電気電子工学コース	上嶋 涼介
3	愛媛大学工学部	工学科 コンピュータ科学コース	松井 大樹
4	愛媛大学工学部	工学科 応用情報工学コース	石山 理紗
5	愛媛大学大学院理工学研究科	電子情報工学専攻 電気電子工学コース	高橋 達也
6	愛媛大学大学院理工学研究科	電子情報工学専攻 情報工学コース	杉本 孝太
7	高知大学理学部	応用理学科 情報科学コース	植田 悠斗
8	高知大学大学院	総合人間自然科学研究科理学専攻(修士課程)	三谷 永久
9	徳島大学理工学部	理工学科 電気電子システムコース	小谷 雪之丞
10	徳島大学理工学部	理工学科 電気電子システムコース	横山 雄大
11	徳島大学理工学部	理工学科 情報光システムコース (情報系)	本間 天譴
12	徳島大学理工学部	理工学科 情報光システムコース (情報系)	植田 青空
13	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	理工学科 情報光システムコース (光系)	竹一 憲太郎
14	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	電気電子システムコース	山崎 壮太
15	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	知能情報システムコース	矢野 大暉
16	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	光システムコース	中川 友莉恵
17	香川大学創造工学部	創造工学科 造形・メディアデザインコース	田中 凌太
18	香川大学創造工学部	創造工学科 情報システム・セキュリティコース	平見 修司
19	香川大学創造工学部	創造工学科 情報通信コース	石原 裕太
20	香川大学創造工学部	創造工学科 機械システムコース	清水 隆宏
21	香川大学大学院工学研究科	信頼性情報システム工学専攻	西畑 友登
22	香川大学大学院工学研究科	知能機械システム工学専攻	森本 裕介
23	徳島文理大学理工学部	機械創造工学科	西森 翔矢
24	徳島文理大学理工学部	電子情報工学科	中條 太喜
25	徳島文理大学大学院	システム制御工学専攻	美濃 和真
26	高知工科大学	システム工学群	奥田 真菜
27	高知工科大学	情報学群	小林 万也花
28	高知工科大学	情報学群	佐藤 玲奈
29	高知工科大学大学院工学研究科	電子・光システム工学コース	小池 智哉
30	高知工科大学大学院工学研究科	情報システム工学コース	小松 眞子
31	四国大学経営情報学部	メディア情報学科	山本 梨乃
32	阿南工業高等専門学校	創造技術工学科 電気コース	大畠 新大
33	阿南工業高等専門学校	創造技術工学科, 情報コース	森本 光
34	阿南工業高等専門学校専攻科	創造技術システム工学専攻	尾竹 祥太
35	高知工業高等専門学校	ソーシャルデザイン工学科, エネルギー・環境コース	臼木 貴羅
36	高知工業高等専門学校	ソーシャルデザイン工学科 情報セキュリティコース	野町 竜
37	高知工業高等専門学校専攻科	機械・電気工学専攻	公文 裕太

38	新居浜工業高等専門学校	電気情報工学科	三笥 慧人
39	新居浜工業高等専門学校	電子制御工学科	清水 創太
40	新居浜工業高等専門学校専攻科	電子工学専攻	中島 佑太
41	香川高等専門学校	電気情報工学科	岸本 麗央
42	香川高等専門学校	機械電子工学科	苧坂 浩貴
43	香川高等専門学校専攻科	創造工学専攻	筒井 巽水
44	香川高等専門学校	通信ネットワーク工学科	西山 真平
45	香川高等専門学校	電子システム工学科	小松 脩征
46	香川高等専門学校	情報工学科	曾根 大靖
47	香川高等専門学校専攻科	電子情報通信工学専攻	柏原 悠人
48	弓削商船高等専門学校	電子機械工学科	越智 将伍
49	弓削商船高等専門学校	情報工学科	原 楓子
50	弓削商船高等専門学校	生産システム工学専攻	宮地 香樹

10. 九州支部

2022年度は新型コロナウイルス感染症も落ち着きを見せたため、オンライン主体にて開催しつつ、対面での支部活動も再開した。

10-1 事業概要

2022年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

10-1-1 一般事業（新定款第4条ロ号）

- ア. 講演会：特別講演会をオンラインにて1回開催、一般講演会3回を開催した他、協賛・後援の講演会、シンポジウムを12件行った。
- イ. 専門講習会：佐賀大学にて現地およびオンラインのハイブリットにて開催し、「サイバーセキュリティにおける融合領域研究と社会への応用」という演題にて講師2名に講演頂いた。参加者は現地11名、オンライン37名と盛況であった。
- ウ. ワークショップ：アンテナ伝搬研究会と共催にて、アンテナ・伝搬における設計・解析ワークショップ「マイクロ波回路を複合した多機能アンテナ」を、有料にてオンライン開催し、学生、企業、大学関係者など参加者20名と盛況であった。
- エ. 電気・情報関係学会九州支部連合大会：長崎大学にて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響にて、大学に開催本部を設置しオンラインにて2日間に渡り開催された。参加者は一般講演数334件、企業講演1件、招待講演1件、特別講演1件、企画セッション1件、聴講者227名を数え大変盛況であった。
- オ. 総合通信局連携企画：九州総合通信局と当支部の連携事業として、連合大会の企画セッションにて2名の講師を招聘し、講演を行った。

10-1-2 教育事業（新定款第4条ロ、へ号）

- ア. 子供の科学教室：九州産業大学にて「お手軽電子工作」を開催。20名が参加し好評であった。なお、大分大学でも開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響にて中止された。
- イ. 科学体験プロジェクト：熊本高専と共催にて熊本県天草市での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響にて中止された。
- ウ. ものづくり教室：有明高専と共催にて「第17回エレクトロニクスものづくり体験教室2022」を開催。FMはこらじ作成と「FMたん」との生出演を行った。小中学生23保護者16参加いただき大変好評を得た。また当日の様子は地元新聞紙に掲載された。

10-1-3 学生会事業（新定款第4条ロ、ホ、へ号）

- ア. 学生会講演会：学生員で組織された学生実行委員会を中心に、長崎大学での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響にてオンライン開催に変更。138件の講演と96名の聴講者が、高専生から院生まで幅広い学生が多数参加し、大変盛況であった。
- イ. 学生ランチ交流会：学生会講演会にて、管内11の学生ランチ代表者が参加者に向けて活動報告のポスターセッションをオンラインにて行い、学会活動についての周知を図った。また、学生ランチ委員会を開催し、各ランチ同士の情報交換および交流を

図り大いに有意義であった。

ウ. 学生ランチ：11 ブランチが活動し、各自講演会や交流会などの活動を行った。

10-2 選奨に関する事項（定款第 6 条ホ号）

10-2-1 2021 年度 連合大会講演奨励賞

「電気・情報関係学会九州支部連合大会における講演奨励賞」表彰規程に基づき下記 8 名を選定し、2023 年 1 月付けにて表彰した。（順不同、敬称略）

表彰者名	所 属	演 題
中野 隼汰	大分大学大学院工学研究科 福祉環境工学メカトロニクスコース	パルス音の印象評価による障害物知覚の手がかりの検討
若杉 郁斗	宮崎大学大学院工学研究科 工学専攻	ブリズムを用いた光入力素子の結合特性に関する研究
杉本 真輝	長崎大学大学院工学研究科 総合工学専攻	ビバルディアンテナの近傍界強度に関する検討
迫田 和之	鹿屋体育大学 スポーツ情報センター	大規模 MIMO における BP 復号の誤り推定値の挙動： 分類とその比率
榊富 直人	九州大学工学部 電気情報工学科	波長可変レーザを用いたテラヘルツ波発生法の実証
斉藤 優也	九州大学工学部 電気情報工学科 計算機工学課程	適応的データバランス調整～オンライン予測の理論に 基づくアプローチ～
安藤 空	九州大学大学院システム情報科学府 電気電子工学専攻	PAM4 変調技術を適用したバースト伝送用光受信器の 自動利得制御回路の時定数制御回路に関する検討
若木田 康輝	佐賀大学大学院理工学研究科 理工学専攻 電気電子工学コース	Basic Study of Push-Push VCO Using Varactor-Loaded Quasi-Distributed-Element Transmission-Line Resonator

10-2-2 2022 年度 学生会講演奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記 13 名を選定し、2023 年 1 月付けにて表彰した。（順不同、敬称略）

講演者	所 属	演 題
三好 優衣	福岡工業大学工学部 電子情報工学科 4 年	顔・目・鼻情報を用いた機械学習による注視点推定
松尾 亮汰	長崎大学大学院工学研究科総合工学専攻 電気電子工学コース修士 1 年	920MHz 帯における海洋センサネットワーク用アンテナ
笹野 愛基	長崎大学大学院工学研究科総合工学専攻 修士 2 年	等倍スケールモデルにおけるビバルディアンテナを用いた電波型内視鏡の検討
濱屋 友啓	長崎大学大学院工学研究科総合工学専攻 修士 1 年	難聴者診療支援 End-to-End 音声認識における学習テキスト拡張法の検討
玉城 大生	鹿児島大学大学院理工学研究科工学専攻 情報・生体工学プログラム修士 2 年	機械学習による心拍変動指標を用いた体調増悪判別の試み
船津 大地	熊本大学大学院自然科学教育部 情報電気工学専攻博士前期課程 2 年	コンクリート内の腐食鉄筋のモデル化とレーダ応答の FDTD 解析
石井 終汰	九州工業大学大学院情報工学府 学際情報工学専攻修士 2 年	次数 4 の平面グラフにおけるオイラー均衡分割問題の計算困難性
今中 啓太	九州工業大学大学院情報工学府 先端情報工学専攻修士 2 年	多目的ナップサック問題のベンチマーク問題作成手法
中本 さや香	九州工業大学情報工学部 知能情報工学科 4 年	小論文自動採点のための文書力スコア推測
中島 寛人	九州工業大学大学院情報工学府 情報創成工学専攻修士 1 年	対話文における双方向文脈補完を用いた言い淀み検出
岡部 光汰	宮崎大学大学院工学研究科工学専攻 修士 2 年	加速度値を用いた四足動物における横臥状態の判別手法
赤星 陸斗	熊本高等専門学校 人間情報システム工学科 5 年	色と音の“共感性”に関する基礎的考察
村島 凌輔	熊本高等専門学校 情報通信エレクトロニクス工学科 5 年	トライコプターをベースとした固定傾斜ローター VTOL の研究

10-2-3 2022 年度 成績優秀賞

学生会表彰規程に基づき下記の 64 名を選定し、2023 年 3 月付けにて表彰した。（順不同、敬称略）

学 校	学 部	学 科	表彰者
九州大学	工学部	電気情報工学科 計算機工学課程	鳥羽 真仁
		電気情報工学科 電子通信工学課程	榊富 直人
福岡大学	工学部	電子情報工学科	國信 綾斗

学 校	学 部	学 科	表彰者
福岡工業大学	工学部	電子情報工学科	三好 優衣
		情報通信工学科	犬塚 陽菜
	情報工学部	情報工学科	関本 一輝
		情報システム工学科	池田 昂
		システムマネジメント学科	諫山 紫苑
九州産業大学	理工学部	情報科学科	緒方 康孝
		電気工学科	木下 隼人
九州工業大学	工学部	機械知能工学科 知能制御工学コース	高橋 礼生
		電気電子工学科 電子システム工学コース	倉田 一輝
	情報工学部	物理情報工学科	樋口 裕之介
		情報・通信工学科	瀧口 和樹
		知能情報工学科	山田 悠稀
		知的システム工学科	山本 健人
北九州市立大学	国際環境工学部	情報システム工学科	岡崎 圭哉
久留米工業大学	工学部	情報ネットワーク工学科	和泉 朋希
西日本工業大学	工学部	総合システム工学科 電気情報工学系知能制御コース	海下 航
		総合システム工学科 電気情報工学系情報コース	入江 友
近畿大学	産業理工学部	電気電子工学科	青木 大地
		情報学科	河野 蒼真
佐賀大学	理工学部	理工学科 情報ネットワーク工学コース	江口 龍之介
		理工学科 知能情報システム工学コース	須賀 友基
		理工学科 電気エネルギー工学コース	中原 健太
		理工学科 電子デバイス工学コース	江田 龍宇一
長崎大学	工学部	工学科 情報工学コース	福田 航生
		工学科 電気電子工学コース	林 宏明
長崎総合科学大学	工学部	工学科 電気電子工学コース	松嶋 亮兵
	総合情報学部	総合情報学科 知能情報コース	松本 涼
熊本大学	工学部	情報電気工学科 電気工学教育プログラム	小室 卓登
		情報電気工学科 電子工学教育プログラム	小野 綾太
		情報電気工学科 情報工学教育プログラム	大窪 啓士
崇城大学	情報学部	情報学科 電気電子通信コース	木村 隼也
		情報学科 ソフトウェアサイエンスコース	宮村 規誠
		情報学科 メディアインテリジェンスコース	柏木 大知
東海大学	基盤工学部	電気電子情報工学科	五島 亜智
大分大学	理工学部	創生工学科 電気電子コース	佐世 蓮太郎
		創生工学科 電気電子コース	白井 祐大
		共創理工学科 知能情報システムコース	下郡 美優
宮崎大学	工学部	電気システム工学科	江藤 寿祥
		情報システム工学科	翁長 春樹
鹿児島大学	工学部	電気電子工学科	三輪 啓伍
		情報生体システム工学科	濱田 悠樹
第一工科大学	工学部	情報電子システム工学科	眞鍋 武
琉球大学	工学部	工学科 電子情報通信コース	玉山 涼華
		工学科 電気システム工学コース	千本木 良精
		工学科 知能情報コース	土方 敦也

学校名	学科名	表彰者
北九州工業高等専門学校	生産デザイン工学科 知能ロボットシステムコース	上野 隼
	生産デザイン工学科 情報システムコース	白土 拓実
有明工業高等専門学校	創造工学科 情報システムコース	古賀 大翔
久留米工業高等専門学校	制御情報工学科	月足 友音
佐世保工業高等専門学校	電子制御工学科	吉村 駿汰
熊本高等専門学校	人間情報システム工学科	岩野 空仁
	情報通信エレクトロニクス工学科	芹川 直夢
	制御情報システム工学科	栗原 満愛
大分工業高等専門学校	電気電子工学科	徳永 仁彦
	情報工学科	望月 龍一
都城工業高等専門学校	電気情報工学科	植田 丞美
鹿児島工業高等専門学校	情報工学科	福迫 太一
	電子制御工学科	原口 卓馬
	電気電子工学科	福永 連太郎
沖縄工業高等専門学校	情報通信システム工学科	星 草汰

	メディア情報工学科	仲宗根 義尊
--	-----------	--------

10-2-4 2022 年度 学術奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記の 27 名を選定し、2023 年 3 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

所 属		表彰者
九州大学	大学院システム情報科学府情報理工学専攻	浅海 標徳
福岡大学	大学院工学研究科電子情報工学専攻	今村 賢幸
福岡工業大学	大学院工学研究科情報通信工学専攻	内村 将大
九州産業大学	大学院情報科学研究科情報科学専攻	QU LJING
九州工業大学	大学院工学府工学専攻	近藤 優吉
	大学院情報工学府学際情報工学専攻	塩田 拓海
北九州市立大学	大学院国際環境工学研究科情報工学専攻	川崎 凌大
久留米工業大学	大学院工学研究科電子情報システム工学専攻	釘嶋 かれん
西日本工業大学	大学院工学研究科生産・環境システム専攻	野口 和宏
近畿大学	大学院産業理工学研究科電子情報工学コース	甲斐 慎治
佐賀大学	大学院理工学研究科電気電子工学コース	吉地 琢真
長崎大学	大学院工学研究科総合工学専攻	高尾 航佑
長崎総合科学大学	大学院工学研究科電子情報学専攻	松下 歩
熊本大学	大学院自然科学教育部 博士前期課程 情報電気工学専攻	神林 尚樹
崇城大学	大学院工学研究科応用情報学専攻	松永 卓也
大分大学	大学院工学研究科博士前期課程工学専攻 電気電子工学コース	柳本 崇
宮崎大学	大学院工学研究科工学専攻	井上 翔斗
鹿児島大学	大学院理工学研究科工学専攻 電気電子工学プログラム	囿田 悠希
琉球大学	大学院理工学研究科工学専攻	宮良 諒
北九州工業高等専門学校	専攻科生産デザイン工学専攻	安野 裕貴
有明工業高等専門学校	専攻科生産情報システム工学専攻	山崎 康司
佐世保工業高等専門学校	専攻科情報工学系	久保田 優吾
熊本高等専門学校	専攻科電子情報システム工学専攻	森本 敦己
大分工業高等専門学校	専攻科電気電子情報工学専攻	中尾 瑞生
都城工業高等専門学校	専攻科機械電気工学専攻	野口 芹菜
鹿児島工業高等専門学校	専攻科電気情報システム工学専攻	尾崎 天地
沖縄工業高等専門学校	専攻科情報工学コース	真嘉比 浩乃

以上

IV. 2022 年度役員及び代議員の構成

2022 年度役員

29 名

役 職 名	先 任	後 任
会 長	川添 雄彦	
次期会長	森川 博之	
副会長（学術強化担当）	相澤 清晴	眞田 幸俊
副会長（学会運営・組織強化担当）	西原 基夫	浅井光太郎
総務理事	菊間 信良	岡 宗一
会計理事	石川 悦子	井上 真杉
編集理事	高村 誠之	佐波 孝彦
企画理事	山本 剛之	太田 賢
調査理事	尾上 孝雄	伊達木 隆
編集長（理事）	笹瀬 巖	
企画戦略室長（理事）	水落 隆司	
規格調査会委員長（理事）	浅谷 耕一	
ESS 会長（理事）	鎌部 浩	
CS 会長（理事）	辻 ゆかり	
ES 会長（理事）	藤島 実	
ISS 会長（理事）	佐藤 真一	
ESS 次期会長（理事）	梶川 嘉延	
CS 次期会長（理事）	笠原 正治	
ES 次期会長（理事）	川西 哲也	
ISS 次期会長（理事）	藤井 俊彰	
監 事	三宅 功	河東 晴子

2022 年度代議員

109 名

相澤 清晴	大橋 正良	小玉 崇宏	高橋 浩	西原 基夫	水落 隆司
浅谷 耕一	押切 正浩	小林 弘和	高村 誠之	布目 敏郎	峰野 博史
足立 朋子	尾上 孝雄	坂井 博	多川 孝央	野林 大起	三宅 功
安部田 貞行	笠原 正治	笹瀬 巖	滝田 亘	葉玉 寿弥	宮永 喜一
安藤 雅洋	柏野 邦夫	佐藤 真一	田口 亮	羽山 徹彩	山崎 達也
飯島 隆浩	鎌部 浩	佐藤 優	田中 良明	彦田 悟	山里 敬也
石川 悦子	河合 浩行	佐藤 洋一	田邊 孝純	福島 誠治	山田 昭雄
石田 亨	川添 雄彦	眞田 幸俊	中條 涉	福知 清	山中 直明
井上美智子	川端 明生	塩本 公平	辻 ゆかり	藤井 輝也	山本 剛之
今井 順一	川本 雄一	柴田 幸司	津田 裕之	藤島 実	湯川 高志
今井 浩	姜 錫	柴田 随道	寺田 純	藤吉 正明	吉田 毅
岩野 公司	菊間 信良	白勢 政明	中沢 正隆	前田 英作	吉田 智暁
上嶋 明	黄瀬 浩一	神野 健哉	中嶋 徳正	前田 譲治	渡辺 虎之介
植松 友彦	北川 章夫	神野 正彦	中田 崇行	間瀬 健二	渡辺 昌洋
牛久 祥孝	木下 史也	杉田 憲一	永妻 忠夫	松井 知子	
江村 克己	工藤 栄亮	鈴木 正敏	中山 正敏	松島 裕一	
大下 福仁	桑原 秀夫	袖 美樹子	南部 功夫	松田 崇弘	
大槻 知明	桑原 義彦	園田 智紀	西原 明法	松永 裕介	
大橋 弘美	小嶋 徹也	高橋 篤司	西原 浩志	三科 健	

V. 2023 年度役員候補者及び代議員の選挙

2023 年度役員候補者（規則第 5 章）及び代議員（定款第 5 条 3 項及び 6 項）の選挙は、2023 年 2 月 7 日～3 月 7 日に Web による投票で実施した。

-----< 参 考 >-----

2023 年度代議員

106 名

相澤 清晴 アギレエルナン	太田 賢 太田 隆博	菊池 仁 菊間 信良	高村 誠之 宝田 隼	葉玉 寿弥 馬場 暁	守屋 俊夫 安野恵実子
浅井光太郎	大橋 弘美	楠 晃典	竹内 啓悟	原田 崇司	山里 敬也
浅谷 耕一	大橋 正良	小林 正宏	橘 拓至	藤井 威生	山田 昭雄
足立 朋子	岡 宗一	坂本 雄児	伊達木 隆	藤井 俊彰	山中 直明
安部田貞行	尾上 孝雄	佐々木宣介	田中 良明	藤島 実	山本 剛之
飯田 佑輔	葛西 恵介	笹瀬 巖	太郎丸 真	前田 譲治	横谷 哲也
伊賀崎伴彦	笠原 正治	佐藤 真一	陳 強	正柳 博之	吉田 享広
石川 悦子	梶川 嘉延	佐藤 洋一	辻 ゆかり	松井 知子	米澤 拓郎
石田 亨	柏野 邦夫	眞田 幸俊	津田 裕之	松島 裕一	和田 親宗
伊藤 信之	加藤 景三	佐波 孝彦	寺田 純	松田 広	渡辺 昌洋
稲垣 潤	鎌部 浩	椎屋 和久	永妻 忠夫	松原 崇	
井上 真杉	亀田 裕介	塩本 公平	仲村 泰明	松本 慎平	
今田 美幸	川上 朋也	清水 隆志	中山 正敏	三浦 達	
岩井 誠人	川添 雄彦	白尾 瑞基	難波 一輝	水落 隆司	
岩野 公司	川西 哲也	鈴木恵治郎	西田 好宏	三宅 功	
植松 友彦	川端 明生	鈴木 正敏	西原 明法	村上 修二	
宇佐見庄五	河東 晴子	高橋 篤司	西原 基夫	森川 博之	
内田 誠一	姜 錫	高橋 浩	野村 亮	森永 聡	